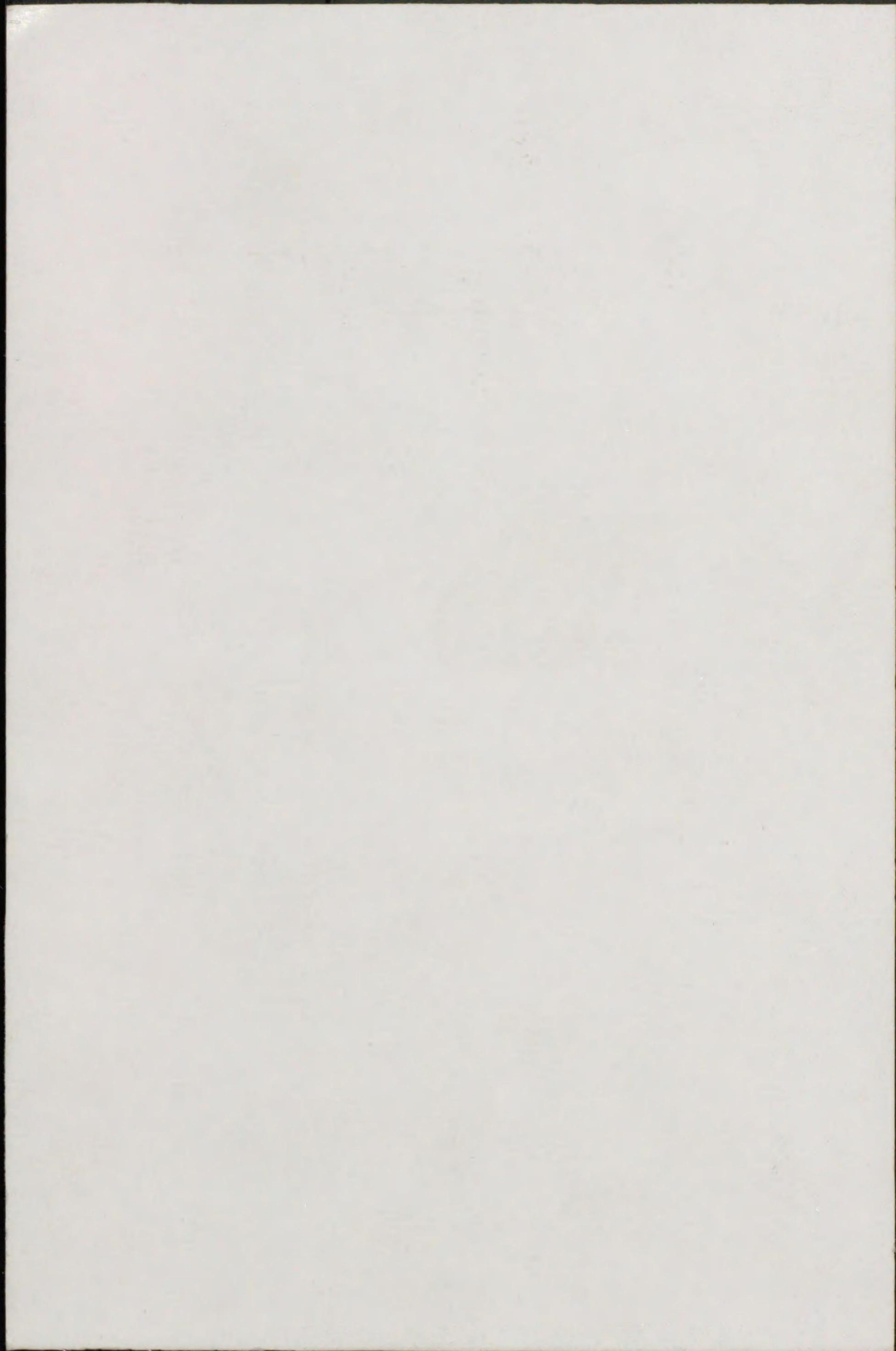


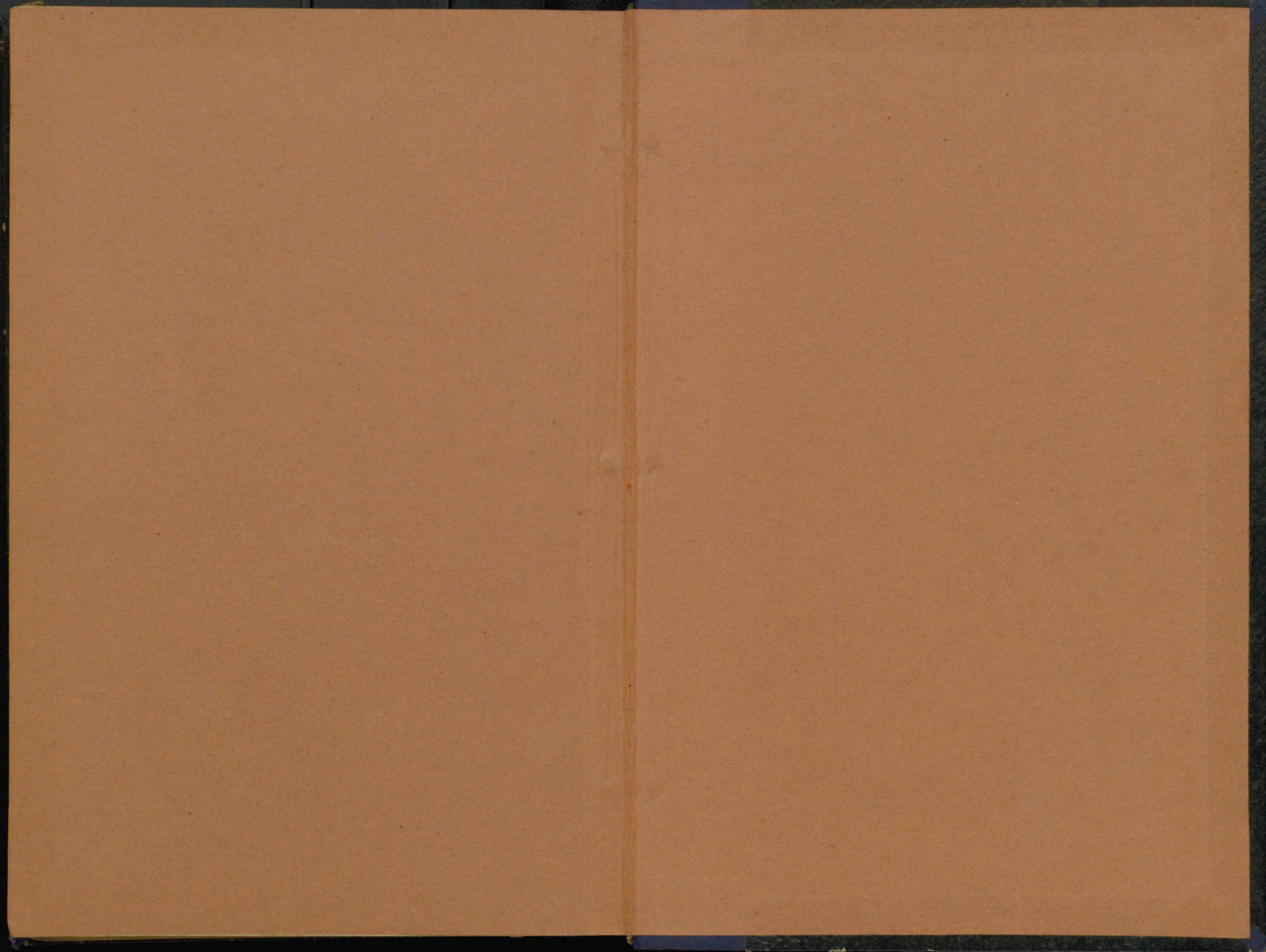
597-111



1200501528330









時事新報社經濟部編

商賣打明話



家庭の經濟知識

株式會社 寶文館藏版





序

日本婦人の經濟智識は近來大いに向上して來て居る。けれど直接最も必要なる消費經濟方面の智識の啓發が存外に閑却され勝ちであるのは遺憾である。仍て時事新報は聊か家庭の主婦たる人々の爲めにと夕刊の第四面を割愛して家庭經濟の一欄を設け、主に消費經濟方面の實際智識を連掲して來た。其内、へそ繰術と云ふと語弊があるが、貯蓄利殖に關するものや、商品智識及び小賣商、露店商人或は月賦販賣業等日常家庭と交渉の深い商人の打明話等をも纏めて、臺所經濟改善の一助にと此一卷を編んだ。勿論當初から主として家庭經濟向きとして書いたものであるが、然し利殖或は商賣撰擇と云つた方にも役立てば幸ひである。



時事新報社に於て  
編者 しろす

# 商賣打明話

(家庭經濟の知識)

## 目次

### 利殖の實際智識(確實な利殖方法)

序	何うしたら金が残るか……金の能率増進策——先づイカ モノ御注意——一代の貯金魔………三
1	無盡の話……モグリと公認——外交員の口車—— 契約の際の注意——無盡の利殖率………一〇
2	株式債券利殖……二夫人の實話………一六
3	公債の話……其の利用方法——選舉の保 證金——其他の利用方法………一八
4	社債の話……其の選び方………二五
5	勸業債券の話……いかさま債券屋——勸業債 券運用法——債券の保管法………二七
6	株式の話……株式會社とは——株式の選び方——既設と新設會社——經營者 の人物——業種は二次的——掘り出物の力と人の力——事業の危 險——油蟲の居る會社——不良現株屋——投資——株式賣買の危 位——株屋さんの撰方——手数料と受渡——賣買の時機 と新店——實株の賣買法………三三



# 商賣打明話

## 一、小賣店

序	東京の小賣店狀況……販賣行進曲—新陳代謝の時の波— 小賣店界の兩大關—山の手と下町……………六一
1	菓子屋の巻……下戸で建てる倉—會社直營店の進出— 足利義政と餵頭—ビスケットの秘密……………六九
2	酒屋の巻……新規開業の資本調—激烈な販賣戰—酒醬油のから くり—下町と山手の異色—醬油味噌の儲け具合……………七五
酒	酒相場の定め方—酒の種類—酒の買ひ方……………八四
鹽	鹽の貯藏—柿の實止めに鹽—改むべき惡習……………八九
醬油	鹽の專賣制度—制鹽技術の進歩—溫泉で煮た鹽……………八九
3	藥屋の巻……其の作り方—日本醬油の破産— 近頃の醬油—善惡の見分け方……………一〇一
4	牛肉店の巻……藥は東京の名物—賣りいゝ賣藥—化粧品のか らくり—妙藥黒燒の由來—黒燒のいろく……………一〇六
5	煙草屋の巻……東京の肉類消費高—原價 と小賣値—機械切りの肉……………一一四
6	白米店の巻……勘定合つて錢足らず—混合で儲ける—白米商の 手品—メートル法の注意—組合と組合の制裁……………一二六
米	胃袋の偉大さ—軟質米と硬質米—味付米、厄介米—臺 所へ届く迄—市場の亂立—大黒屋の飯—味は炊き方次 第—白米の選び方—彌穀町の米相場—もち米と餅の話……………一二四
7	書籍店の巻……米の話し…… 雜誌數五百九十四—新規開業の手引— 問屋との取引契約—カツバライ御用心……………一三六
8	洋服屋の巻……注文服の値段—既製品は何故安い……………一四三
9	柳原の古着屋……案内儲る—神田橋古着市場—古着の洋行……………一五三
10	呉服店の巻……其の儲け工合—特價品賣出の内幕……………一七三
人絹織物	人絹と天絹—人絹製造の歴史—人絹製造の色々—人絹 高級製品—人絹の見分方—人絹織物の値段—百貨店と……一七六
モスリン	人絹—洗ひ方の注意—干し方の注意—人絹織物の産地 ハツピ—コート—モスの産額……………一九二
	—共販と相場—モスの見分方……………一九二

5	煙草屋の巻……岩屋天狗の鼻張リ—安もの、 時代なる哉—新規開業の手續……………一二〇
6	白米店の巻……勘定合つて錢足らず—混合で儲ける—白米商の 手品—メートル法の注意—組合と組合の制裁……………一二六
米	胃袋の偉大さ—軟質米と硬質米—味付米、厄介米—臺 所へ届く迄—市場の亂立—大黒屋の飯—味は炊き方次 第—白米の選び方—彌穀町の米相場—もち米と餅の話……………一二四
7	書籍店の巻……米の話し…… 雜誌數五百九十四—新規開業の手引— 問屋との取引契約—カツバライ御用心……………一三六
8	洋服屋の巻……注文服の値段—既製品は何故安い……………一四三
9	柳原の古着屋……案内儲る—神田橋古着市場—古着の洋行……………一五三
10	呉服店の巻……其の儲け工合—特價品賣出の内幕……………一七三
人絹織物	人絹と天絹—人絹製造の歴史—人絹製造の色々—人絹 高級製品—人絹の見分方—人絹織物の値段—百貨店と……一七六
モスリン	人絹—洗ひ方の注意—干し方の注意—人絹織物の産地 ハツピ—コート—モスの産額……………一九二
	—共販と相場—モスの見分方……………一九二



○

富士絹……強敵はモスリン—輸出向と内地向—富士絹の原糸—糸の工程と用途—人絹との關係……………一六六

其他の織物……ちびみ—きぬ麻—まがい麻—ケルツプ地—タ—オル地—手拭中形浴衣—紙の單衣帶—夏のカ—テン—其他織物の見分方—メリヤス見分方……………二二三

蒲團綿……綿の見分方—青梅綿は支那産—丹前用の綿……………二二三

11 文房具店の巻……文房具社會相—新規開業の手引……………二二七

紙の話……紙の製造高—文化と紙の需要……………二二〇

12 八百屋の巻……金のかゝらぬ商賣—昔乍の袖の下取引—堅い所—利益は二割—促成物と抑制物—バナナの良否……………二二四

13 漬物佃煮屋……純益は一割五分—新規開業と資本—澤庵の見分方—梅干の見分方……………二二三

14 乾物店の巻……儲けは薄い商賣—商賣敵は『蟲』……………二二九

麥粉(うどん粉、めりけん粉)……麥粉の總産高—東洋一の日清粉……………二四一

鹽鮭の話……舞踊家と文化的鮭—根室産—が本場物—良否の見分方……………二四七

鶏卵……内地卵と輸入卵—安い支那卵—地廻りと三州玉—善惡の見別方—買方の注意……………二五四

15 海苔の話……その見分け方—一體何うして作る—ショ引の海苔—全國年産千五百萬圓—祖國の味がする……………二六〇

16 靴屋の巻……靴屋の商略—百貨店の靴—ゴ—靴の秘密—手製と機械製……………二六九

17 下駄屋の巻……破れ鼓が登龍門—下駄屋の儲け時—フエルト全盛—桐の見分け方……………二七五

18 ラチオ屋……旺盛なラチオ熱—ホル者久からず—物凄い濫賣戰……………二八〇

19 蓄音機屋…………………二八七

20 其他の商品智識……………二八八

肥料の色々……首相の肥料分配論—肥料成分の話—内地と外國—政府の管理法案—補助肥料—殺蟲劑のいろ／＼……………二八八

セメント……その使ひ方……………二九八

冷蔵庫……種類と選び方……………三〇〇

時計の色々…………………三〇三

商品券の話…………………三〇六



二月賦店

米國で大流行

自動車  
の月賦  
家具の  
月賦店  
お客は  
勤め人  
に就て  
日本  
の月賦  
販売  
……  
三七

三、露店の秘密

常設店と臨時店

露店  
の秘密  
……  
露店  
の組合  
……  
露店  
の分類  
……  
露店  
の御  
……  
露店  
の文  
……  
露店  
の藝  
……  
露店  
の日  
……  
三三

目次終り

利殖の實際智識

確實な利殖方法



何うしたら金が残るか

はたらけど、はたらけど

樂にならざりチツと手を見る

星を頂いて出で、月を仰いで歸る、力と汗にはたらけど、はたらけど依然たる其日暮し、之では生涯の計を何とすべき？、或は少し蓄財もあれど家にもならず地にも足らず、それは安全に確實に又より有利に何うして殖やすべき？。情ある父は吾に三頃けいの田と、一と角かくの家屋敷を遺したり、敢て綺羅を張らねばたつきに事を缺くこともなし、さはあれ資財の管理運用を如何にすべき？

無くば無きに病み、有れば有るに考へる。まことに近代の生活は悉く之れ金の戦ひとも云へる。自らは敢て惑はず清貧いさぎよしとしても老たる父、夫無き跡の妻、いたいけな子等のゆく末。之れ等の爲め夫として妻として無爲に過ごしてよいであらうか。

「遊人不變春將老、來往亭前譜落花」



ある詩にこう云つた句があつた。未だ若いと思ふのも束の間で、春すぎれば落花、一葉落ちれば天下の秋。生涯の計を樹て得る時は正に活動力旺盛の時と云はねばならない。……と大變固苦しいことを前置きにしたが、本題は如何にすれば金が残るかである。勿論單に茲に掲げる全部が、金の使ひ方、利殖法、残し方の全部ではない。先づ原則として經濟的に安定したる生活に入らうとするには

- 一、家庭の和樂を第一とす
  - 一、家庭内の整備に依つて規律正しき習慣をつけること。
  - 一、見得を張るな。氣前を見せるな
  - 一、一紙半錢と雖も粗末にするな
- と云つた如く、先づ家納まつて消費が合理的であらねば、蓋し何時まで経つても働けど働けど樂にならざり……であろう

たゞ然し家庭和樂の金城鐵壁に閉ぢこもつて、勤儉節約の智慧のない墜濠戰を繰り返へして居たのではウタツは容易に上らない。主婦は家計を合理化して主人後顧の憂ひを斷ち、主人は表に立つて馬力をかけ攻防兩様の共同戰線を張つて積極的の生活戰を行ふことである。かくて

始めて『はたらけどはたらけど』の嘆を封ずることが出来る。家計の合理化としては『金錢の能率を高める』『金利を粗末にするな』『贅元な消費の排除』『無精をせぬこと』等いろ／＼の法があらう。例へば金錢の能率を高める方法として日常消耗品の大量買入れなぞ其一例である。

**金の能率増進策** 即ち今までの實例に依ると、木炭の相場は六七八の夏三ヶ月の間が一年中で一番安い、そして夫から毎年判で押たように月毎にデリデリ上つて十二月一月二月の冬三ヶ月の間は年中一番の高値を現はす。大正十二年には其の安値に比べて冬には六十五錢高、十三年が四十錢高、十四年が五十錢高、十五年が二十錢高、昭和二年が約二十二錢高（楯割五貫儀標準）となつておる。

そこで置場に餘裕ある家庭では夏の中に一と纏めに買込まれて置いた方が有利である。左すれば僅か六ヶ月先の冬になつて、時價より一割以上も安い炭が使へる譯ですから……否二十儀なり三十儀なり纏めて問屋から買入れて置くならば、恐らく冬にはそれ以上或は優に二割以上も安いものを使へると云ふ勘定になるかも知れぬ。強がち炭に限らず石炭、石油、紙等腐らぬものはこの大量買入れに向く。



兎も角夏の賞與配當等の纏まつた収入を利用して大量的に日用消耗品を買入れておくこと云ふことは遣り方に依つて餘程經濟的になる。これに依つて消耗品費の年額一割なり二割なりを節約することは恐らく易々たるものであらう。兎も角も日常消費の合理化、餘剩資力を作るのは先づ日常必需品見分け方や買入れ方等の知識が先づ第一に必要なべきものであつて、別章商賣打明話の項中日常必需品の智識欄に於て御覽ありたい。

儲てこうして蓄積した金も死蔵して居たのでは殖へ方が鈍い。此の利殖方法こそ貧富一新の鍵を握るものである。然るに世間には只利殖の念計り盛んであつて、利殖の根底を爲す金利を丸で疎かにし、只大利のみ狙ふものが多い、そして又研究もせず調査もせず迂かつに金を運用する人が少くない。これでは決して金は殖へない。然らば利殖の要諦は何のであるか、夫れは塵を積んで山となす覺悟を定めることが第一である。諺にも『いそがば廻れ』と云うことがあらう。相場など云うものは素寒貧が一日にしてよく巨萬の成金となり得ることもあるが、然し其反面に於て幾多悲惨なる失敗者が潜まれておるのである。致富の策では決してない。

成功は自他ともに聲を大にして云ふ、然し失敗は其人自身恥として秘すると同時に他も亦之れを傳へることを慎しむであらう。投機界に於て殊に左様である、従つて投機に就ては成功者

の名のみ大きく傳へられ失敗者のことは餘り知られない。此の消息を知らずに投機の成功にあこがれることは、甘すぎる。若投機が夫れ程確かに儲かるならば夫れを本職にして居る玄人の仲買人などは既に悉く巨萬の成金になつて居らねばなりません。

投機計りではない、よく世間には棚からボタ餅の落ちて来るような話がある、ヤレ本會の會員になると年五割の利益を分配するとか、此の土地此の品を買つて置けば忽ち倍になるの三倍になるの、……いろ／＼甘い話が多すぎる。然しそんなに世間にうまい話があるものではない、こうしたものゝ多くはイカものである。早く金を殖やそうとして投機を試み或ひはイカものをつかんで遂に元も子も臺なしにした例は數限りもない。『急がば廻れ』蓋し之れは利殖の秘訣である。

先づ筆者は投機の話しやイカものゝ話、殊に今世間にあるイカモノ、夫等を一とわたり解剖して見る。

先づイカモノ御注意

郊外電車の發達に連れ、大都市附近郊外の發展振りは近來まことに目覺ましいものである。之に連れて郊外土地の賣買賃借を目的に土地會社や個人の土地ブローカーなどが雨後の筍のように殖へて來た。



これは少し前の話であるが、或土地會社が神奈川縣逗子の別荘地の分譲を始めた。何しろ不如歸で有名なあの風光明媚な海岸、然も交通の便もよし、殊に會社の廣告によると下水々道の設備は完全であるし、夫れに比較的に値が安い。そこで随分之れに引つけられて知名の連中まで買入方を申込んだ。

太平洋の青波を前に、松林を渉る涼風にかこまれた瀟洒な一と構へこそ夏の夜の如何に樂しがるべき……なぞとお互勝手に空想を逞しうし氣早な連中は吾れ勝ちにと普請にかゝつた。何ぞ計らん此の土地はその會社のものではなかつたのだから、忽ちあつちにもこつちにも紛擾が起つた。

そうであらう、此の土地會社は初めからイカモノで、土地發展の爲めとか何とか甘い口前で土地の百姓や慾張り地主を説き付け、ホンの僅かの手金を拂ひ跡金は買手から金を受取つた時に拂ふと云ふ約束で其土地の分譲をウマク引受けたのである。そして買手から申込金をせしめサツサと何處かへ引き揚げて仕舞つた。

結局買方は地主と直接談判で買取つたものもあつたが、大方は申込金文け取られ損に終つたそうだ。これは不正土地會社によくある例で、之れが爲めに非道い目にあつた地主や買方は却

々少くない。

一代の貯金魔「誰にも出来る一萬圓の貯金」で大げさな宣傳をし一時は斯界の成功者と云はれ貴族院議員にまで當選した高柳某と云ふ男があつた。

話し遡つてズツと前に「色黒くお困まりの方にお告げす」高柳何子とか書いて色の白くならんとか云ふ譯けの判らぬ藥を賣つて居た婦人がある。之れこそ高柳の妻君であつた、當時の高柳某は神田邊の露地の奥にくすぶつて、頻りと何か甘い儲け口はないものかと鶉の目鷹の目で狙つて居たものである。當座の食ひ扶持稼ぎに始めた此の妻君の色白新藥が大いに當つて小金も出来、夫れで又株式相場を張つて小當りに當つたもので、之れを本に貯金會社をたくらみ巧妙な宣傳で會員を釣り込むと云ふ大それた計畫にまで發展したものである。天網疎にして一時はエライ景氣であつた。

去り乍ら元々山勘の彼れが之れでおとなしくして居る筈もなし、此の上は一番更らに金を儲ける看板には貴族院議員となつて會社にも箔をつけ、一と大芝居を打たんものと金をバラまいて選舉にかゝつたお影で見事當選した。そこまでは無事であつたが忽ち投票買収の尻が割れて選舉法違反でトウ／＼縛られると同時に崩れ出した山勘仕事は忽ち總崩れになつて仕舞つた。



貯金會社の内幕がさらけ出されて世間がアツト驚いた時には、會員の積立金はトツクの昔に煙の如く土くれの如くめちや／＼に飛んで居たのである。色々の山勘仕事に會社の金を使ひ込み、會社に大穴をあけたのであるが、之れは當時「貯金魔高柳某」として新聞社會面を賑はしたと先刻御承知の通りである。儲てこうした實例をあげると數限りもなく、世の中には利殖の好餌を垂れて正直物を釣つて惡富を積まんものと爪を磨いで居るものがウヨ／＼居る。利殖に當つて先づ戒心を要するものはこうしたイカモノや、山勘會社である。

無盡の話

モグリと公認 資金蓄積の初歩は自覺した生活、消費の合理化に出發する。斯くて貯蓄先づ成つて始めて資金の利殖運用に至る譯けである。茲で慾を乾かして相場でも張ると云ふ様なことをすれば千日の苦心も一時に煙に化して仕舞ふであらう。株式や米等にしても相場は千年も萬年も先まで行はれるに相異なる、仕度ければ何時でも出来る。何を慌て、折角苦心の蓄積を一時に叩いて仕舞ふ必要はないではあるまいか。且つは最も確實なる金の殖やし方は決して相場ではない。實に利子の蓄積にあることは古往今來天下の眞理である。

先づ貯蓄利殖の方法としては郵便貯金、銀行貯蓄、保險の契約等いろいろある、然し之れ等の方法に比較すれば證券の投資、或は信託會社の利用方法等他に有利確實なものもある、追々述べるとして無盡なぞも一の利殖方法である。

尤も目下の所では無盡は世間からは貯蓄方法と云ふよりも寧ろ融通の方法として利用されて居るようであるが、貯蓄方法としても相當有利なものである。然し此の無盡に就ては餘程注意せぬと引つ掛り易い。勿論知人や、同職同村の有志などが集まつて會員組織でゆく頼もし講と云つたものは別で、茲では商賣として營業して居る無盡のことを書いて見る。

此の營業にして居る無盡業は大藏省の調査に據ると、昭和二年十一月現在で全國總計二百五十三、内個人組織のものが十九で、他は悉く會社組織である、そしてその資本金總額が二千九百九十九萬二千圓に上つて居る。此の無盡會社に加入して居る人の契約金額が約此の二倍即ち約六千萬圓位と云ふことで、合計してザツと一億圓の金が無盡によつて使はれて居る勘定で中々以て馬鹿にはならない。

然し之れは所謂公認の無盡業、の分だけであつて、此の外モグリの無盡や例の頼母子講の類



をも入れたら可成の巨額になる。儲て此の無盡業と云ふのは無盡業法なる法律に依つて太藏大臣の認可を得ねば始められぬものである、そして此の無盡業法の規定の下に嚴重な監督を受けることゝなつて居る。そして又此の公認無盡業は必ず商號中に無盡の字を入れることに定められ、同時に公認ならざる無盡業は絶対に商號中に無盡なる文字を使用することを許されないのである。であるから公認の無盡業かモグリであるかは、大藏省免許の字と無盡と云ふ字があるか無いかで區別がつく。然し世間にはモグリであり乍ら圖々しく公認のように觸れ込んであるくものも少くないから注意肝腎。若し迷つた場合は縣の勸業課なり警察署或は大藏省等に返信付きで公認か非公認を照會するのも一方法である。

**外交員の口車** 公認とモグリとの區別は付いたが、公認の無盡業なら何れでも確實安心と云ふ譯には參らぬ。夫れ故加入しようと思ふものは先づ以てその無盡業者が確實であるか何うかを確かめる必要があらう。

警視廳當局者の話に依ると此の無盡のことに就て同廳や管下警察の人事相談係に智慧を借りに来るものが月平均約二十件位づゝあるそうなる。其の多くは自分の加入して居る無盡が怪しい、或は約束を履行せぬからと云つた種類の相談であると云ふことだ。

記者の聞知する所でも無盡業に對する多くの苦情は『約束通り金を貸して呉れぬ』とか『約束の配當を呉れぬ』或は途中解約したが解約金を渡さぬ『無盡會社が行方不明になつた』と云ふものが多い。そして其の事情をよく聞いて見ると、大部分外交員の出鱈目と夫れを迂かつに信じ碌々確めもせず加入したと云ふのが其原因になつて居る。之れは寧ろ加入者の手ぬかりと申さねばなるまい。

或官吏の夫人は『二回お掛けになれば當り籤を何とか都合させよう。夫れが駄目でしたら他の人のを融通して来て上げる』と云つた外交員の口車に乗つて加入したのであるが、成程二三回掛け金の後に貸出をすると會社から通知が来た。然し夫れには不動産か有價證券の擔保或は市中に幾らゝの不動産を有する二名の保證人を立てるとの事であつた。

之れなら何にも無盡に入るのではなかつたと憤慨したのだつたが、之れはその夫人の迂かつである。一人でも加入者を得れば歩合に有りつける外交員のことである、人に依つては何んな出まかせを云はないものでもない……即ちその會社の貸出規定を見たら、チャンと貸出の場合にはシカクゝの保證を取ると云ふ事を定めてあつた。そこで借り出しが目的であつても、將又貯蓄の爲めであるにしても、無盡に入らうと云ふ時



は只外交員の口前丈けを信じたのではないかない、折角その會社の規程なるものを取り寄せて念を入れて観て置く必要がある。何うも一體世間の奥さん方はこう云ふことにかけては甚だ不詮索で夫れが爲めに往々にして大切の齎くりを棒に振つて居る。先づ無盡に入るには第一に公認か否かを確かめ第二に規程をよく観ること。第三に經營して居る人物を観ることである。

契約の際の注意

借いよ／＼無盡を契約する段になつて注意を要する點は、無盡契約書である、此の無盡契約書には無盡契約々款の全文を必ず付けることに法定されてある、付いて居なかつたら請求しなければいけない、そして此の約款には必ず

- 一、抽籤入札其他給付の順位を定める方法
- 一、入札の場合に於ける最低手取金高の制限
- 一、入札差金分配の方法
- 一、掛金の取立又は拂込の方法
- 一、掛金に對する保證又は擔保の法
- 一、掛金延滞の場合に於ける違約金又は遅延利息に關すること
- 一、無盡契約解除の條件及効果に關すること

一、無盡契約に基く權利義務の讓渡に關すること

等が定められのであるからよく之れ等の事項を熟讀され、夫れから當籤の場合の給付金を受取る時の保證や何かに就ての會社の内規なども充分に確かめなざるがよい。かうして契約されば先づ大過はない筈。次ぎに契約後無盡會社の内容や無盡籤のことなど調べたいと思つた時は何うしたがよいかと申すと

法律に據つて無盡業者は、毎半年の貸借對照表を作り、之れを新聞廣告其他で發表せねばならぬことになつておる。掛金者は其無盡業者に對し營業時間内は何時でも此前半年末貸借對照表の閱覽を請求することが出来るのである。又無盡業者は無盡の抽籤入札の都度其の收支の計算を帳簿に記載し、次回の抽籤入札の前日迄に之れを營業所に備へ付けておかねばならない。そして掛金者は掛金者の五分ノ一の同意を得れば右の帳簿中自分の加入したる無盡に關する部分の閱覽を求めることが出来る。

斯様にして自分の腑に落ちぬ點はドシ／＼無盡業者に向つて説明を求めることが出来るのである。

無盡の利殖率

掛金者が前記書類の閱覽を求めた時無盡業者が正當の理由なく閱覽を拒む



と其の無盡業の責任者は十圓以上千圓以下の過料に處せられることになつて居る。其外此の無盡業に對する取締りは中々嚴重であつて財産の狀況に就ても常に主務省の監視を受けて居る。斯様な譯りで公認の無盡業なれば、そう亂暴なものはない筈である。然し何分全國を通じて三百近くも同業者があり記者の承知して居るものは僅かに其の一部分に過ぎないのであつて、公認であるから皆が皆まで確實だとは云はれない。兎も角も證券割賦販賣業者であるとか、或は取引員、保険、銀行、信託の如き何れも信用を以て立つ商事營業に就ては何よりも先づ經營者の人物を観ることが第一である。然るべき人格者の經營するものなら先づ間違ひは少い。これに反して山氣強い連中の經營であるとしたら、目下の營業狀況が假令盛大であるにしても頓がてどんな間違ひが起らないものでもない、實例は腐る程ある。要するに無盡會社の中には掛金者に年六七分の分配金をして居るものもあり。夫れに自らの當り籤を他に譲渡して其譲渡料も受け得るとしたら貯蓄方法としても相當有利な方法であらう。

株式債券利殖

二夫人の實話

當時飛ぶ鳥を落とす程の有名な或實業家は、二十萬圓の財産と男女二人の遺兒を残して先立たれた。健氣な未亡人は夫れからは二人のお子さんの爲めセツセと利殖に精進されたが、頓て息子さんが新夫人を迎へられた時、お嬢さんが嫁がれた時兩方に各五十萬圓宛程の財産を分けられた程其財産を利殖したといふ。此御兩人は今でも亡なられた母君の恵みに感謝されて居ることであらう。

實は此の夫人は専ら株式投資に依つて其産を利殖されたのである。……イヤ夫れ丈けのも手があれば私にも出来る、と云はれる方もあらう。夫れならば改めてこう云ふ事實をお傳へする、記者の遠縁の某女は其當時中尉か或海軍々人に嫁いだ。郊外の生活に移ると同時に夫君の年一度かの賞與を投じて附近の電車會社の株式を五株十株宛と云ふ風に買纏め、今日迄に約三百株程を買入れたが、中途で其會社が増資をした爲めに、今では舊株が三百株の新株は二百株、そして主人公は今中佐に昇進されて居る。

買込み及拂込金高は總計一萬七千圓程の巨額となつたが、之れは約十七年掛りで、しかも會社から受けた配當を外に使はずにそれで株式を買入れたので、實際は懷中から出たのが約一萬二千圓、年平均七百圓程であつた、所で今此の電車株が何の位してをるかと申すと親株が約七十五圓、新株が廿二圓即ち時價に見積つて總計二萬七千圓程になる。當初は夫人を俗物だの



欲張りだのとカラかつた主人公も全く今は其の夫人の根氣と、そして増殖に驚きもし又喜んで居る。夫れ計りではない此の株式の配當が今では年に約千九百圓程入るので、その夫人は夫れ丈け又其株式を買足して行く。……何株まで殖えるでせう……記者は直接此の事實を見せつけられて利殖の話をかくのが少々氣まりが悪くなつたことがある。……イヤそう云つては居られない、夫れでは勇を鼓して株式や債券の買入れ方のお話しをする。

公債の話

茲に債券と申すのは國債や地方債、社債、勸業債券、農工債券等を指して云ふのである。これ等の債券類の利廻りから申すと、公債が五分四五厘、地方債六分位、社債が七分位、勸業債券が六分餘であつて、郵便貯金の利子四分八厘、銀行預金の利子四分五厘乃至五分に比べて可成り有利の利廻りとする。然し之れを株式に比較すると、安全ではあるが有利とは云へない、尤も之れは黙つて其儘ジツト持つて居た時の話しであつて、之れを巧みに運用すれば同じ公債でも年一割位の利益を擧げ得る様な方法もある。夫れ等の内で素人にも出来る利用方法二三を擧げて見る。

その前に一應右の債券類とは何んなものか、及買入れ方法等に就て記して見る。簡単に云へば國債は國家の事業遂行の爲め國家が借金したもので、國債證券と云ふ借用證文を發行し、年四分とか五分の利息を拂ひ何年何月に償還すると云ふことを約束してある。今迄に發行された此の國債は數多くあつて其發行別に從つて夫れ等の條件も夫れ々異つて居る。

その中間で最も賣買が多く行はれて居る標準的の二三種のものゝ擧げて見れば、甲號五分利公債は利率五分昭和三十七年と三十八年が償還期、特別五分利は利率五分昭和十年に償還と云ふ如く相異があつて、今迄にザツト百種程の異つた内地公債が發行されて居る、此の外には外國に於て募集したものや臨時國庫證券と云ふものもある。然し發行高も多く、世間で最も廣く賣買されて居るものは、即ち甲號五分利、特別五分利、第一回第二回四分利と云つたようなものが最も素人向きと云つてよい。

借て之れ等の國債類は東京大阪其他の證券市場で常に自由に賣買されて居るのであつて、公債業者や銀行等に依頼すれば何時でも賣り買ひが出来るのである。

其の利用方法 此の公債にはいろいろの特典が附與されてある。例へば政府に供託すべき各種の保證金、即ち銀行保險會社等の營業保證金、政府或は府縣納品工事請負金の保證金、新



聞雜誌の保證金、選舉の立候補保證金等には額面即ち百圓券ならば時價が八十圓であらうと九十圓であらうと百圓に通用する。

或は恩賜財團濟生會への寄附金なども同様百圓で通る。又融通力の上から申せば銀行業者などは最も此公債擔保の貸付を安全として喜び、金利も安く又時價の九掛け位までは大概金融して呉れる、こう云つた點は他の地方債、社債、其他の債券や株券などの遠く及ばぬ有利な點であらう。

儲斯くの如く信用あり特典もあり融通力も大である爲め、従つて其利廻りの低いのは已むを得ないが、運用に依つては相當利廻りを増加せしめ得る。極めて簡單なる一方法は家賃の敷金などに之れを代用することである、現金を預て置いても利子を呉れる家主はないが、公債ならば利子は當然付くのであるから、夫れ丈けは金が寝ずに濟む譯である。

又信託會社に其公債を運用預にすると、信託會社から利子の外年に百圓に付五六十錢の運用利益の分配がある。五分五厘利廻りの公債ならこうして六分位に利廻りを増させることが出来る。

此の外に公債を利用して、之を更により以上の利廻りに運用する方法は、現に銀行や信託會社、或は個人で盛んに行つておる所であるが、其の中の二三を擧げて見る、此の中には素人も利用し得る方法があらう。

保證金の立替

新聞の案内廣告欄を見ると、よく新聞雜誌保證金立替へと云ふ廣告が出てゐる、これは年一割とか一割五分の立替料を取つて保證金立替へを行つてゐるのである。

讀者中には既に知つてゐるものもあらうが、一定の題號を用ひ、時期を定め又は六ヶ月以内の期間に於いて時期を定めずして發行する著作物及定時期以外に本著作物と同一の題號を用ひて臨時發行する著作物……之れを新聞紙法で新聞紙と云ふ、定期刊行の雜誌なども自然これに含まれてゐる。

時事問題に關する事項を掲載するこれ等新聞雜誌は、東京大阪其の市外三里以内の地で發行するものは二千圓、人口七萬以上の市及區その一區内の地で發行するものは千圓、その他の地方は五百圓、但し一ヶ月三回以下發行するものは右の半額の保證金を管轄地方官廳に納めることになつてゐる。

この保證金は大正十年の内務省令に依つて國債證券を以つて代用することを許されてゐる、さて世間には既發或は新發行の新聞雜誌の數は夥しいもので、殊に雜誌など新陳代謝の甚だ



しいもので、これ等の中には右保證金の借受けを必要とするものが多く、茲に保證金立替の商賣が立つて行く譯である。

即ちこの立替へは求めに應じて自から發行人となつては保證金を立替へ、或は立替えと同時に官廳からの保證金預り證と廢刊届を擔保代りに預つて置き、萬一の場合はこの廢刊届を出して保證金を回收し損害のないやうな準備を整へてある、即ち時價八十圓許りの四分利公債で立替へ、これに對して額面金額の年一割の立替料を取るとすれば、利廻り年一割二分五厘で公債の利子四分を加へると一割七分五厘の利廻りに當る、却々良い利殖法である。尤もこれには確實な人物を選んで立替ることが肝腎である、然らざれば多少の危険は免がれない(保證金に關する權利義務は發行人に在り)

選舉の保證金 普選第一回の總選舉では政友、民政、中立、労働黨、實業同志會など無量千名近くの候補者が火花を散らして争つた。之れ等の候補者は金二千圓也の保證金を政府に供託して議會の二席を争つたのであるが、其保證金は國債證券の代用を許されてある。時價七十圓の四分利公債を以てすれば、即ちザツト千六百圓計りあれば濟むのであるし、殊には利子も損にならないので、大部分の候補者は國債で供託した。

茲に一人の抜け目のない證券ブローカーがあつて、茲ぞと許り或兩政黨の公認候補者に限り其の保證金の立替へを始めた。第一流の候補者には立替料百圓、第二流は百五十圓、第三流以下は御面談の上と極め之れで一流、二流合計十六人の候補者に保證金を立て替へその擔保には供託證を預つておいた。落選したものもあつたが、夫れは僅かに三名そして其のブローカーが最も心配した得票法定數以下で保證金を沒收されたものは一人もなかつたとのことである。

選舉の神様! 政友會の岡崎邦輔さんや民政黨の安達謙藏さんも、三舍を避ける程の目利き方で恐れ入つたのは夫れ等の候補者自身である此の次ぎの總選舉の時もあれから借りよう、奴が貸すと云へば當選間違ひなしなど云ふ評判がパツと立つたと云ふことだ、こちらでは其の證券ブローカー、借手大喜びの内に僅か平均十五日間に實價二萬五千何百圓の公債を貸付けて立替料千九百二十圓をセシめたとはボロい。

其他の利用法 公債の利用方法としては前に述べた方法の外

- 一、私人間に於ける身元保證金信認金の立て替へ
- 一、執達吏、公證人、出納官吏等が夫れ々納入する身元保證金の立て替へ
- 一、煙草代金、鹽代金、森林取入代金等政府へ納入する代金の延納保證金の立替へ



一、度量衡販賣業者が政府に納入する身元保証金の立替へ  
 一、諸官省に於ける入札又は契約の保証金立替へ  
 等に公債を利用し其の立替へ料を得る方法等がある。  
 但し之れ等の利用法は法律關係其他に通じて居ないと往々にして飛んだ目に合ふ。或る下宿屋のお神さんは……下宿人で學校を卒業しイザ會社銀行に就職して身元保証金が入用……と云つた人に年七八分の利子で公債を以て立替へ公債の利子と合して年利廻り一割二三分に運用したそうである。

要するに公債の利用方法と云つても、畢竟するに公債に與へられた代用の特典を利用するのであつて、其の方法は以上に限らず頭と腕次第と云ふことになる。世間多くの信託業者や銀行業者證券業者等は所謂信託預りとして、百圓に付き年五六十錢の運用利益を分配してお客さんから公債を預り、之れを前記の如き方法で一割乃至二割甚だしきは四五割にも運用して其利益を收めつゝあるのである。  
 次ぎは社債、勸業債券、地方債等の買入れ方其利用方法に就てお話しする。

社債の話

地方債と云ふのは府縣市町村などの自治體が、土木とか教育或は電気水道と云つた事業遂行の爲めに借りた債務であつて、債券は即ち其の借用證書とも云ふべきものである。例へば東京市電気事業債券とか大阪築港債券とか其種類は随分多いのであつて、其利廻りは公債に比べると多少有利となつて居る。

只之れ等の地方債は前に記した東京とか大阪等の大都市の市債は融通力もあり、又常に賣買も自由で國債に次いで確實ではあるが、國債の如き特典もなく殊に小都市の債券になると賣買甚だ不自由であると云つた缺點がある。之れに比すれば寧ろ社債券即ち會社債券の方が賣買却て自由であつて利廻りも比較的有利である。

然し會社と云つてもピンからキリまであつて、南滿鐵道會社の如き半官半民の確實な大會社もあれば、先年潰れた上毛モスリン會社など云ふようなボロ會社もある。従つて社債も會社そのもの、優劣さから来る確實さの相異がある上に、又其社債が擔保付きであるか無擔保であるかと云ふことに依つても大いに相異なる。



然し無擔保でも確實な會社の社債なら萬間違ひなく、擔保付きであつてもボロ會社の社債では確實とは云はれない。前記の上毛モスリン會社或は問題となつた箱根土地會社、日本セメント會社などの社債は何れも擔保付きであつたが、然し其會社が悲況に陥り其債務が拂へず借り替へる丈けの信用すらなくなつて仕舞つて、社債券所有者が可成り苦しめられたと云ふ實例が少くない。

勿論かような場合は社債の相場も暴落するので、前記の箱根土地會社の社債なぞ夫れが爲め百圓のものが一時五十圓位と半分値になつて仕舞つたことがある。故に社債投資に就ては其擔保の有無よりも先づ會社の良否を見分けて掛ることである。

**其の選び方** 勿論社債と云ふのは其會社が事業遂行の爲め募集した債務であつて、株式會社でありさへすれば發行し得るものであるが、其發行額に就ては其會社の株式拂込額を越ゆることを得ずと商法に規定されてある。そして之等社債の償還期限は短いので二三年長いので五七年と云ふのが普通である。

昨年の銀行騒動以後金利が著しく下つた爲めに、近頃は新規に募集した社債、或は借替へ發行したものなぞ其利子が可成り安くなり、同時に前からある社債の相場も上つて、一般に社債の利廻りが下つておる、即ち一、二流會社の社債で六分五厘内外と云ふ所である。

國債よりも預金よりも有利ではあるが、只國債程の特典もなく、賣買も夫よりは稍不自由である。然し一流會社の社債であるならば、先づそうした不便もタンとあるまい。之れ等の社債買入れに當つては、其會社の株券が拂込額より高値にあるもの、例へば鐘ヶ淵紡績會社の如く五十圓の株券が二百六十圓、日本麥酒の如く五十圓株が百二十何圓もして居ると云ふ會社の社債券を選べば萬誤りはない。

銀行預金や貯金に金を二三年間も預ておくと云ふ位ならば、寧ろこう云つた確實な會社の期限の短かい社債に放資した方が比較的有利である。餘り有名でない會社の社債や地方的の會社の社債などは何うも素人には不向きで、之れは賣買が非常に不自由である。

### 勸業債券の話

御存知の勸業債券、之には大券と小券とあつて、大券は單位百圓之れは割増金がないので、世間には御馴染が薄いが、小券即ち十圓券、五圓券の割増金付のものは何しろ甘くゆけば三圓の籤にも當るとあつて、楽しみ半分世間から歡迎されておる。



何れもこれは日本勸業銀行の發行するものであつて、勸業銀行では之れによつて一般から資金を集め之れを以て勸業資金の貸出しに充て、居るのである。此の大券は日本銀行でも見返り擔保に取つておるが、小券は見返り擔保に取らない。銀行貸出しの本家本元の日本銀行が擔保に取らぬ爲め、自然銀行では面倒がつて小券擔保の小口の貸出しをいやがる。

然し此の勸業債券相手の小金融業者は全國到處にあり、又賣買取扱商も至る處にあつて賣買融通とも實は至極簡便に行はれる。こうして民衆的の融通をもつて居るのが此の債券の特色である。利廻りは目下六分内外で郵便貯金よりも有利であり、又勸業銀行は半官半民の特殊銀行であるから、確實さに於ても國債地方債に次々と云つても不可はない。

然し斯く民衆的のものであるので、又之れを種にしていろ／＼と不正を働くものがないでもない、其爲め損害を受けた方々も少くはない。其の買入方法や保管方法などに就て書く前に債券詐欺等に就ての注意を一寸申して見よう。

いかさま債券屋

勸業債券や公債を土臺にした不正手段は數々耳にする。三月中頃の社會記事の中にこう云つたのがあつた。藤原千萬(三五)と云ふ一人のシレ者は宛かも大藏省發行の復興債券と誤認し易い日本復興債券なるものを印刷し、十數名の外交員を使用し芝、本所、深

川、寺島方面に出沒せしめ、一方共犯の佐藤某を大藏省官吏のように装はしめ、跡から廻つて此の偽せ債券を土臺に又一と詐欺働くと云ふ悪辣な方法で、可成りの被害を一般に與へた。

こう云ふ實例もある。立派な洋服を着た尤もらしい紳士が勸業銀行から參つたと云ふので會つて見ると勸業債券の勧誘だ『ナニ一時に全額を御拂にならぬでもよい、十ヶ月の月賦で宜しい』と至極應揚な物言振りで、風采もいゝし、夫れに其の話の勸業債券そのものは先刻承知の確實な品物であるから、相當學問のある奥さんなぞまで、ヒヨツと此の勧誘に乗つて十枚二十枚と申し込んで仕舞ふ。

『次ぎの集金には制服着た勸業銀行の行員が上りますから』と懐ころから徐に取り出したのは堂々たる證書である。勸業債券かと思ふと左にあらず。日本勸業債券と上に目に付くように大きく刷つてあつて、下には蟲めがねで見ると小さく預り證と書いてある、然し何分立派な證書であるから、ツイと金を渡して仕舞ふ。

跡で心配して居ると翌月又も堂々とやつて来て二回目、夫れから次々と集金してゆく、いよ／＼全額拂込み近くなつて、ハタとイタチの道を極め込み影だに見せない。借は詐欺かとヤツと捕まへて聞くと店が破産したのだと濟まして居ると云つた具合。警察へ訴へた所で跡の祭り



である。勿論之れは勸業銀行の名をかたつた詐欺であるが、こうした例は數限りもない、そこで近頃は政府で證券割賦販賣取締規則なるものを作つて、政府の公認を得ないと此の月賦販賣を許さぬことにしてある。

こう云ふ月賦販賣に會つたら先づ充分に公認であるか何うかを確かめることが肝腎である。

勸業債券運用法

勸業債券の販賣を營業にして居るものは東京市内にも随分ある、日本勸業銀行が株主となつて居る。日本勸業證券株式會社など最も手広く且つ手堅く其賣買を取扱つて居る。又復興債券引受現物組合と云ふ債券業者の組合員も手堅い店が揃つて居ると云はれて居る。之れ等の債券業者は何れも豫約販賣とか擔保販賣とか云つた方法での販賣をも行つて居る、豫約販賣と云ふのは來月抽籤のある債券を一圓とか九十錢とか云つた豫約金を取つて賣る。お客さんは此の抽籤を目あてに一圓出して豫約する。籤に當らなければ殘金を出して引取るなり或は豫約金損でやめると云ふ譯けである。

擔保販賣と云ふのは十圓に付き一二圓の前金を拂つて、跡は債券を先方に托し利子を拂つて毎月抽籤を見る……と云つた方法で、兩者とも云はゞ射倖心に付け込んだ方法である。當るか當らぬか見當の付かぬ抽籤を目的に結局高いものを買ふと云ふことになるのであつて、債券買

入れの方法としては至極不利である。

夫れよりか抽籤が終つた許りで、次ぎの抽籤には何ヶ月も間があると云つた種類のものを買ふと云ふ方法の方が寧ろ大いに有利である。夫れと云ふのは通常勸業債券は抽籤期が迫ると五六十錢位相場が昂り抽籤が終ると其の位又安くなつて仕舞ふ。そこで其の安い時に買込むと云ふ譯け。

或は又抽籤期切迫して價格の上つた所で既に一旦買つてあるものを賣り拂ひ、抽籤の濟んだ別の安い債券を買ひ替へると云つた方法を取れば更らに又有利な結果を得る。當るか當らぬか判らぬ抽籤を目あてに高いものを買ふよりも此の方法の方が有利であらう。

債券の保管法

抽籤期にも遠く償還期の遠い種類の中には、六分二三厘の利廻りにも常るものがあつて、目下の如く低利の銀行預金や郵便貯金に比較すると此方が有利である。又此の利子の支拂は勸業銀行代理店の外全國一二等郵便局でも扱つておるので、利子受取上の不便も少い。

手元に之れを保管せねばならぬのが面倒だ……或は又抽籤の當り番號を調べるのが臆却だと云ふ様な場合には之れを保管して貰ふと云ふ方法もある。震災前には全國一二等郵便局では郵



便貯金のある人に對しては公債勸業債券等の無料保管をした爲めに非常に便利であつた。今は中止して居るが追つて貯金局の整理の付くのを俟つて再び開始する豫定とのことである。尤も郵便局の外勸業銀行出資の勸業證券會社なども營業として此の債券の保管を行つておる、之れは料金を取つて保管するのであるが、其の代り常に當籤番號に注意して當籤の時には通知して呉れると云つた便宜もある。

ある家庭では愛兒の誕生日やクリスマスには、衣類や玩具などを與へる代りに、五圓とか十圓の債券を其の子の爲め積立て貯蓄心を養ふと同時に又婚資や他日の用途に備へることにしたそうだが、それには勸業債券は額も手頃であり且又抽籤と云ふ楽しみもあつて、お子さん方には大いに歡迎されて居ると云ふ。

株式の話

株式會社とは茲に大變よい仕事があるが自分丈けの資力では足りない、そこで知人親類なども仲間に入つて貰ひ、夫れく相當の出資を受ける。然しまだ夫れだけのことは安くしてよいものが作れない、手廣く仕事するにはモット資本がなければならぬ、イツソ會社組織にして世間から金を集めようではないかと茲に會社が出来る。

然し金を出す方から云へば、若し其仕事に損をした場合は無限に金を取られるのでは大いに困る、出す限度を定めて欲しい、そして夫れ夫れ資力に應じて一口なり或は數百口なり數千口なり自由に出せるようにして貰ひたい。且權利も平等にし又自分の都合で出資を取り戻すとか或は會社と關係を斷ちたい時は自由に之れが出来ようであつて欲しい……と云ふ筈である。

株式會社はこう云つた出す方出して貰ふ方双方に便利な方法として選ばれ、今日の發達を遂げたものであつて、現在の大きな事業は概ね株式組織である。即ち南滿洲で鐵道や鑛山其他の大事業をやつて居る南滿鐵道會社も亦日本に於ける銀行の元締とも云ふべき日本銀行も同様株式會社組織である。株券は即ち此の出資の受取證書でもあり、又出資者の權利義務を明かにした所の證書と云つてもよろしい。

斯様にして株式會社の責任は資本金額限りで、如何に會社が損をしても、夫れ以上株主は損を負ふ責任はない、そして若亂暴な經營者が出て會社の金を勝手に消費するとか不正を働かす會社を危くせしめるようなことがあつてはと、株主擁護の必要から法律は經營者の不正を取締る爲めに嚴重の規定を設けてある。



決算期も之れを何時と確定させ、そして計算は必ず之れを株主總會に報告し其承認を得なければならんと云ふことになつて居るのである、又社債などを募集する、資本を増減せしめる、或は役員を變へる、定款を變更すると云ふ場合なども同様株主總會の承認を経ることに定められ、經營者の勝手氣儘には出來ぬことになつて居る、之れ等の點は個人經營よりはズツト窮屈である。

株式の選び方

第一に資本金額が相當多額な會社の株式であること。即ち五十萬圓であるとか百萬圓であるとか云ふ會社は今日では大會社とは云へない。御覽なさいあの東京電燈會社或は南滿鐵道會社の如きは其資本金は何れも億を以て數へる程であつて、之れ等の會社の株式は十錢と相場を動かさずに五百株や千株の賣買は自由であるが、小會社の株式はそうはゆかない。こうして先づ資本金としては三百萬圓以上位、株數として六七萬株以上の會社の株式ならそう賣買に不便もあるまい。東京株式取引所が其長期清算取引で賣買する株式は資本金三百萬圓以上の會社の株式であること、云ふ内規を作つてあるが、之れなども此の位株數があれば賣買とも先づ相當出來ると云ふ見込みからである。

然し資本金が多い丈けでは不充分で、其會社の事業が極く地方的のものでないこと、云ふこ

とを考へねばならない。例へば宇治附近の或製茶會社など、又或温泉附近の遊覽自動車會社など營業そのものは至極有利であつて、こう云つた會社の株式は事情を知つた附近の方々にはい

く投資物と云へる。然し其事業の存在を知る人は世間には少いから一般的でない。之れに比すれば東京大阪附近の郊外電鐵など同じく地方的ではあるが、何せい何百萬人といふ大衆を相手の仕事であるだけに、其の事業の存在を知つて居るものが多い。會社の内容も自然比較的世間に知れても居ると云つた具合で其株式の流通性が廣くなると云つた譯で、前に申した純地方的のものとは賣買の不便に格段の相違がある。

勿論右の條件を備へて居れば確實と云ふ譯ではないので、右のような條件に當はまるものなら賣買に左して不便はないと考へるのである。

既設と新設會社

既設會社と新設會社の株式では勿論既設會社の株式の方が通りがよい。賣買も新設會社のものに較べると餘程樂である。それと云ふのは既に何期間か營業を續け其業態も凡そ見當が付いたからであつて、未だ海のものとも山のものとも付かぬ新設會社のものは商賣人も内容を知らず自然之れを扱ふものが少いからである。

丁度歐洲戰爭の最中であつた、今まで獨逸から輸入して居たりスリンや染料が獨逸から來な





くなつて市價が何十倍にも暴騰したものである、此の時出来たのが日本染料會社と日本グリソン會社です。双方とも政府が補助金を出すと云ふので兩社株式の申込みは十何倍とか數十倍の盛況でしたが、今日では兩社とも成績甚だ不振の有様であるが、然し此の兩社なぞは當時出来た新會社としてはマダよい方である。

當時何の彼のと随分種々の會社が出来たが中で今日續いて居るもの、或は兎も角も配當して居るものは數へる程しかない、そして夫れ等會社の株式は何れも拂込金以下の相場で碌々買手のないものが多い。當時只有望くと計りで申込み今日其株式を背負込んで拂込は取られる口く配當も呉れず剩へ會社が大借金を負つて、其の爲め株式を半分にも三分の一にも減らされ、可成財産を煙にしたものも少くない。

一體こう云ふ風に世間が好景氣で採式熱が流行り出す時には、會社屋と云つてボロ會社を作つては甘い汁を吸ふだけ吸ひ跡は野となれ山となれで逃げて仕舞ふものが出て来る、夫れ等の連中と來ると配當は三割續くの、今に株券が倍になると棚からボタ餅がホツペタ叩くようなことで新株主を釣るので、こう云つた手合にかゝつたら、元も子も忽ちなくなして仕舞ふ。勿論新設會社悉く不安と云ふのではない、有利有望なものも決して少くないが、只素人方

には其見分けが容易でない。否悪い會社に引つかゝり易い、そして其處の株式は既設の會社のものに比べると賣買が不自由である。シテ見れば素人方としては多數のそして世間に會社の状態の知れ渡つて居る既設會社の中から選ぶ方が無難だと云ふ次第である。

**經營者の人物** 賣買が自由便利であると云ふ點を主として考へれば以上の如く、東京大阪兩株式市場の長期取引や短期取引の建株になつて居るもの、或は同じく實物市場で常に販賣して居るもの等から選べば先大過はない。然し更に第二に確實なものと云ふのでなければ放資の好適物と云ふ譯に參るまい。

確實であるか何うかは第一に經營者の人物を見ることである。例へば銀行業と云へば、仕事としては確實なものであるが、過般の銀行騒動に當つて有名な堂々たる銀行がパタ／＼潰れたことはまだ記憶に新しいことである。そして一方ではチツポケな銀行或は三井、三菱の如き大銀行がピクともせず營業を續けてゆけたことも御承知であらう。

同じ銀行業で斯くも相異の生じた根本は要するに經營者の人物の相異からである、潰れた銀行は大部分氣の弱い人、情實に脆い人、不正な人、ダラシのない人、無鐵砲に太つ腹の人と云つた人々に經營され何時の間にか大穴があげられてあつたのである。然るに確實な人に經營さ



るものは左様な穴なぞあいてない、故にピクともせぬと云ふ譯、斯様であるから經營者の人物が肝腎であらう。例へば其の社長なり専務なり責任者たる人が、眞劍味のあるそして其會社と運命を共にするやうな人なら先づ大丈夫。

然るに山勘好き、相場好き、不品行、派手過ぎる、或はイヂくして居ると云つた人に經營されて居る會社としたならば、其仕事が目下は盛況であり或は確實な業種であるにしても、安心することが出来ないものである。それから第二は其會社の業種ツマリやつてる仕事は確實なものであること、即ち所謂水商賣實際物商法のようなものでなく、ガツチリした仕事をやつてるものが安心である……と云ふことは次ぎに申述べる。

**業種は第二次的** その年の景氣或いは天候などに依つて營業に消長を來さぬ商賣は絶無と云つても差支へはない。然し其の中でも水産業殊に漁業に關するものなどは不可測の天候の爲め收益に多大の狂いが起き易い。こう云つた業種の會社株式は相場本位に見れば興味の多いものであらう。

然し利廻り本位の投資と云ふ上から見れば、比較的不安定のもので云はねばならない。尤も其會社の經營者が着實な紳士であつて、會社收益が多大の時に多額の積立を行つて他日の減收

に備へてゆくと云つた至極穩健な經營振りであるならば安心もなるが、放漫な經營者投機好きの經營者であるならば之れ程危険なことはない。

紡績業の如きは堅い仕事であるが、其の原料の棉は重に之れを米國から輸入する、堅い會社であると棉を買つて絲に鍾ぐまでのソロバンを置いて愈々引合ふとなつてから棉を買付け、製品の賣約定をして置く、であるから收益に狂ひがない。然るに其經營者が相場好きだと、只々棉の相場が高くなるだらうと云つた見込みで棉を買付ける、或は綿絲の相場が安くなるだらうで綿絲を先約して賣ると云つた荒つポイ行方をする。

之れが當つたら至極よろしい、外れたら慘憺たるものになつて仕舞ふ。彼の一時隆々としてよく鐘ヶ淵紡績と對立した富士瓦斯紡績が不振となつたのも一原因は茲にある。其後同社は持田社長の努力で着々盛返して居る。又砂糖會社など不足の原料は爪哇キューバ邊から輸入して來るのですが、不眞面目な會社は往々にして此原料糖の思惑を試みる、その結果はトンダ損となる。彼の東洋製糖或は鹽水港會社が整理の破目に陥つたのも一因は茲にあるであらう。

(目下兩社とも大分改善されて來た)

斯様に業種が確實であつても、其經營者の人物如何ではこう云つた不況になる場合もあるの



であつて、業種の確實不確實は寧ろ第二次的のものとも云へる。

**設備の力と人の力** 然し夫れにしても鐵道とか電鐵瓦斯、水道、電燈と云つた業種は一旦設備が出来て仕舞へば跡は収益時代に入るので、生産工業の如く常に原料の買入製品の販賣に苦慮し之れに依つて成績の消長を來す、或は危険をも伴ふと云つた業種と比べれば遙に安定的なものである。

例へば東京郊外の電鐵など先づ建設時代が三年位、夫れから収益時代に入つて十年目位になると擴張時代となり資本の増加を必要とする。外觀からすると初めは電車、田畑の中を走つたものが、今度は町と町の間を走り馳つては軒下を通ると云ふ風に郊外の發展に連れて乗客が殖へる。あの京濱電鐵の如き十年前位までは田畑の中を通つたものであるが、今日は殆ど軒下をくよりぬけて走つておる。之れなどは収益時代を過ぎて老成時代に達したもので、新進のもの様に投資的興味は少い。

電燈水道瓦斯などにしても同様であるが、然し之れ等は常に設備の擴張擴張に迫はるゝもので、固定資本の増加の割に利益が上らないが、鐵道電鐵など一旦敷設地の選定宜しきを賣れば始め兩三年は利益は少いが、跡は改修費の支出位のもので、業種は直に安定して仕舞ふ。夫れ

からは經營者としては只普通にさへして居れば利益が上る。言を換へて申せば鐵道電鐵等は開業當時が其株式に投資の好機と云へる。そして六七年も辛棒すれば一割位の配當時代に入り十年も経てば増資時代に入る。

製造工業にしても手堅い經營者であるならば、先づ一兩年が建設時代で三年目位からは収益時代に入るのであるが、常に原料の買入れ製品の販賣に就て經營者は苦心を要し、其の經營者の能否に依つて常に収益に狂ひが出て來る。……と申す譯で前者は殆ど全部設備の力に依つて収益をあげ後者は人の力で収益すると云ふ相異が生じ、前者の業種の方が安定的と云ひ得る譯勿論之は比較的話である。

**事業の危険率** 事業の確實性と云ふ上から見て鐵道、電燈の如き殆ど固定資本の力で収益をあげてゆくものが先づ第一に成績に大した狂ひのないものとし、紡績、製織、肥料と云つた販賣、或は原料の買入等經營者の才能或は心掛けに依つて著しく成績に狂ひを生ずるものは先づ其次と云ふ順序である、更に設備に俟つて人力のベストを盡して然も不可抗の天意に成績を著しく左右されべき業種のもの、投機的には興味深々と申せるが、然も投資的には前の二種のものに比すればズツト危険性が多いと申さねばならない、例へば製糖會社の如き或は漁



業會社の如き夫れである。

勿論一寸前にも申述べたが株式相場に變化があつて、面白味が多いと云ふ上からすれば第三のものが最も興味深く次いで第二、第一となる。殊に第一の種類に屬するものに至つては株式相場の波瀾は極めて少く投機的の妙味は甚だ少いのである。又利廻りからしても第三のものは危険が最も多い丈に利廻りがよく、次いで第二と云ふ順になり第一の鐵道とか電燈とか瓦斯と云つたような株式は危険が少いだけに利廻りが低く、社債よりは少し有利だと云ふ位の利廻りにしか當らない。

誰しも有利と見えるものに心を引かれたがるものであり、且つ又山氣のない人はないと云はれる位であつて、利殖本位の投資に當つても兎もすれば利廻りのよい、そして相場に變化があるものに誘惑され易いものであるが然し利殖本位の投資上最も心すべきは實に此の點にある。目先の利く玄人、或は財界乃至其會社の事情に通じた人々は會社の業況が著しく悪くなるに云ふような場合には素早く持株を賣抜けて危険を避けると云ふことも易いことであるが、素人には中々そう云つた巧妙な藝當は出来ない、そして愚圖／＼して居る内に元も子もなくして仕舞ふと云ふことにならぬとも限らない。茲に於てか私は素人方の利殖法としての株式選擇の

標準は第一、第二、第三と云ふ順序を擇ぶべきもので成るべくは第一第二の業種の内から選ばれる方が危険が少いと考へる。

油蟲の居る會社

以上は株式選擇の正道とも云ふべきもの、云はゞ石橋式の撰擇方で一見まだるつこいようである。然し俗に大慾は無慾、或は安もの買ひの錢失ひと云ひ、又は急いては事を仕損すと云ふ諺もある位利殖に當つては何事を措いても第一に堅實の道を撰ぶべき事が其秘訣であらう。

茲に尙ほ注意すべき一二點を云へば、第一は其會社重役の持株數が殖へつゝあるか、減りつゝあるかと云ふことである。云ふまでもなく其社の社長或は専務取締役、常務取締役などは其會社の事情に最も通曉して居る筈であるから、會社の業況順調であり株式市價が其社の實體に比して割が安いと見れば次第に其持株は増して行くであらう。之れと反對ならば其持株は減らして行く筈である。才も以上の點は一概に必ず然りとは申せない。然しそう云つた傾向を參酌することは決して無益ではない。

次ぎには其會社の總會と株主に注目することである。よく世間には所謂會社荒しとか總會屋なるものがあつて、少數の株主となり會社の缺點をカギ出し總會席上でいやがらせを云つた



り、後暗い重役を脅かしたりして、何の彼のと會社から金を絞り出し又は然るべき利権を漁ることを商賣にして居るものがある。植物なぞにしても弱つて來るとアブラ蟲や毛蟲がたかる如く、會社にしても何等かそこに隠れたる弱味が出来て來ると、何處を何うカギ付けて來るものか所謂會社屋なる油蟲がとつ付くのである。彼れ等の會社状態に關する嗅覺、視覺、聽覺は實に明敏である。さうでせう夫れが商賣なのだから。

儲こう云つた連中が鈴なりに株主となつてウヨ／＼として居り、そして株主總會が毎度紛糾を重ね彼れ等が跳梁するような會社は必ずや何處かに缺點があるものと見ねばならない。こゝいつた會社の株式は先づ敬遠するに如かずであらう。堅實無キズの會社なら油蟲がトツ付く餘地がない筈だから。

掘り出物の投資

大體前申した様な標準で選擇するとして、然らば同一の株式を漸次買増して行く方がよいか、或はいろいろ異なる業種のを混ぜるがよいか？之れを危険を避ける上から見れば各種の株式に分割して投資する方が先づ間違ひが少いであろう、種類多く投資して居れば假に一種のものが甚だ不況に陥り、配當も減り株式價格が下つても其他のものと平均すれば利廻りも左して低下せず、値下り損失も他のものゝ値上りで補ひ得るからである。

然し最も効果多い投資方法としては充分に調査して、今は悲況にあつて相場も安い配當も無いが、挽回の見込みは確實だと云ふものを選び、之れに對して集中的に投資することである、此の調査に當つては極めて綿密を要するので、或は素人方には困難かとも思はれるが

彼の大日本製糖の藤山社長が今日の富と地位を作り上げた所以も實はこゝ云つた點にある。即ち藤山氏が引受けた當時の日糖は例の收賄問題で酒匂社長はピストル自殺を遂げる大疑獄は起きてる會社の財産状態は亂脈を極めて居ると云つた有様であつた。然し藤山氏は製糖業の將來有望なことゝ整理の可能を見抜いて、當時僅かに數圓位の日糖株を買込み自ら經營を引受け刻苦慘憺遂に今日の盛況を來さしめたもので、同時に藤山氏自身も之れに依つて多大の富を増殖したのである。

又現に盛業中の或會社の専務取締役である某氏は初め其會社の一株の株主であつた。

そして總會の都度出席して會社の状態に就て詳細な質問を試み、其財産營業状態の研究に努めた。當時其會社の經營者たちは氏を認めてへツポコ會社荒しだらうと見縊つて居たが、夫れに頓着せず某氏は四株五株と株式を買増し、益々熱心に其會社の状態を調べ毎總會で必らず不審の點を質問すると云ふ風であつた、其所の大株主も氏の熱心に動かされ遂に同氏を重役に舉



げて經營を委ねることになり、之れに依つて某氏は今日の富と地位を占めるに至つたのである。  
右は一例であるが、そう迄根強くやる覺悟がないならば、先づ掘り出しものを見付けて之れに集中投資すると云ふ方法は避けた方が宜しい。そして成る可く多種の株式に投資して危険率を低くすると云ふことが必要である。

**株式賣買の單位** 各種の株式に分割して投資するにしても、亦同一株式に集中投資するにしても、其の數の單位はなるべく十株に纏めて置くことが肝要である。

何故と申すと、株式の賣買は實物でも亦清算取引でも今では十株が單位になつておる。そして實物では端數の賣買も出来ないことはないが、十株と纏まつて居ないと中々賣買の出合いが悪し、買ふ時には先づ良しとしても、賣る場合にいろ／＼不便があるからである。

倅然らば然るべき株式を撰擇したとして、買入れの場合に何う云ふ株屋さんに頼んだら宜しいか不案内の素人から見れば何の株屋さんも確かそうであり又不安そうにも見へよう。殊にチヨイ／＼不正仲買なぞと云ふ報道も出るので、中には株屋さんと云ふと悉く警戒すべきもの様に心得て居る方もある。警戒に如くはないが、然し東京なり大阪なりの株式取引所々屬の

取引員なら先づ外のモグリの株屋さんよりはよつほど確實である、最も所謂現物屋であつても、例へば山一證券會社とか、野村證券とか大阪商事とか云つた堂々たるものもあり、勿論安心が出来る店であるが、いゝ加減なモグリの株屋さんに頼む位なら、公認の取引員に頼む方が確かである。

公認の株式取引員と申すと、商工省の認可を得なければ出来ないもので、相當の資格を持ち又夫々所定の身元保證金を取引所に納入して商賣をして居るのである。そして果して其の店が公認の取引員であるか何うかは往復ハガキ一本で取引所に聞けば判ることであるから不審と思つたら念の爲めに問合せが必要である。よく公認みたいな體裁をつくり紛らはしい肩書を付けてるのが少くない、斯様のものに限つて不正なイカサマ屋が多いのである。

**株屋さんの撰方** 公認の取引員は例へば東京ならば、東京株式取引所一般取引員或は短期取引員、實物取引員、國債取引員と云ふ具合に明瞭に取引員と云ふ稱號を使用して居る、取引員ならざる株式業者、證券業者は決して此の取引員と云ふ稱號を使へないのであるから、公認の取引員であるかないかは一目瞭然である。

勿論取引員であつてもピンからキリまであつて、間々良からぬものも出る。一時盛んな宣傳



を試み地方客を吸収して一角の取引員として市場に馳驅した廣瀬大橋商店、陸井幸平商店の如き何れも公認の取引員であつたが、放漫經營が祟つて破産に及び客筋にも多大の迷惑をかけたと云ふような實例がある。

故に多額の金品を預け長年月に亘る取引をする場合などにはよく信用調査をし、充分に選擇して安心を期する必要があるが、現株の取引ならば金圓引替えに株券を受取るまでの事だから従つてそう迄調査すると云ふ必要はあるまい。

地方ならば銀行杯に付いて聞くと、大概銀行は東京大阪邊の取引員と取引關係があるから大體の事が判る筈である。

又取引所（東京は兜町に在り東京株式取引所と稱す、大阪は大阪市北濱に在り大阪株式取引所といふ）或は取引所内にある取引員組合事務所（照會すれば、其取引所々屬の取引員即ち公認の株式業者の氏名營業所等も判る譯けである）

よく地方人士が株式の事情などに餘り通ぜぬのに付け込み詐欺漢が立ち廻り、ボロ株券で土地を捲上げる、偽造株を賣付けるなぞと云ふ被害が絶へない、これなぞは寧ろ引つかゝる方が慾張り過ぎてゐる爲めが多いようである。兎も角も如何に堅實そうな話であつても態々出張し

て來て株式を賣付けて歩くなぞと云ふ手輩は先づ相手にせぬことが肝要で、株式を買入度い賣りたいと云つた場合は遠方であつても公認の取引員に依頼する方がよろしい。

**不良現株屋** 株式の選擇宜しきを得ても取引の方法を充分に承知して居ないか、或は株式店の撰擇宜しきを得ないと往々にして思ひ掛けない損失を蒙ることがある。

殊に株式店の撰擇に就ては筆者の如く職務上常に株式界と接觸し、株式店の内情を知悉するものは撰擇に敢て苦しみもしないが、素人方から見れば最も六づかしい事の一つであろう。今の迄の経験に依ると兎角第三流所の店が却て地方に於ては第一流の如く信ぜられて居たり、或は良い店でも適々其所に悪い外交員が居た爲めに、非道く不正の店のように信ぜられて居るものもある。

數ある投書の中株式店に關するものを茲に掲げて見よう。

「老後の計として利殖を思ひ立ち某取引員店に取引（實株）を開始致し申候處彼等は地方人と見れば頭から自店だけの利益のみに着目し不誠意の限りを敢てなし、株式に對する利得は全部占有し、顧客に對しては損のみを掛けしむる様の始末、之では當然有利の株式も顧客には只損の一事あるのみに候何卒同記事最後に於て責任を以て先づ實物取引の確實なる會社向きの



御照會を特に御記載あらん事を多數讀者に代りて御希望申上候  
株式取引店は

(1) 保證金を自己に利用し可成期間を延して取引期間を経過するも今二三日〜と中々以て株式を渡さず手紙や電話位ではテンド相手せず、直參するも今二三日でらちあかず。  
(2) 如何にも不安心なる故顧客が注文取消しを申出する時は例へば四五圓巾の値上りありしをそれなら買ひの値段より一二圓値下り中とて其の間證據金より差引きて返送すべしとて承知せず。

(3) 更に殘額證據金も未だに送金なし。

更らに別の一例は某氏か之れも先般破産せる一流の株式店にて取引中、ボロ株のみを押付けられ終りに元金も株式もどうしても返さず、終りに百圓位づゝ返金せるも其の大部の元金(一萬圓近い)一錢もなく巻上げられし様の始末に候

株式店員との取引は誠に素人に取りて危険にて、地方人は案外遊金あるも誰れも彼れも手を引き申候株式市場の振はざるは故なきに無之やと存じ申候』

確實な株式店

取引店員の中にも投書のような不誠意なものもあるが、然しそう云ふの

は稀であつて、悉くが左うした店ばかりではない。又お客さんにしても、悉くが眞面目の人心計りではなく随分横着なのもある、現に注文して置いて不利となると知らぬ顔を極め込み夫れが爲め取引員が大損失を背負込むと云ふ實例が少くない。

従つて委託者が取引員を撰擇するように、取引員の方でも委託者を撰擇し、或は物質的の保證を充分に取つて置いて注文に應ずると云ふことになる。確實な店になるほど此の點は嚴重を極め、或店などは然るべき紹介者がなければ全然注文を受けぬと云つたものもある。

然るに過般破産した某店の如きは全然一現の委託者からハガキ一本電話一本で極めて手軽に實株の注文を受け其手付金の取込みを目的にして居たような事實もある、若取引員店が斯かる冒險的な方法で經營して行くなれば、如何に巨萬の富も忽ち煙となつて仕舞ふ。茲に於てかい店ほど注文の引受けに就ては八釜しい、その代り又間違ひがない。

前に破産した某店などは店が左前になる程大げさ極まる宣傳を試み『成金に成るには今が好機だ株式を買入れよ』とか何とか彼とか挑發的の大文句を併べ、素人客の吸收に努め同業者をヒンシュクさせたものである。恐らく此の當時世間では此の店を兜町第一流第一番の取引員店と信じたであらう、然るに兜町では下の下に扱はれ挑發的の大宣傳に馬力を掛ければかけ



る程同業者は益々此の店に對する警戒を堅めた位であつた。

之れに反して世間では殆ど名前も知らぬ店で同業者から第一流の信用を拂はれて居るものもある、斯うして世間から見た第一流と兜町で云ふ第一流とは丸でちがふ。先づ派手な大げさな営業振りや世間の評判などは抛つて置き、兜町同業者間の評判と東京の大銀行間での評判(大阪にしても同様)を聞いてから、第一流第二流の判断なり又依頼すべき取引員店を定めな

老舗と新店

取引員なら何の取引員でも注文を受けるかと云ふと、決して左様ではない。中には永年御馴染みの少數有力な御得意を守り新規の御客さんは受けないものもある、又自身自身の思惑か或は利殖の機關として、取引員店の認可を受け御客さんは取らぬ方針のものもある。

然し夫れは至極少數であつて大部分の取引員は御客を受けることを本位にして營業しておる。勿論其の片手間には自ら相場を張る人もあらう、又絶対に所謂手張り思惑はせず専心客注文を受けるのを専門とする店もある。所で此のお客本位の店にしても、只自分の名を世間に知らせる程度に止め消極的にお客の吸収に努める營業振りと、敏腕な外交を使ひ巧な宣傳を試みて積

極的にお客の吸収に努める營業振もある。

新規開業の店の如きは何うしても後者の如き方針に依つて注文を廣く集め、そして其の間に次第に堅實な顧客を選択して行くと云ふのを理想とするものが多い。然し其店主の人柄に依つては夫れではマダルコイから自分自身相場を張る、或は開業當初から資金不足の結果、可成り無理をして新規注文の獲得に努めると云ふ風になる。

其間には只手腕本位でタチの良からぬ外交員を使ふと云ふようなことも出来る譯で、自然新店の營業振りは老舗のその如く一絲整然堅實と云ふ譯に行きかねるようである。茲に老舗と新店と確實さに於て自ら相異を生ずる譯であつて、先づ知り店のない素人の方としては此の客専門の店、そして成るべく開業の古いものと云ふのを選ばれる方が間ちがひも少いと思ふ。

實株の賣買法

株式實物の賣買は普通の商品と同様賣買とも株式店へ注文されればよろしい。然し豫め選擇された株式に就て凡そ賣買の値段を定めて注文さるゝ事が必要である。然し取引員店では初対面のお客さんなら只では注文を受けない、二割位の手付金を受取つてから注文を受けることにして居るから豫め此の資金を送つて遣らねばならない。

客から賣買の注文をすると取引員店では自分の店に其實株があるか又は自分が買受けておい



てもよいとなると値段と相談してすぐ賣買の諾否を通知して来る。然し其の品が自分の店にな  
いような場合は市場でさがしてから、お客さんの方へ賣買が出来たか何うかを通知するのであ  
る。  
こうして賣買の契約が出来ても直賣物がある場合とない場合があるが、市場では賣買を契約  
した日から十六日以内に賣物の受渡しを付けることになつて居る。お客さんと取引員店の間も  
亦此の慣習に従ひ十五日以内に受渡しを付けることになるのだが、場合に依つて多少遅れるこ  
ともあらう。

尤も豫め注文の時スグ受渡しを付けたい旨を注文して置くと、比較的早く受渡が付くので  
ある。儲こうして賣買が調へば取引員店から實株賣買報告書と承諾書が付いたものを送付して  
来る。其の値段と株數などをよく調べ宜しかつたら報告書を手許に止め承諾書に調印の上送附  
するのである。報告書は後に必要な場合もあるから受渡しが付くまで保存せなければならぬ  
賣買成立の報告の後受渡の通知が来た場合は殘金を送附するなり、或は引替へ郵便なり、若  
くは荷爲替なりで受渡を付けねばならない。期日に遅れると多少なりとも日歩を取られる。若  
取引員の方で遅れた場合は督促しなければいけない。

**手数料と受渡** 實株賣買の手数は何の位かと云ふと、之れはお客さんと取引員との間は  
指値の賣買であつても左様でない場合でも、凡て手数料を込めた値段で取引すると云ふ習慣に  
なつて居て注文値段の外に手数料と云ふものは取らない。即ち取引員の方では指値の場合でも  
チャント自分の手数料が出るように賣買を調へるのである。

儲かうして賣買か調ひ受渡しを終了し、株券が自分の手許に到着した場合には前持主の委任  
狀が一緒に參るから早速會社に對し自分の印鑑を添へ（印鑑用紙は其會社に請求）名義の書き  
替へを請求する。此の場合會社に持參してもよいし又は書留郵便で送付してもよいが、何れに  
しても株券を受け取つたら至急に此の書き換へをして置かねばならない。

尚ほ何處の會社でも大概五月とか六月及十一月とか十二月を決算期として年二回の決算を  
行ふことになつて居つて、此の決算最終日の翌日から總會が終るまで株式名義の書換へを停止  
する、そして前期末現在の株主に配當を拂ふことになつて居るのである。従つて書き替へが遅  
れて此期を過ぎて仕舞ふと總會が終るまで書き換へが出来ず、配當付きで買ったに拘はらず配  
當が受取れぬことになつて仕舞ふ。

萬一こうして遅れた場合或は間に合ひそうもない時は豫め取引員店の方へ頼んで前所有主



から配当委任状を貰つて置けば宜しい。株式名義の書替へが遅れても配当の取り損い文けは免れる。何れにしても賣買注文の際豫め配当が付いて居るか否かを確かめて置くことが必要で、よく此の點でこたごたが起り易い。

賣買の時機

株式の撰擇、株式店の選び方其宜しきを得ても株式賣買の時機が當を得なければ折角の利殖が甚だ不結果に終つて仕舞ふ。然らば株式の賣買は何時が宜しいかと云へば、買入れる場合には株式市場が非常な不況を呈し諸株の位置が非常に低い時を宜しとする。例へば昭和二年四月あの銀行騒動で株式界がメチャクに下げたような場合。

更に遡れば大正十二年九月の震災當時の如き絶好無二の買場所であつたのである、言を換へて云へば萬人畏怖して總賣りの人氣となつて居る時が買ふには最上の機會である。古い例ではあるが記者の知人某は日露戰爭當時彼のバルチック大艦隊を迎へて東郷提督が有名なる『此一戰』と悲愴な覺悟の下に正に乾坤一擲の大海戰の幕が切つて下ろされんとした時でした。

彼は世間の憂色を後へに眺め親戚知己の諫止を斥け『國と共に亡び國と共に勝たん』と全財産を傾けて株式の買入れを行ひ遂に巨萬の財富を勝ち得たのである。此覺悟なく己れ一人全からんとするようでは利殖に於ても亦遂に大を爲すことは出来ないだらう。少々横道へそれたが

これは眞理である。株式市場の状態が最も悪い時を見込んで買取り賣る時は株式界が大景氣の時を選ぶのである。

目先の三五圓には氣を奪はるゝことなく、『鳴かざれば鳴くまで待たうほとゝぎす』家康流の戦法を以て悠々其時機を狙ふことであろう。經濟界の大潮流は十年に一度位は循環し來つて非常な變動を描き小にしては、三年目毎位に小刻みもあり、又株式界としては何はなくとも一年の中三四回は上下方向が變るものである。急がずは幾らでも好機會はあろう。一體利殖は焦躁るものではない。株式投資に於て殊に然り。

(株式の清算取引は素人の利殖方法としては難解であるから茲には略す)



商賣打明話



一、小賣店

東京の小賣店狀況



販賣行進曲 小賣店の数は随分と多い、江戸八百八町はお膝元の東京市内丈けでも五萬一千四百四十三軒（昭和三年七月末日現在）あつて九世帯に販賣店が一軒あると云ふ割合だツマリ販賣店一軒當りのお得意先が九軒平均と云ふのだから小賣店にしても仲々氣が氣ぢやあるまい。それこそボンヤリして居様ものなら忽ちお得意を取られて仕舞ふ。そこで、今迄のやうに安閑とクワへ煙管か何かで店先に日なたぼつこをしてゐながら賣れないのを不景氣の罪にして仕舞ふものがあつたら、夫れこそ心得違ひ。

尤も震災前の大正十二年六月にはモツと数は多かつた、六萬六百軒あつて震災後の大正十三年六月には之れが三萬九千三百三十三軒に減、其後次第に恢復して右の通り五萬一千何百軒になつたので震災前から比べれば店數としては尙ほ九千五百五十七軒少ない。然しその代り田端とか新宿、澁谷、大井、池袋其他接續の郡部にメツキリ小賣店が殖へ出して之れが近所のお得意先を荒して居るから、差引をすれば元と同じこと、否寧ろ市内の小賣店としては震災前より商賣がしづらくなつて居るかも知れない。

夫れに百貨店が大資本を掲げサービスに設備に商品に備し物に絢爛、眩惑の限りを盡し黄金ジャズの行進曲をとどろかせてお上りさんから丁稚、小僧、奥さんから旦那様まで悉く吸ひ取つて仕舞ふから、小賣店たるもの豈、晏如たるを得んやである。さらば小賣店にしてからが近頃ではメツキリ心掛けをかへて其の設備と云ひ販賣方法と云ひ、之れを震災前と比較すると格段の進歩を示して居る。かと思ふとそんぢよそこらには依然チヨンマゲ姿の商賣振りが巾をきかして居る所もあり、國粹的營業方針を持して守舊派お得意の愛顧を辱ふして居るものも少くない。

帝都の小賣店界はこうして正に新舊混沌、そこには販賣策にしても幾多の傾向が思ひ／＼に叩き合ひ入れちがつてガラクタ箱を引つくら返した如き觀を呈しつゝある。然し此の間にも世間を流るゝ時代の自然力は容赦なく彼れ等に新陳代謝を強制しつゝある所にお目を留められたる。

新陳代謝の時の波 二十二年前にはバンカラの誇りとして學生界を風靡した所のラツパズボンなるものが昭和四年の銀座にはおかつば嬢と足を組んでホツクストロツトやら何やら怪しげな大跨で横行闊歩する。借問すだ……生れない前の流行を知らないものを稱して之れなんモボモガと稱するか何うか……失言取消。  
かくて時代は柳原、日蔭町の出來合服が既製品、レデーメイドと出世に及んで堂々たる新式



店舗に飾り立てられて若き諸君の虚栄心を煽り立てること宜しく、かし處にも既製品にもラ  
ツパズボンありで洋服店數現在千七百六十八軒前年に比して二割三分の増加とあつて殖え頭の  
二番目に位する位。此の影に於て今迄の古着屋が遠く農村に出張販賣する苦心談は餘り世間  
で御承知がない。

斯くて生活様式のあちらりゼーションが小賣店界に與へた新陳代謝の暴威には流石に國粹も  
顔色なく提灯屋の如き足許の明るい内に影を潜め、足袋屋は洋品店と變節し、煎豆屋、袴屋、  
ローンク屋の如き何處かへ消し飛んで仕舞ひ、東京中金のワラジで探して歩かねば目づからぬ  
程の虐待を蒙つて居る。

夫れに引きかへ西洋食料品店などは前年に比し正に三割一分を激増し化粧品小間物が二割一  
分西洋雜貨一割七分靴屋一割三分の何れも増加、その外目立つて増加の店を表にすると、(單位  
割)

金物屋	一、六〇	菓子屋	一、一〇
玩具	一、三〇	洋傘	一、一〇
呉服	一、二〇	藥材	一、一〇

家具 一、〇〇

石炭屋	二、三〇	漆器	六〇
服地商	二、〇〇	乾物	五〇
砂糖商	八〇	夜具	五〇
茶	六〇		

と云ふ所である。  
但これを震災前に比較して見ると先づ生活必需品の白米魚類蔬菜果實、酒味噌醬油、薪炭、  
呉服太物の内殖へたものが魚屋の百十八軒のみ跡は何れも減少を示し殊に薪炭の如き臥薪嘗炭  
の甲斐もなく九百十二軒も減り正に震災前に比較して二割八分減である、減り振りを表示する  
と、(單位割)

小賣店

吳服店	二、三〇	青物	五〇
米屋	二、〇〇	酒屋	三〇

但之れ等日常必需品店の減少は寧ろ市内に減つて郊外に進出した事が重要な原因であるらし



い。之れに反して震災前に比し増加したものでは最も目に付くのが瓦斯用具及電燈用具店の増加四割に及ぶことである。これはローソク店や薪炭商の都落ちと相照してそこに昭和聖代のあかるさを語るに足るものだ。

小賣店界の兩大關

生活様式のあちらりぜいしよんは又金平糖やネデン棒、豆板や麥こがしなぞの駄菓子類を、殆ど悉く驅逐して仕舞つた。神田の三河町からローソク町邊は昔はその駄菓子屋の間屋町でこゝから大きな菓子ダンスに駄菓子をつめ込んで八百八町の得意先の小賣店を卸廻つて居たものだが。

然し品物は變つたが依然として多いのは菓子店で、市内販賣店三十二種五萬一千四百四十三軒の中、菓子の販賣店が七千四百二十七軒を占め、筆頭第一にあるのだから世の中は甘いものだ。七千四百何軒と云へば正に東京市内の現在世帯六十三世帯に就て一軒の割合、で寄ると觸ると江戸ッ子は菓子ばかりほうばつて居る様に見える。正確な統計ではないが何でも東京市内だけで一年間の菓子賣上高二億圓を下るまいとあるから、従つて齒醫者の數も定めし多からうと云ふもの。

菓子の次ぎが酒味噌醬油店の三千八百二十五軒で之れが第二位。上戸黨も亦却々馬鹿になら

ない勢力を持つて居ることが肯かれる。斯くて東京市内の小賣店が先づ、甘黨、辛黨、一大政黨の對立から始まつて、偕ドンデリに控へたる無産黨格の少數組は何かとあれば、漆器店の百七十軒である。『そんな漆器のお椀なぞ舊式だわ』とコップで味噌汁を汲み交す新家庭も未だあるまいと思ふが、例の生活様式のあちらりぜいしよんが硝子や、ニツケルや、アルミニウム計りを寵愛して吾が國粹の漆器を粗略にする傾きあるのは争へぬ事實であらう。

洋傘屋が少い方から三番目でタツタ二百六十五軒だが、之れは昔からこんなもので、それでも前年に比較すると二十六軒程殖えて居る勘定である。尤も右は白米外三十三種の販賣店に就て見た話して、東京中でタツタ一軒しかない珍商賣もあらう。更に東京中に一軒もない珍商賣もあるに相違なからう。偕之れ等の小賣店を地方別に見ると、そこには又面白い種々の傾向が窺はれる。

山の手と下町

本所區は元祿十四年山鹿流の陣太鼓に曉の夢を破られてから今も尙ほ櫓太鼓に目をさます土地柄、一飯に親子井三十個を平げる怪物出羽を初めに、大食漢釜足公の巢窟である所以か何うか米屋三百九十七軒、酒味噌醬油店五百三十三軒を擁して、何れも市内第一位、次いで炭部屋で討たれた吉良上野介に縁を引くか薪炭商が三百四十六軒あつて、淺草區の



三百四十七軒と東京第一を争ふ。

之れを經濟的に觀察すると、要するに本所區は人口密度が高い爲め従つてこうした日常生活用品の販賣店も多い所以で、世帯に對する割合は米屋は百卅一世帯に付いて一軒、酒屋は九十世帯に一軒と云ふ割合、同業間の競争も従つて激しからうと云ふもの。そして人口密度に對比して生活文化の度が低いから瓦斯、家庭電熱等の需要は少く、却て薪炭屋が多いと云ふ結論も下される。

茲へゆくと麴町は御膝元の旗本屋敷、武士は食はねど高楊子、今以て残る庭訓往來女大學の土地柄と云ふ譯ではないが、人口密度も低く、お出入お得意先が固定して居る丈に商賣が仕づらい土地とあつて米屋は僅かに三十八軒で市内の最少、酒屋が五十八軒で之れ又最少、薪炭屋三十三軒で之れ又最少、本所區に對して好個のコントラストを爲して居るのが面白い、が其の麴町區が洋服居敷割合の多いことでは東京第一位、即ち七十二世帯に付一軒の割合であるのは、旗本化してサラリーマンとなつたに據ると云ふ譯でもあらうか。

京橋の誇りは、魚河岸、日本橋から河岸委譲を受けてから魚屋總數一千九十九軒を算し、市内總數の三割六分を占めて居ると云ふ盛大振りで、二十六世帯當り一軒の魚屋と云ふ計算になるが、之れは河岸があるからのこと、之れを除けば深川の二百四十九軒が東京第一である。神田の自慢は明神様の御祭り又多町のやつちや場であるだけに八百屋、果物屋は四百五十六軒に上り、市内總數の一割六分に當り現在世帯六十三個に一軒の割合、京橋區の魚屋と好個の對照を作つて居る。

魚河岸を取られて日本橋に残つた第一は呉服店で五百四十軒、全市總數の約二割九分、現住世帯三十八軒に一軒の割合であるが、これは問屋筋が多いのと他面東京市商業の中樞地區である關係に依る。偕て前文句は此の邊で打切る各業別に打明話を書けば

### 菓子屋の巻

下戸で建てる倉 明治末葉のことだが、うどん粉を練つて焼いたどら焼と云ふ民衆ケーキが現はれ出した。元祖の某が先づ大枚十八圓也を投資して芝の某町に日本一どら焼の名乗りを擧げた。スルと同町内の四五軒先に又一つ元祖どら焼が飛出して、今度は世界一の大看板を掲げた。子供たちが日本一と世界一のどら焼競争をワイ／＼囃し立て、居る内に、今度はどら焼第三世が同町内にヒョッコリ現はれて町内第一の看板を擧げてしまつた。日本一も世界一も此



の町内第一にはギヤフンと参つて兜を脱いだ。

此のどら焼が昭和時代になるとホットケーキに出世して百貨店の食堂に納まつて居る。寛政元年にオランダ人から食ばんの製法を教はつて之れを作り始めたのが、今の木村屋總本店の主人公だが、後にまんぢゆうから思ひ付いてアンパンを賣出し遂に今日の木村屋の富をこね上げた、その銀座の木村屋の直きわきの毛利商店とか云ふのがアンパンの皮を變へて今度は專賣特許ばんぢゆうと進化する。今日のかすてらまんぢゆうがそれだ。

之れはほんの一例、鐵砲玉とアメチョコが新陳代謝し、金平糖がドロップに地盤を奪はれた今日に於ては、菓子の種類はカキ餅からシュークリームに至るまで恐らく其種類に於て豊富珍奇を極めること蓋し吾日本の如きは稀れなりであらう、珍と奇と、甘い辛いで賣上げの總高が全國を通じて年額六億圓位、東京での生産高二億圓位とは敢て驚く。

それ程で菓子屋の數の夥しいこと東京市内に於ては小賣店界の東の大關で、左黨の酒屋と對立すること既報の如くであるが、一つは此の商賣が極めて容易く、女房の留守番仕事、隱居の居ねむり封じの足にもなり且はつまみ食ひも出來て、少資本で始められると云ふ有難味があるからのこと。先づ鐵砲瓶ホーヅキ瓶の三四十個も並べ、燐寸の大箱へトタンを張つた大道具

の七つ八つも行列させ、それへ菓子の一三百圓も入れれば『本日より三日間開店大賣出し粗景呈上』が出來て資本合計三四百圓也。然り而して現金賣りで貸倒れが少なく、品物の廻轉率が早くて商賣に甘味がある、御愛想よく坊ちゃん嬢ちゃん御機嫌さへ取つて居れば利益も尠く二割多ければ三割にも四割にも廻る品があると云ふから馬鹿に出來ない。女手で食ふて行く位は朝飯前である。『下戸の建てたる倉はなし』と云ふ程日本には菓子喰ひが多いのだ。

會社直營店の進出 パン屋と云へば木村屋や三河屋、餅菓子屋と云へば鹽瀬、青柳を聯想する程之れ等の店は東京での老舗で、木村屋の屋號を名乗る者の如き全國で三千軒に上ると云ふ、東京も二百數十軒あるが、總本店と關係のあるのは此の内六十五六軒で、昔は本店から品物を廻して居たが今ぢや何れも獨立し、只木村屋陸組合なるものを組織し總本店の品物を標準にして時々品評會を開き技術の向上を計つて居る。

此の木村屋が日本に於ては菓子屋のチェインストアの元祖で、昔の牛屋のいろはと並び稱せられたものである。餘談に亘るが、此の牛屋のいろはは今殆ど全滅したが、いろは一番から始まつて第四十何番まであつた。大將と云ふのがいろは總本店に納まつて親戚やら、めかけや



らを支店に仕立ていろは四十八軒を揃へるの理想にして、赤塗二人曳の人力車を飛ばし號令叱咤して廻つた。正月には組下支店の女中共を丸鬘姿に結はし、何百臺の車を連らねて一大デモンストレーションを行つたのは愉快な見ものだつた。  
偕て木村屋の外には鹽瀬が丸の内を本店として實子店だけが十七軒、鹽瀬を僭稱するものは數知れず。風月は直屬支店四、榮太樓が六、青柳が十五軒、三河屋は實子繼子數知れずである。風月は最中とか榮太郎が甘納豆とか鹽瀬が何と、例へば政友會の一枚看板が地租委譲と云つた如く得意の製品があることは云ふ迄もない。其の外にはしる粉屋で味の素入ぞうにの三好野が何十軒、赤のれんをひらめかして花よりだんごも賣れば、夏はアイスクリームや氷水も賣る。

此の外に近來菓子小賣界に進出して來た豪のものがある。森永製菓に明治製菓が夫れである。自社の大量生産品を直營小賣店から直接に消費者に賣こなすと云ふ……産業合理化論者の喜びそうな販賣政策を取つて居るのだが、實は直營以外の小賣店に於ける自社製品の影響もあるので直營小賣店だからと云つて安くもないから相當儲かるそうなの……先づ御茶を一ぶく。  
**足利義政と饅頭** 『菓子は奈良朝時代に支那から渡來したもので、其頃の菓子は砂糖が使

様

はれず鹽が使はれたものである。私共の先祖が足利將軍義政公に砂糖をかけた菓子を献上した處、甘露甘露とあつて御機嫌斜ならず日本第一番本饅頭の名前を頂戴した。』とは老舗鹽瀬の話、して見ると菓子の歴史も随分古いもので、足利義政は正に下戸の元祖と云ふ譯であるが、今日では大體に於て日本菓子の内の駄物が衰へ洋菓子跳躍の全盛期である、併し日本菓子の内でも生菓子だけは難攻不落の堅城に立籠つて獨歩の繁榮振を示してゐる。あちらの下戸黨すらもビームクリームとか何んとか云つてあんこの菓子を賞讃して居る。  
生菓子は自店で製造したものを自店で賣ると云ふのが原則で、卸問屋と云ふのは尠い、一流處は勿論二流處も自家製品の販賣であるが、場末へ行くと卸屋があつて、車へ乗つけて小賣屋を巡回して歩くのがある、卸値段は一個一錢四厘位で、之を小賣屋は二錢に賣つて六厘の利益を見る、此卸屋は製造兼卸屋であつて、若小賣店で賣残りを生じ、皮が硬ばつて來たとか見目が悪くなつたとか云ふものは、いくらでも取換へて呉れるから便利である、卸屋は取換へた古いのを持つて歸つて練直し、他の菓手に製造して又卸廻るから古いのは新粧を施されて二度の勤めを演ずることになる。  
洋菓子の菓子界進出は猛烈な勢ひであるが、之とても時代の變遷によつて勢力範圍に消長が



ある、現在洋菓子中賣行高の一番多いのはビスケットで、次がキヤラメル、次がドロップ、其次がチョコレートと云ふ順位であるが、キヤラメルは四五年前の賣高と今日の賣行高と殆ど變りがなく、今や頭が固えて了つた振合であるけれども、チョコレートは四五年前の二倍の賣行を見せてゐる。此趨勢から察して早晚チョコレートはキヤラメルの位置を奪ふて了ふであらうと言はれる。

ビスケットの秘密

森永や明治製菓會社には差向き問屋の役目をつとめる販賣會社があり幾つかの販賣所を持つてゐて其處から小賣人へ供給する仕組になつてゐる、森永のキヤラメルは販賣會社の卸値が大六十個入四圓七十錢、之を小賣では普通一個十錢に賣つて一箱で一圓三十錢儲ける、小は百個入で三圓九十五錢、之を一個五錢で賣つて一個一圓五錢儲ける、そこで二割七八分の小賣屋の利潤が出て來ると云つた勘定で、小賣屋として見れば各種の菓子を打混じた利益の平均は三割と踏まれてゐる。

ビスケットは森永、明菓、大竹、東洋製菓なぞの大會社から、小は横町の小工場からも作り出され、小賣値百匁一圓二三十錢のものがあるかと思ふと十錢位のものもあつて千差萬別。茲でビスケットの製法を簡単に云へば、小麦粉、砂糖、バター、藥品等を混合し混合機で捏ね合

せ、それを機械にかけてビスケットの形の機械で打ち抜き、焼籠で焼くのであるが、大籠になると一日六百貫匁位焼けるのもある、百匁十四五錢前後で賣つて安物のビスケットはユレ一カと稱して原料が劣つてゐるが、百匁一圓二三十錢の上級品になると粉も一等粉を使ひ、バターも優良品を用ひ、鶏卵も加へれば香料も入ると云つた風に原料を精選してある。原料と云へば歐洲大戰當時各種材料が暴騰した爲め安い白土（ネオカルシウム）を混入することが流行した、無論慾の皮の突ツ張つた連中の仕事である、衛生試験所では「白土は菓子の原料として使用するべきものでない」と云つてゐるから健康上避けた方がよい代物であらう、しかし之を使用するとビスケットならば焦げて赤くなり商品としての價値を減ずるから、現在は餘り混合しなくなつたさうであるが、皆無との保證も出來ないんだと云ふから格段の安物には注意した方がよからうとのこと、又安物のコーヒータ糖は本當のコーヒータでなく、大小豆の屑をほうじてホンの御まじないにコーヒータを入れてある。

酒屋の巻

新規開業の資本調

『三河屋にもてゝ身しよ張り切れず』家計大臣閣下の膽つ玉を上下さ



せるもの夫れはメートル法でもなければ金解禁にもあらず、正に酒の輸入状態であらう、上戸  
黨會計帳のバランスシートを握るものは酒屋のお拂ひに外ならない。  
『現金と聞いて酒屋は樽を替へ』小賣値段プラス御用聞の給料プラス月末拂ひの金利なる方程  
式から酒屋の掛賣り値段が出来上がる。現金と聞いて上戸の方を勉強しても勿論損はゆかぬ、  
夫れ丈け掛買相場は高いことは云ふ迄もない。抑も御用聞きを待つて臺所消費の改善が期せら  
れる筈がないのである。

皆て新開の郊外である、十間を三和土に、酒樽を据える棚を拵へ、陳列棚も一つ位そなへて  
造作に三百圓、營業用什器として漏斗、梘、錐、飲口、ホシ、空壘、瀬戸徳利、祝樽一對、其  
他で百圓、商品は酒三駄(四斗樽六本)三百圓、一升、四合、二合、一合の銘酒壘詰六百三十  
圓、醬油三印各十樽百六十圓、同壘詰六十五圓、梘賣醬油百圓、酢十圓、葡萄酒百五十圓、寶  
燒酎二十三圓、葡萄酒味淋燒酎梘賣百圓、味噌甘辛等四十圓、コーラス、カルビス、レツキス  
五十圓、サイダー五箱五十圓、ビール四箱六十二圓(ビール、サイダーは夏分だけはモット置  
かなくてはならない)、罐詰一と通り三百圓、薪炭百圓、洗濯石鹼其他の雜貨五十圓で約二千二  
百圓を必要とする。

結局酒屋に必要な造作と什器商品で最低二千六七百圓の資本で茲に景氣よく開店大賣出し  
が出来たとする、其收支は何うならうか。

激烈な濫賣戰

愛嬌、廉賣、競争、侵略、凡そ今の販賣技術の最高能率を擧げて見ても新  
規開業の酒屋さんで定着五六十軒の御得意を掌の内に丸めて月賣上高の金千圓也を勝ち得る  
のは容易ならぬ仕事であらう、假りに千圓を賣上げて利益二割即ち月利二百圓、内家賃税金御  
用聞き給料合せて百圓、殘餘百圓が生活費と物品鎖却と金利とすれば夫れでトン／＼。酒屋曰  
く『此節は儲かりませんな』

『儲からなくて經營の立つので不思議』だが、そこは『以前儲けて家作を建てたから其家  
賃で喰つて行くのです』と云ふ『家賃など云ふ別収入のないものは何うしますか』品物を嚙  
つて問屋を喰ふのが落ちでしょう』と、それは冗談半分としても今迄のような仕入方販賣法で  
は昔のやうな甘い汁は元より吸へなくなつて居る。割合にいゝのは夫婦位で、主人公が註文を  
取つて配達し、お神さんが店賣りをする寸法でコツ／＼働くのだ、餘り手を擴げると經費が高  
み、貸倒れが多くなつて案外いけないものであるといふ。  
自然同業者間に起る問題は、まづ罪の軽い方は濫賣に依る地盤の争奪。悪どいのは不正手



段。昨年中東京酒類商同業組合からお仲間の酒類販賣業者に發した警告が酒類三百四十件、醬油四十件に達し、一件一人の營業者とすれば、東京市内及隣接郡部組合員總數八千人の約五分がお目玉を頂戴した勘定になるのである、酒屋さんの經營難、販賣競争も亦盛んなりと謂つべしだ、此中件數の最も多いのは濫賣であると云ふこと。

此の酒類商同業組合といふのは越前堀にある。之は東京市及隣接五郡の酒の小賣業者の組合で、組合長や書記の他に巡視員といふのを五人許り置く、其巡視員と云ふのが市内や郡部をグル／＼廻つて不正業者の發覺に努める、組合員を曲者扱にする譯ではないが、往々にして細からざる同業者を目付けて業界の信用を保ち、同業者間の安寧を計るが目的であるさうな。巡視員の報告によつて組合から警告を發するのである。

若し不正の「疑ひ」ある品物を賣つてゐる者があれば其品物を分析して正否を鑑定する、此分析の爲めには態々検査員をも設置してある、不正と判明すれば是亦直ちに警告して注意を促がす、警告に基いて大人しく改心して良いものを賣ればよし、さもない時は沒收するとか送荷停止の處分を喰はす、甚しく不逞なるものに對しては警視廳のコワイおぢさんの御手敷を煩はすこともある……と云ふが、然し實際はそう徹底的には行はれて居ない。

酒醬油のからくり 不正と言へば先づ以て防腐劑を多く混入したものであるが、有名酒のレツテルの貼つてある壘へ低級な酒を注ぎ込んで高く賣る手品師みたいなものもある、又水を混ぜて高く賣りつけるものもある。値段の協定破りは協定値以下に濫賣してお客を引きつけやうとするものであつて、お客の方から言へば安く買へるから有難い話だが、同業者から見れば業界を混亂せしむるものであるとしてキツイお叱りを蒙るので、其管内に不正や協定破りのなからんことに努めてゐるが、何處何處の酒屋さんは此通り濫賣してゐる、役員怠慢ならずやなど、云つて、値段の印刷された宣傳ビラを持込まれること尠からずとある。

何年か前のことである。大關や月桂冠の古壘の汚れないのを見附けて來て之へピンと來る安酒を詰めて賣つた、之が計畫的に行はれたが遂に發覺して、本物の醸造家から商標侵害で訴へられて罰金百圓仰付かつたことがある。之等の酒は上戸ならばひと口で判るが、酒に對する味覺の鈍い人になると判らないこともある、がしかし封緘紙に注意すれば化けの皮が直ぐむける。詰換えたのは醸造元の封緘紙でなく、加減なものをゴマ化しに貼りつけて置くからである。

醬油では昔は鹽水を割り煎黑豆の煎じ汁で色を付けたような甚だしい不正品を場末で賣つて



居た時代もあるが、今ではそうした大それた不正品はスグ發覺されて仕舞ふので夫れ程のものはないが、往々にして鹽水割のものがあつた。先づ信用ある店なら大丈夫だが、一番安心なのは上等ものゝ元詰の罎入り樽入りを買ひ込んでおけば大丈夫とある。

**下町と山手の異色** 蠟燭町から淺草本所深川邊へゆくと酒屋の店先に銅の酒沸しを置いてカン酒を賣る。仕事歸りの威勢のいゝ所がキユーツと一杯引つかけるが、之が中々いゝ商賣になるさうな。流石に山の手や郊外では見受けられない圖だが、そこへゆくと又山の手郊外は下町の知らない儲け仕事がある。

洋装モダンの奥さんが竹ぼうきやおしめ干しをブラ下げて吾愛の巢へ返へれもすまいが、兎角山の手や郊外の奥さん方は鏡の前で長長と御化粧の時間はあつても買物の時間がないと見へ無精にも鐘詰から靴ずみ、ちり紙の類まで酒屋の御用聞に御用付けに相成る。酒屋も自分の所がない品まで安請合に引受けて荒物屋や乾物屋から仕入れて納める、之れが中々いゝ儲けになる。

下町の酒屋で何々吟醸の蕪冠りが威勢よくズラリツと整列し、灘の生一本がゴボ〜うなつ居そうに見へて其實中身のあるのが二三本、跡は空樽が空ら威張りをして居たり、そうかと思

ふと郊外の酒屋で景氣よく棚一杯並んで居た鐘詰が風速五六メートルの空ツ風で吹き落されてカラカンと悲鳴を上げたりする珍談もあるが、何れにしても下町は店賣りと御用聞き、山の手が始ど御用聞き本位で、そこで兩者商賣のコツに大差があるのは云ふ迄もないが、茲では此の位にし酒屋の商品を一渡り拜見に及ぶ。

酒屋の大黒柱の酒は何百種あるか見當がつかない、品質が違ひ原價が違ふから組合でも協定値のつけようがない、そこで大關、櫻正宗、月桂冠といふ様な有名酒に標準を置く、之等の卸値は一壘一圓八十五錢であるから、之に約二割の利益を加算して二圓廿錢賣りを以て公正なる小賣相場と認めてゐるようである、處で二圓廿錢で賣つてゐる店は少い、或は二圓十錢、或は一圓九十錢で賣る店もあり、就中一圓九十五錢賣りが多い。勇敢なものになると原價賣りを試みる者も出て來て組合から一發オドンをかけられる。

之では酒屋さん商賣が成立たない、其處で薄利の埋合せをつける役目を承はるのが二流以下三流の裾物である、四斗樽三十圓などと云ふ安物もあれば、何々正宗などと銘打つた原價一圓位の鐘詰もある、原價一圓の鐘詰を一圓四五十錢で賣れば四五割の利益が苦もなく湧いて來るといふもの。



或人の調査に據ると小賣店の酒總賣上額を三段別に見れば最上級が二割五分内至三割、一段下つて一寸は飲めると云ふ程度のものが三割五分、下級酒が三割五分か四割位の割合になるといふから儲かる酒の賣れ高の方が多い勘定で上手にやれば二割から二割五分、下手にやつても一割五分か二割の儲けは確かである。

醤油味噌の儲け具合

醤油は最上三印(山サ、ヒゲ田、龜甲萬)一樽の卸値が五圓三十錢で之を五圓五十錢位に小賣りしてゐるから一樽で二十錢の口錢、二リツトル壘詰は卸値七十錢で公設市場では七十三錢、高い店では七十八錢に賣つてゐる。詰まり高い處で一割、安い處に至つては五分には廻らないのであるから恐ろしく口錢が薄い。

最上の次に次最上といふのがある、ヤマノ、キノエネ、上菱其他が之に屬し、品質は最上に敢て劣らないと云ふのであるが、口錢は最上よりいくらかよい、三流處になると一割五分から二割の口錢にはありつく。醤油に月賦賣りと云ふのがあるが、之は頗るボロイ、原價二圓五十錢位の九升樽を四圓位に賣りつけて品物を渡すと同時に一圓五十錢を受取り、跡五十錢位づゝ集金するのである、勘定さへ旨く取れば六七割になるといふ代物である。

麥酒は四打一箱の卸値が十七圓八十錢程であるから一本が三十七錢餘につく、一本四十二錢

で賣ると一箱で約二圓三四十錢儲かつて一割餘になるが、競争の結果四十錢や三十九錢で賣つたのでは儲かる餘地が全く縮まつて了ふ、麥酒は種類が少いから裾物で儲けると云ふ甘味がな

い、競争が激しくなつて來た今日小賣屋さんとしては割の悪い商品だと泡を吹いてゐる。

510.

サイダーは原價二十錢五厘のものを二十三錢から二十五錢位で賣るから麥酒より幾分か率が

酒屋には味噌がつきもの、一日の東京市内外の消費量三四萬貫、東京で一番よく賣れるのは

甘味噌で、甘味噌の内に柏白味噌と云ふのがあつて鱈屋で使ふ、辛味噌は仙臺味噌がそれであ

るが、甘味噌が六賣れるものなら辛味噌は四位の割合である。

此外特殊の味噌として三州八丁味噌がある、之は吸物に使ふ、又麥麴で醸造した田舎味噌と

云ふのもある、白味噌は京都産を以て最上とする、仙臺味噌と云つても仙臺から來るのではな

い、昔伊達の殿様が年貢米と豆とを以て藩士の爲めに味噌を製造させた、之が仙臺味噌の始ま

りであつて、今では却つて東京から仙臺へ逆移出してゐる始末である、又最近信州諏訪味噌、

越後味噌、佐渡味噌など、云ふのが進出して相當賣れるようになって來た。

味噌の問屋と云ふのもあるが、乳熊屋、日本味噌會社其他の製造元から直接仕入れるのであ



る、甘辛共に卸値一貫目七十五錢位のを九十錢位で賣り、卸値五十錢位のは六七十錢位で賣つてゐるが、目切れもあり掛込もあり、算盤通りには行かない。

1、酒の話

酒相場の定め方酒の造石税は段々上つて現在では四十圓、益々以て粗末にならぬ、假りに一合の酒を盃八杯と観て一杯が五厘、二合の晩酌を傾けると税金だけが八錢となる、然し酒飲みに云はせれば、あの陶然たる気分は金錢には替へ難いと、兎に角酒は百薬の長過ぐるを以て悪とする。

さて一ヶ年の醸造高は毎年五百三四十萬石であるが、昭和三年は約一割減と云はれて居るから四百萬石臺、これは二三年來賣行きが面白くなかつた結果持越荷が一寸増加氣味にあつた關係で生産を手加減したのださうな。

東京市中の標準値段を作るのは現在東京酒問屋組合、同酒類問屋組合の二つで、毎月二回事務所に問屋が會合し周囲の事情から觀て大體の値段を極める。然し震災後酒の値段は大した變化ない。酒問屋の組合は以上二つであるが、この他市中全體の酒商を統轄する中央聯盟會と云

ふのがあり、小賣商より成る酒類商同業組合、灘倉元にある甲東會などであるが、これ等は懇話會程度のもので、値段は前二つの組合に依つて決定してゐる。

酒の種類

酒の銘柄は三千種とも云はれ五千種とも云はれてゐる。何しろ新銘の酒が次から次と生れて來るので、銘柄數は今後殖へる許り。然し世間一般に知られて居る白鷹、褒紋、菊正宗、櫻正宗、東百慢、日本盛、いろ盛、大關、月桂冠、白鶴、世界長等と云つた三十種程が東京では一等酒とされて居る。

この一等酒の裡にも値段は著しい變化があつて、安いのは十駄で千三四百圓、上等物は千七八百圓から二千圓位してゐる。(十駄は四斗樽が二十樽)所で無銘の安物となると十駄六七百圓位のもある、この安物はつまり灘の出來損じとか關東地廻の劣等品で、多くは混合酒である。

酒の買ひ方の注意

近頃一升五圓の七圓のと云ふ高値の酒が流行し出したが、普通一等銘酒の卸相場が千三四百圓から二千圓として一等酒中でも上物、例へば白鷹、褒紋の如く二千圓からするものは一樽換算百圓一升當りが二圓五十錢になる。然るに小賣は一升三圓五十錢から四圓で、仲次問屋や小賣の儲けや運賃金利等を觀ても一寸高過ぎる。尤も一等酒中でも月桂



冠などは店に依つて一圓八九十錢位に勉強して賣つてゐるものもある。要するに小賣値は小賣屋の金廻り如何や營業状態で大分違ふ。勉強して居る店を選ぶ事である。尤も薄利多賣を賣りものに勉強振りを見せて居るものゝ中にも随分いかゞわしい、カラ線をして内實暴利を貪つて居る不届きものがないではなく、櫻正宗とか菊正宗などと稱して實は似寄りの安ものを飲ませたり、或は水割りと云ふ手段を行ふ不正な商人もあるので、買ふ時は矢張り屢詰めが安全のやうに思はれる。但し此の屢詰めは生詰めのものは兎も角さうでないものは樽詰めとは大分味が違ふ。量り買で買ふ時は豫め其酒屋にある酒の名を聞いておいて名指しで買ふがよい。

これは某酒屋主人の述懐談であるが、東京の酒は不味い、大阪の酒が良いと云ひますが、これは東京の酒屋が無暗に慾張つて安い酒や水割をするからで、一流の料理屋は兎に角中以下や場末の洋食店などは盛んにこの方法をやつてます、また労働者が多い處などで法外な安い酒を賣つて居る。これは最近焼酎を混合してゐます、然し鼻先にツンと來るし、色が薄くなつてゐるから直見別けがつかます。兎に角二十錢以下の酒はお氣をつけなさい……と。酒屋の利益は米屋と同じで、表面的には極少く、頗る堅實な商賣のやうに見えるが、どの商

賣も裏道があつて相當利益を得て居り、特に酒屋などは混合酒を巧に造ることに依つて人の知らないポロイ儲けをして居るものがある。

酒の見分け方 清酒の見分けには商賣人は利酒と稱して湯香形の白い磁器のコップに入れて色、香、味の三點から良い悪いを見る、素人としても矢張り此の三點を主にして見分ける外ないのであるが、色の點からゆくと番茶のような色をしたのは下酒で、淡く透明で稍青味があり、そして生々したつやがあるのが最上。

壘つたり赤茶氣で居てドンヨリして居るのは下等、少し黄色がかつつや。やは左程でもないが透明であるのが中等品。然し酒屋は番茶色をして居る酒をいろ／＼色ぬきをして賣つてゐるものもあるから、單に色ばかりで上中下は判らぬ、即ち香氣と味と俟つて見分けねばならない。香氣を調べるにはヨク洗つた茶碗に少々酒を入れ嗅いで見る。酒の嫌ひな人でも何となく好ましい芳醇な香りを放つものが第一。何となく煮くたらしたやうな香りがするのとは下。と云ふ譯ですが、おカンを付けて嗅いで見れば更に此の香りのいゝ悪いがハッキリする。最後に味であるが、これは云はゞ好き／＼、或は辛味の勝つたものを好むもの、甘口を好むもの等夫れ夫れに依つて選び方が違ふが、先づ冷酒を口に入れて吐き出して見、如何にも味が



滑らかで舌ざわりがよく、吐き出した跡サラリとするものなら上酒である。口に入れた瞬間ピリツと來たり、滋味や苦味があつたり、甘かつたり、初めは水ツボク跡の刺戟が強いと云ふようなものの上物ではない。

此の味はカンを付けて見れば最もよくわかるもので、おきに猪口がねばるようなもの、口がちや付くようなもの、何れもよい酒とは云へない、翌日頭痛がするような酒は絶対に呑まぬ方がよからう。

理研酒なるもの

近頃理研酒なるものがある。財団法人理化学研究所で鈴木梅太郎博士が加藤農學士と共に研究して作り出したのが之である、大正十年頃から「祖國」と云つて鐵道の仲賣などが賣つてゐた、又昨年御大典記念に「利久」と云ふ名を冠して理研興業會社から一般に賣り出した。

理研では砂糖の糖密からアルコールを取り、アルコールが出来るものに水を加へて稀薄にする、それへ酒の素を入れて一ヶ月乃至二ヶ月経過すると清酒が出来上るのださうな。酒の素と云ふのは琥珀酸、フマル酸、アミノ酸等へバレイアン酸、レヴリン酸、プロピオン酸、醋酸其他を添加した白色の粉末である。酒の素は酒の量の萬分の一位で足りると云ふから、極極少

量のものである、酒桶は銅製であるが中へ錫を引いてある、芳醇ならしむべく酒桶の中へ吉野杉の木片を入れる、化學が發達しても流石に清酒と吉野杉とは離れ難い因縁を持つてゐるようだ。味はまだ灘の生一本には及ばないが地酒などよりは優つてゐるようである。

一ヶ月の生産能力は千石であるが、現在百二十三十石醸造して居り、今後醸造高を増加する豫定ださうで、特約販賣店二十餘軒あつて、小賣店へは其處から卸されるのであるが、小賣値段は利久二リツトル壘一圓八十五錢である、之で賣つて小賣屋の利益は二割見當になる、祖國は二合壘四十錢で、鐵道の食堂や各驛の立賣や陸海軍で使つてゐるばかりで市中では賣つて居らなう。

口、鹽の話

鹽の專賣制度

昔上杉謙信は武田信玄に鹽を贈つて情義に厚きを謳はれた、腹が減つては戦争が出来ない、鹽は其腹を満たすに掘めしと共に必要缺くべからざる物だからである。試みに我等今日の日常生活から鹽氣を除くと假定して御覽なさい、如何なる山海の珍味と雖も甚だ不味ならざるを得ないのはまだしも、果して堪え得られるでありませうか、然るに等しく生



活必需品である米に對しては世人が甚だ敏感で、大正八年にはあの大騒動さへ惹起した我等日本人が、鹽に對しては甚だ鈍感で、現に大正七八年には鹽の大凶作に會し、政府は各國から之れが買集めに血眼になつてゐたにも拘らず、一般國民は凶作も知らないといふ無關心振りであつたのは何故であらう、思ふに内地では鹽は煙草と樟腦と共に政府の專賣制度であつて、國民は永年お上任せに慣れて來たのと、專賣制度の結果價格の變動が至て稀で、從て利害を考へる機會が少なかつたためであるかも知れぬ。鹽は現在台灣も同様である、内地も專賣制度であるとして内地のそれは煙草と樟腦と共に大藏省專賣局が其衝に當つてゐる、即ち内地の製鹽業者の製造した鹽は自家用鹽（一人當り年二十斤まで）を除いては全部之を政府が收納する、收納の方法は原則として政府所定の場所、期日に製鹽業者をして收納官署に持參納付せしめ、例外的場所即ち産額寡少で交通不便の地に於ては産地に於て指定を受けた買受人に引渡させる。納付鹽は其鹽質及び包装の良否を検べて秤つて後鑑定する、鑑定は技術者が之に當り乾濕、色澤、夾雜物の多少等を検べて、等級をつけ、各等相當の價格を以て買上げる、その買上げ價格は翌年適用すべきものを毎年十二月政府が定めて公示する、又政府は指定商をして海外や植民地から鹽を輸入せしめ輸入地に於て之を專賣局が買上げる、之等專賣局が買上げたもの

を一定の値段で指定の元賣捌人に賣渡し、元賣捌人から指定の小賣人に、小賣人から更に消費者に夫々一定の利益歩合を加へた値段で販賣する。但し大口需要者に對しては政府は一回一万斤以上、又元賣捌人は一回千斤以上の場合に限り直接消費者に賣渡しもする。

專賣局の組織は本局と支部とに分れ、支部の一部として全國主要都市に地方專賣局があり、更に地方專賣局の下に夫に出張所と派出所とがあつて此出張所、派出所を通じて煙草、鹽及び樟腦の收納並に販賣をやる、此地方專賣局から鹽の賣渡しを受けて一般消費者に賣渡し元賣捌人と小賣人の數は、昭和元年度に於て元賣捌人が三百廿六名、其營業所が七百八十六ヶ所、小賣人が十一万三千二百五十二人であつて一小賣人に對する人口は五百廿六人といふ割合である。

それで專賣局が元賣捌人に賣渡す値段は專賣局の買入原價に運賃、倉庫費等の必要實費を加へた一定の價格であつて、又元賣捌人、小賣人の販賣値段は夫々の仕入値段に政府の認定した運賃と、夫々元賣三分、小賣六分の利益歩合を加へたもので、例外として輸移出用、特種産業用としては特別の低減價格を以て賣渡し、又工業用鹽については當業者の自己輸入を認め、以て産業の保護獎勵に務めてゐる。



扱て鹽の需給を觀ると、昭和元年度に於て供給の中、内地製造高が十億二千三百十九万斤、輸移入高が四億二百三十一万斤で供給合計十四億二千五百五十万斤である、之に對する需要は輸移出高が二千六百五十五万斤、内地消費が十三億八千六百六十二万斤、需要合計は十四億千三百二十二万斤になつてゐる。

所で内地鹽の産地を調べて見ると香川、山口、兵庫、岡山、廣島、徳島、愛媛、愛知、大分、宮城、鹿兒島、沖繩、福岡、石川、千葉の十五縣で製造人員五千四百九十九人、製造場四千八百八ヶ所、鹽田五千八百四十町歩、其製鹽高十億一千五百九十五万斤で、之等製鹽地の中でも所謂十州の沿岸、即ち瀬戸内海に面する播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、阿波、讃岐、伊豫の諸國、之を縣で云ふと、兵庫、岡山、廣島、山口、徳島、香川、愛媛の七縣が主要産地であつて此七縣で内地製鹽高の九割を占めてゐる。

製鹽技術の進歩 之れ等十州地方の沿岸は淺瀬遠く連つて地質が鹽田に適すると共に、他地方に比して大氣乾燥して雨量少く、製鹽に適してゐるために古來發達したものであろう。鹽

田の良否は海水の含有鹽分、潮の満干の差、地質、天候、温度等の如何によつて極る、海水の含有鹽分多く潮の満干の差甚だしく、従つて海水の吸収量多く、地質も亦海水の吸収に適し、其上温度高く、雨量少く、大氣乾燥して、蒸發力の強いものは良田とされてゐる、所謂十州の鹽田は之等の條件に適つてゐるのである、但右の諸條件の中、潮の満干の差は、近來排水ポンプを使用するやうになつてから問題でなくなり、低田の如き却て異常な收獲増加を見る程になつた、又天候に就ても技術が進んで來たから昔程著しく收獲に影響することはなくなつた。

一方政府は明治四十三年製鹽地整理に關する法律を公布して四十三、四兩年度に涉つて内地の鹽田中、組織幼稚、産額寡少、生産費過大なもの、若くは專賣行政上不得策な小生産地等を淘汰整理し、鹽田を集團せしめて、品質の改良、經費の節約を計つたが、此鹽田整理と其前後に自然淘汰された結果、專賣法施行當時の明治卅八年度と昭和二年度とを比較すれば、鹽田は二千三百町歩餘を減少してゐるが、それにも拘らず製造高は却て倍増に近い激増である、即ち、

鹽田段別

製造高



卅八年 度

(單位町) 八、〇八三

(單位千斤) 五五四、六八三

二 年 度

五、七七六

一、〇三一、八九七

右の如くで製鹽技術も近年長足の進歩を來して居る。

併し政府の廉價供給主義から謂へば關東州鹽、青島鹽等にも相當頼れる今日、内地の不良鹽

田は一層整理の必要がある譯で政府は五十二議會に鹽田整理法案を提出し更に千町歩の不良鹽

田を整理することに決定した、本年度七百町歩、明年度三百町歩を整理する筈である、尤もこれ

れには鹽田の良否判別や鹽田廢止に伴ふ従業員失職と云ふ社會問題も伴ひ、何れの鹽田を整理

するか政府は目下慎重に調査中である、参考に鹽田關係者を調べて見ると、昭和二年度(同四

月一日現在)に於て鹽田所有者が四千六十五人、自作者が二千四百九人、小作者二千五百九十

三人、從業者が四萬四千七百八十七人である。

温泉で煮た鹽

内地の製鹽の中には量は極少量乍ら鹽田以外の製鹽がある、其第一は機械

製鹽と稱するもので、海水を直接煮詰めるのである、鹽田の製鹽場では普通含有鹽分十七度内

外のものを煮詰めるのであるが、海水は三度程度の鹽分しか含んでないからこれは餘程燃料の

安い所でないといひ合はない。長崎縣今福でやつてゐる。第二は海水から飲料水を蒸溜する時の

副産物としてであつて、之も長崎縣でやつてゐる、又第三は昆布からヨードを製する副産物と

してゐる、第四は温泉の熱湯を利用して海水を直接煮詰めるのである、之は鹿兒島縣の揖宿

町でやつてゐる、別府温泉地方の民間へも此製鹽法を許可して、一時は相當製造したが近年餘

り振はない、之等鹽田以外の製鹽が昭和元年度に於て七百廿四萬斤で、鹽田の製鹽と此等の製

鹽とを合計したものが前掲の内地製造高十億二千三百十九萬斤なのである。そして此製造高の

中自家用鹽を除いた政府への收納高が十億一千五百七十七萬斤、此買上げ價格が三千五十六萬

圓である。

内地鹽の供給で不足な分は輸移入鹽にまつ譯で、昭和元年度の輸移入高合計は四億二百三十

一萬斤、價格にして四百三十六萬圓になつてゐる、此輸移入鹽の内譯は左の通り。(單位千斤)

關東州鹽

一一七、七二七

青島鹽

一一四、一〇二

其他外國鹽

七九、四三四

臺灣鹽

九一、五〇〇

右の中、其他の外國鹽といふのは主として埃及鹽、西班牙鹽、獨乙鹽等であつて獨逸鹽のみ

は岩鹽である、そして之等輸移入鹽の中には其儘用ふるものと、再製、若くは加工して用ふる

ものとある、輸移入鹽の大部分は所謂天日製鹽であるから、結晶は粗大で色澤は不良である、



それで工業用、醸造用等には其儘使用せられるが、漁業用、漬物用等には其儘用ひ難いので粉碎、洗滌、再製等、加工して用ひてゐる、其中でも再製したものは食用として内地鹽に比べて一寸も劣らない、大正七年以來政府は山口縣三田尻に直營の再製工場を、又同縣下松に粉碎洗滌工場を設置して再製加工をしてゐる外、冬期の閑散な時期を利用して製鹽業者に稀薄な鹹水に輸移入原鹽を混和して再製鹽を製造させてゐる。

之等の再製加工鹽は昭和元年度に於て普通の再製加工鹽が七千八百九十九萬斤と外に食卓鹽が三十三萬斤になつてゐる、食卓鹽は最良の鹽でよく西洋料理店等に備へられ此節は家庭でも見受けられるやうになつた。

**鹽の貯藏は** 鹽は專賣制度であつて内地鹽は製鹽業者から、輸移入鹽は輸移入地に於て政府が買上げて、之を一定の卸賣人に拂下げることは前に申したが、之等の鹽は乾濕、色澤、夾雜物の多少等によつて等級を附し、其等級によつて拂下價格を異にする。本年度の一般賣渡價格、即ち鹽元賣捌き人に賣渡す價格の中内地鹽、關東州鹽、青島鹽の原鹽の賣渡價格を示すと百斤當り左の如くである。(單位錢)

- △内地鹽 一等三七〇 二等三五〇 三等三三〇 四等三一〇 五等二九〇

△移輸入上等原鹽 三二〇

△移輸入並等原鹽 三〇〇

此拂下價格は昭和元年度以來据置であつたのを、政府は一般物價の平準が低下してゐる今日だからといふので廉價供給主義に則つて本年一月一日から引下げた新拂下價格である。尙夾雜物は輸移入鹽殊に臺灣鹽に多いが、其中でも青島鹽の夾雜物は泥が大部分で、他の夾雜物は内地等鹽よりも却て少い、工業用鹽には泥は一向差支へない、又食用として身體のためから謂へば、夾雜物によつては却てあつた方がよいとのことで此點から夾雜物の少い一等鹽、二等鹽などよりも比較的多く含んでゐる四等鹽五等鹽の方が身體によいと醫者は謂つてゐる。

何分鹽は生活必需品であるから政府は明治四十二年以來鹽の備荒貯蓄を企て、現在では常時約八億斤内外の鹽を全國交通至便の地の官庫と借庫に保存することに於てゐる、昨年七月末現在貯鹽高は七億七千三百萬斤である、所で鹽は米なんかと違つて好都合なことは、貯藏しておいても味は變らぬのみならず、却て質がよくなる。即ち苦汁等が下層に抜けて却て質が良くなる。

**柿の實止めに鹽** 鹽が何う云ふ風に使はれるかと云へば昭和元年度に於ける需要總高は十



四億千三百十二萬斤で其中輸移出高が二千六百五十萬斤、内地需要が十三億八千六百六十二萬斤であるが、此中内地需要の用途別消費高を示せば左の通り。(單位千斤)

用途別	消費高	用途別	消費高
漬物	四〇七、七〇四	醬油製造	三五五、六〇九
味噌製造	二四六、三〇七	麵類製造	二六、九六六
魚類鹽藏	九五、二四〇	選種	一、〇六一
肥料	一、二九七	家畜	九、九三九
獸皮保存	五、五二六	窯業	四、五五四
工業	一七一、九〇三	鑛業	七、八一七
製鋼	一一三	其他	五二、五八四
計	一、三八六、六二〇		

右の中選種用といふのは農家が種子を選ぶ方法として、水に對し一二パーセント程度の鹽を混ぜて其中に種を入れると比重の關係上良い種子は底に沈むが悪い種子は浮かぶので、之を利用して種子を選る、肥料用といふのは間接肥料としての苦汁等に用ふるもので、家畜用とい

ふのは其儘家畜に舐めさせたり飼糧の味付に用ふるものである。工業用は後に別に述べるとして、鑛業用は鹽酸銅、鹽酸銀等を製するのに混ぜて用ふるもので、製鋼とあるのは鋼の硬度を増す爲に製鋼の際混ぜて用ふるのである、尙一般に利用されてゐる譯ではないが鹽の面白い作用は柿の實の落ちるのを防ぐことである、柿の實が熟しないのに落ちるのは、ヘタと實との接觸する所に水分が多すぎるとこの水分を少くすれば落ちるのを防げる、それには根の廻りに鹽を蒔くと苦汁が水分を吸収して上に上る水分が減り實の落ちるのを防げるのだそうだ。

鹽の用途の中で近來化學工業の發達と共に益々重要性を帯びて來つゝあるのは工業用鹽である、前掲昭和元年度の工業用鹽の消費高一億七千九十九萬斤は大正九年のそのの八千二百七十五萬斤に比すれば倍増以上の激増である、そして工業用鹽の中でも主要消費は曹達工業、染料工業で、右の中一億四千四百二萬斤から使用して、曹達工業は化學工業の中でも所謂基礎工業で鹽が化學工業に如何に重要であるかが知れる。

**改むべき惡習** 工業用鹽に就ては自己輸入が認められてゐるので多量に鹽を使用する大會社では價格低廉のものを時に應じて自己輸入をしてゐる、但自己輸入をする際には年度始めまでに政府に届出て政府から其年度の自己輸入命令を得ておかなければならない、そして自己輸







て(荒引き)大豆、小麦同數量を室に入れ後で麴菌を加へて仕込み桶に入れる、そこで鹽を水に溶解(鹽一對水一の割合)し適度に加減して仕込み桶の中で混合する、これがモロミとなり春から夏にかけて自然に醱酵して完全な分解作用をする、即ち熟性モロミが出来る。更に之れを袋に入れて絞り上げたのが生醤油、精製機にかけてせば即ち醤油……口で云へば誠に簡單。然し醤油は成可く古くなつたものが賣まれるので製造家は少くとも二ヶ年は貯藏して置いてから賣出す。……のは眞面目な醸造家、安物本位の醤油屋さんは出来たら早速賣り出すと云ふのもある。夫れは兎も角以上が大體の生産過程である、最近では化學醤油と云ふ所謂早作りの方法もあるが尤もこれは二十年前位から初められた。

**日本醤油の破産** 今から二十年程前鈴木藤三郎と云ふ人が醤油の早作り法を發明したと觸れ出した。一年に四回も醤油が出来ると云ふのである。コリヤ醤油醸造の大革命だと某々學者たち迄そゝつかしい提灯持ちをつとめたから忽ち之れを基に金一千萬圓也の日本醤油會社なる大會社が出来上つた。思ふ壺にはまつた鈴木藤三郎君即ち社長兼技師長と云ふ格で納まり、株主どもは今に五割十割の配當が貰へるものと首を長くして待つた。コレは前途有望だと兜町の株式市場ではその株券に羽が生へて飛ぶ如く賣れた。

去る程に東京小名木川と尼ヶ崎工場の大煙突からは雲かと計り黒煙たざり立ち日醬製醤油が大手を振つて市場に現はれ出した。儲も不思議、此の醤油味が少し何うも妙であつた。夫れでも刺身にかけたり香の物につけて之れは結構と世間では舌を鳴らしたのもあつたが、さうかうする内に何處からともなく奇怪な噂が傳はつた……小名木川の水が醤油臭いぞ、川の水が黄色に變ると云ふのである。

同時に驚ぐべき尼ヶ崎からの飛報が東京の株式界をつむじ風の如くカキ亂して仕舞つた、日本醤油會社の株式は瓦落又暴落遂に止め度なく崩れた、何軒かの株式店は暴落の爲めあへなく破産した……儲も日本醤油なるものは始めからイカモノで其早醸造法なるもの一顧の値なく、要するにた出来損つた醤油を川に捨てたり或は防腐劑を混入して賣つて居たことが暴露し尼ヶ崎工場の製品全部が先づ廢棄を命ぜられたことが判つた。世間がアツト開いた口がふさがらない内に會社はとうとう破産して仕舞つたのである。それから後にも所謂早造り法なるものが度々出て來た。近頃元大藏省の技師榎野某氏が東京の小石川に日本醸造會社を作つて早造りの研究を行ひ丸醸なる醤油を作つてゐる。

**近頃の醤油**

夫れは兎も角大醸造會社や心掛けのよい工場は別だが、一般に醤油の醸造



場は非衛生的のものが少くない、之れ等の設備や醸造法に就て幾多改善を要するものがあると思ふ。又同時に近年は資金關係其他の事情の下に若い製品を早出しする傾きがある、其結果として味が十分に熟成せずアダ鹽辛いものが少くない。往年個人醸造の時代に大いに名聲あつたものが近年經營の變化に連れて其味が大きいに落ちたと云はれるものもあるなぞ其の爲めであらう。

偕て現在全國の生産高は何の位であるか、一昨年醬油造石税が免除されて以來醬油醸造の採算が幾分有利となつた結果、醸造高も殖えて現在では年額約五百萬石、内自家醸造が約百萬石、即ち商品としての醸造高は差引の四百萬石程である。此の内約百四五十萬石が會社組織工場の出で残餘が各地の醬油藏の出である、關東方面に於て最も普遍的に賣られて居る製品としてはキツコ一萬、山サ、ヒゲタ等で之等の生産高は約七十萬石、其他山々、上菱、キツコ一正、山二、甲子、入正等々いろいろ種類があり、東京場末では無名ものの量り賣りも可成り行はれて居る。一流の割烹店などになるとワザワ關西方面から醬油を取り寄せて居るものもある。

次は相場であるが、此値段を決定するには矢張り倉元と市中の間屋組合(十四軒)が相寄つ

て協議することになつてゐる。然し大體秋頃の需要期に向ふとかまたは原料が意外の變動を見たとか特殊な事情がない限り餘り變動はない。

**善惡の見別け方** 倉元と問屋組合に依つて協議決定した標準値段、即ち問屋から小賣商に賣渡す値段が現在一等物キツコ一萬、山サ、ヒゲタで一樽正味九升五圓三十錢、二流、三流となると更に舊來の格差を以て決定するが、範圍は相當廣いので確かな處は判らない、兎に角安物となると三圓邊りまである。

然し大體に於いて倉元と問屋組合の協調は非常に良く、從來餘り販賣上の競争などは見受けられない。今年の如き比較的生産過剩氣味にあるにも拘らず例の協定値と云ふものは存外に嚴守されてゐる模様で、他の商品と一寸異つた傾向を見せてゐる。

それが小賣店に渡るとその店の資金關係や營業方針如何で値段は相當違つて来る、つまり薄利主義で元價に五分位の利を見て賣つてゐるものもあれば、六圓から六圓五十錢位で賣る處もある。また瓶詰にしても店に依つて八十錢のもあり九十錢位のものもある。然し樽入れにしても瓶詰にしても酒と違つて餘り惡辣な混合法は行はれてゐないやうだ。

然し醬油の善惡を見極めることは素人としては一寸困難で、實際使用して見ての結果に待つ



外ない、けれども大別して見ると色、香、味の三點であるが、色は成べく透明的なものが良く香も鼻にツンと来ないやうなのが良く、味は指先につけて一寸悪辛い感じのするのは駄目、これは専門家の話して、普通はどうしても一度使用して見なければよく判らない。兎に角悪い醬油は少し位値段が安くても割が利かない。従つて量を多く必要とするから結果に於いては非常な損となる、これに反して上物は少量でも煮物の味付が良く出来るから家庭では充分品質を選別して使用することが肝要だ。

### 薬屋の巻

薬は東京の名物 雨後の筍の如く生え出るものは新薬と醫學博士、醫學博士と云へば萬病に利くが如く新薬と云へば起死回生の妙効天の配劑の如く人生最後の五分間には何は措いても博士を請じ新薬を盛つて措いて諦めを付ける、科學の世の中に之れは又不思議千萬である。越中富山から紺の風呂敷に一と背負ひ背負ひ込んだ舊式の薬屋が、醫學博士と新薬のグヨヨウなる帝都の眞ん中を横行闊歩して東京を天下最上のお得意場として居る。

紙屋に云はせれば一國文化の程度は紙の使用量で判ると云ひ、砂糖屋は砂糖で判ると云ひ、

薬屋は最も多く薬を使用するものが最も文明國であるといふ。大にして見れば所謂文明病の培養が八百八病の原則を打破して、不景氣病もあり、神經衰弱も殖え、強精劑を必要とし、カルモチン、猫いらすの愛顧者も殖え、トツカピンやら妙な病氣の豫防劑常用者も殖え、利益は昔通り藥九層倍から低下し乍らも明治から大正へ更に昭和へとスト賣上高の増加したのは正に事實であらう。確かに文化は薬を多用することは事實である。

小にして東京だけを見る、統計に依り市内の賣藥業者千九百二十三軒、醫藥兼業の今日醫者もこれに合算すれば無量約四千軒の藥供給者が市内に存在するのである、驚くべき數字である。黄塵萬丈、暴力團横行、自動車の衝突、ピストル強盜の出没、空ツ風と早魃、油煙と風紀の頹廢、活字の縮少、就職難、東京市が日本に於て一頭地を擡んずる文化の中心地であり即ち萬病の巢窟、換言すれば醫藥萬能の地である事も即ち讀める。

従つて薬屋の増加は昔の藥九層倍を低下させて今では普通商品の利鞘か乃至はそれより幾分毛の生えた位の利益しかない。先づ商品の経路は製造本舗から問屋へ、問屋から小賣の賣藥店へと一ふ順序を踏むのであるが、問屋はホンの僅かばかりしか口錢を取らない、問屋の儲けは口錢よりも賣上高による割戻しが大きいのである、東京ならば一回御用聞きに廻つて翌日配達



することになつてゐるから小賣店へは一日置きに問屋から御用聞きが廻つて來ることになる、勘定は二十日切換へで一ヶ月間は貸す問屋が多い。そこで卸値段は小賣値の七掛が平均であるが六掛半位のものもある、仁丹などは八掛である。比喩にしても九層倍儲かつた薬が僅かに三割か三割五分の儲けしか見られなくなつたのであるから、他の日用品の儲からないのもさこそと察せられる、尙此中から雜費も出るから純小賣益は二割也といふことになる。

**賣行のいゝ賣薬** 賣薬の請賣りは所謂トツ、キ易い商賣の一つで、恩給取りの片手間や留守番仕事には割りに世話が焼けずに出来る。陳列棚やガラス戸棚其の他の容器も體裁をかければキリはないが、先づ一と通り揃へて五百圓、商品は賣薬二百圓、化粧品が三百圓、雜貨百圓位もかけると一通りは揃ふ。賣薬の間屋は日本橋へゆけばザラにあるが、玉置商店や大木商店などが有名である。化粧品や雜貨の間屋も日本橋邊へゆくと隨所にある。最初一回現金で仕入れれば次ぎから多くは月末拂で取引が出来る。

然し同業者が多くなり競争が激しくなつた今日ではなかく以て安閑として居られず、郊外などでは外交を雇ひ込んでお得意廻りも相當に行はれる。之は酒屋などと同様帳面で月末勘定であるだけに貸倒れも稀にはある、醫者の所へも勿論廻つて薬品の注文をとるのであるが、今のお醫者さんはなかなか算盤高くて甲の店より一錢高い乙の店より二錢高いなど、仰あつて中々儲けさせて呉ないそうなる。それから此の賣薬業を期節的に見ると夏が忙がしい、夏期は不養生の時期で又、病氣が跳躍するからである。閑なのは他の商賣と同じく二八(二月八月)であるそうなる。

賣薬として能く捌けるものは何しても仁丹、カオール、大學目薬、中將湯、龍角散や太田の胃散、星の胃腸薬、其他と云つた様なもので總じて宣傳方法が上手ならば賣れる、新聞に大きな廣告の出るようなものが最もよく賣れると云ふ。然し藥効能書ほど効かずの反對に効能書近くまで効くものでなくては勿論賣行は永續しない。

東京ではどの小賣店でも賣薬は餘り割引はしないが、流石大阪は商賣の劇しい土地であるだけに割引が流行する。お客の方で値切らずとも賣る方で定價の何掛かで賣る。仁丹など定價の六掛で賣つてゐるそうである小賣屋じや二掛位元を切らして奉仕してゐる譯だ、大變な勉強振りである。こんな調子であるから大阪の藥屋さんは賣薬だけで儲からず御法度の對症投薬のようならくりをもやるそうなる。



化粧品の中からくり

薬屋に化粧品はつきものであるが、柳も芽を吹き櫻も咲き、行樂の春が来ると俄に其實高が殖へ出す、男が常緑樹なら婦人は花樹の如く、春と共に妍を競ひ美を争ふ本能性の然らしめる所であろうか。又世間の景氣がよくなつて婦人にも小使錢の餘裕が付くと化粧水や白粉の濫費が始まる、不景氣の昨今では安ものゝ小堀しか賣れねものが、好景氣時代には高價な舶來品や大堀ものがドシ／＼捌けてゆけると云ふから現金なものである。ソコで薬屋さんは白粉を景氣不景氣のバロメーターとして居るそうなる。

此化粧品の儲け工合は、有名品と非有名品とで大に違ふ、有名品は呼び大鼓の代りに損してまで勉強してお客の足を引くおとりに使ふのであるから漸く二三分位の儲けで、五分の利益が上るものは少い、其處に行くといふ非有名品は三割の利益は普通で五割位儲かるのが少からずある。有名品中の花王石鹼の如きは一打原價一圓六十五錢であるが、之を一個十三錢で賣ると賣上高が合計一圓五十六錢となつて、一打につき九錢と、そしてお辭儀が十二度損が立つ、又三ツ輪石鹼の如きも原價で賣つてる店が多い。

之は薬屋の商略で、名の知れたものを安く賣るとアノ店は勉強するといふ評判を儲けようと云ふ策戰、店が盛れば自然他の商品の賣行が多くなつて其方で大に儲かるから結局得になる。

従つて番頭任せにして置いて有名品ばかり賣つて居たのでは薬屋は儲からない。主人が店に頑張つて夫れとなく婦人客の御きりようでもほめて、儲て有名品も結構ですが之が又かくれた優良品でこわすとかなんとかこまをすつて非有名品を然るべく押付なくては、タンマリした儲けは出て来ない。

此の邊が商法のコツで麴町の或化粧品やさんなどは抑も小學校の小使上りだが、婦人客の急所をつかむことは殆ど天才でお客さんを友達扱にし乍らヒョイ／＼とわざとらしからぬおべつかを使つてはいろいろのものを賣り付ける。彼れ之の内にはたまに成功して其の店には毎日銀行からワザ／＼預金を集めにゆくと云ふような大層な評判まで取つた……とは嘘のような事實だつた。

妙薬黒燒の由来

白衣の薬劑師が鹿爪らしく控へて處方調劑をする所まで行かなくては薬屋としては本式でない。此薬劑師が調劑するようになれば、賣薬ばかりの利益でなくて此方からの利益があるが、それに薬劑師がめて調劑するのではないとは店の信用が違ひ、賣薬の賣れ高も亦多くなつて商賣が繁昌するといふものである、處方箋による調劑になると利益率も賣薬の比でない。



東京府開業藥劑師會の規約で此の調劑料を定めてある、それによると散藥十二錢、水藥十二錢、丸藥十五錢、膏藥十五錢（以上何れも一日分）となつてゐるが、高貴藥を用いた場合は此の限りにあらずとある。右の料金として藥局の利益は何の位になるかと云ふと、藥劑が三錢、壘が三錢、キルク栓一錢合計七錢で、五錢の利益と云ふ勘定になり、一日分十五錢づゝ取れば八錢儲かることになる、ザツト半分儲かると云ふ仕組み。藥劑師が處方に依らず對症投藥をしないと、免許を受けずして醫業を爲したと云ふ科で金五百圓以下十圓迄の罰金又は科料と云ふキツイお灸を据えられる。藥屋の中の變り種は黒燒屋で、下谷の黒門町邊へ行くと黒燒の本店だとか元祖だとか云ふのが堂々たる門戸を張つてゐる。勿論いもりの黒燒ばかりではない、何の黒やきでもある。アイヤお立會抑も此の黒燒は平城天皇の御代諸國の神社に秘方と傳へられる藥方を集められ、大同類聚と云ふ藥本を編まれた。即ち其本によれば和藥は大國主命、少名彥名命が藥方を案出せられたもので、其の藥の大部分は黒燒であつた、云はゞ神代以來黒燒は吾が大和魂について廻つてゐる譯で即ち光輝ある歴史の持主である。爾來春風秋雨何百年、或は漢藥に押され明治此方は獨逸流の洋藥に壓迫されて今日に至るが、今以て東京市内外に黒燒屋五六十軒を算する

に見ても其藥効のあらたかさを知るべし……と云ふ譯。

黒燒のいろく

いもりの黒燒が三角關係四角關係にも利くか何うかは知らぬが、情愛ラヂオの役目をする事は昔からの云ひ傳へである。箱根山山椒の魚や、孫太郎蟲と一つ籃に入られ江戸情調のノンビリした賣聲と共に、今も時々其行商を見受けるが、此のいもりの黒燒を始めに黒燒屋の商品の中で最も賣れるのは猿の頭の黒燒だ、これは腦神經病に特效があるんだと黒燒屋は云ふ。大一ヶ四圓五十錢（六十日分）と云ふ相場。

縞蛇や蝮の黒燒が肺病肋膜炎の藥だとされ、之は一疋六七十錢、いたちの黒燒が下の病氣、赤がまの黒燒が一疋四十錢で効能之れ又同様、山鬼、青鳥、かわうその膽、石龜、もぐら、牛や馬の齒、能鷹、木鼠、澤がに、鯉等の黒燒はまだよいが、おけら、かまきりから狐の舌の黒燒となると何に判くのやら丸で判じものだ、獨りこうした動物計りではなく、カフェーのベークドアップル宜しく林檎の黒燒まであつて、之れは脚氣の妙藥だそうな、ひぐまの鱸詰なぞと云ふ得體の始めぬものもある。黒燒の外に干した藥も賣る、前記の孫太郎蟲や山しよの魚は子供の蟲藥、云はゞ蟲を以て蟲を制しやうと云ふ代物、虎の骨の干からびたのはリヨウマチス、鹿の胎兒や猿の胎兒の干した



のは婦人血の道の妙薬。牛馬のたけり鹿のたけりなるものに至つては敢て説明をはぶくが支那人が最も喜んで飲用すると云ふ。牛黄は牛の肝臓の中にあるもの、強心劑で一匁十三五圓から二十圓と云へば正に白金同様の價打ち、熊の膽は一匁三圓位。  
東京府下の千住へゆくと先祖代代十三世連綿として、黒焼を専門に焼いてる黒焼の名人がある、此の黒焼は原形を崩さぬやうに焼くのが秘法、例へば猿の頭なら一杯に入る位の壺に猿公の首級を入れて其上から粘土で塗り、糺がらの中でむし焼にする、電気や瓦斯ちや駄目だそう  
な、いもりは雌雄一所に入れて焼くこと勿論である。

近頃學者の間で此の黒焼の薬効をひそかに研究してゐる人がある。最近奉天病院の晴光藥學博士は黒焼一通りを仕入れて行つて研究に腐心してゐると云ふ噂だし、藥學者中にも黒焼を禮讚する者もあるといふ。獨逸から來るカルクツトと云ふ藥は整腸劑であるが、これは黒焼の粉末であるといふことである。日本の黒焼大に意を強ふするに足ると云ふもの。

### 牛肉店の巻

東京の肉類消費高 尊王攘夷の昔は見るもげからはしかつた牛肉だが、例へば被岸であらうが孟蘭盆であらうが、父の命日であらうが今では一切お構ひない、五慾を脱した山門からすら時にかすかにスキ焼鍋の香が通ふ。

雑とした數字であるが東京市内外には凡そ千五六百といふ牛肉切賣店がある、此の外に俗に云ふ鍋屋例へば赤坂の三河屋、銀座の松喜、神田の池國、本郷の恵知勝、淺草のちんや、平野、米久、京橋の河合、三田の今福から其他大小何百軒の外更に牛肉を加工して賣る洋食店をも加へたら實に驚くべき數字に上りそう。實に生肉として東京市内外で需要せらるゝ數だけで一日七八十頭と云ふから盛なりと云ふべし、更に罐詰の大和煮からコインドビーフの類まで加へて見たらば東京のカロリーの大部分を牛肉が背負つて歩いて居ることを知るであらう。偉なる哉牛肉だ。牛肉の外に豚が一日二百五六十頭。鶏が市内一日平均六千七百餘羽、隣接郡部六千九百餘羽、合せて一萬二千九百餘羽也が締められる。

ビッグ、エンド、オックスと書いてあちらの人達をたまげさせた牛肉切賣店があつた。明治時代から見ると、電動機械庖丁を据付けた今日では、所謂神戸ビーフなる名稱は昔語りと消え、敢て産地を説かずとも需要者の舌が直に肉の良否を鑑別して仕舞ふ、東京人の肉に對する味覺



も亦大いに向上したものだ。

然し若産地別に見れば、東京で消費されるものは上等ものは伊賀、伊勢、江州方面から輸入され、播州や南部からのものは多く中等品である。青島や濠州邊のものは近來餘り入らぬが、満鐵では滿蒙牛を大に安く運んで東京人の肉食熱を煽ろうと云ふ計畫もあるそうだ。

猪夫れ等産地、例へば龜山だとか四日市だとかを始め各地には夫々牛の市場がある。農家が牛を其處へ曳いて行つて賣る、博勞(荷主)が買つて東京へ送る、猪牛の道行だが今は汽車で(一車に八頭乃至十頭乗る)突ツ走るから道草喰ふ閑もなく先づ東京は大崎、箕輪邊の牛の御旅館に到着して休養する。そして問屋へ賣られる迄は三食付一泊五十錢也位の宿賃を拂ひ堂々たるホテル生活を樂しむ、牛も茲までは極樂。

いよ／＼厩舎の主人がお仲人となつて問屋へ嫁入するか或は又、産地から送りのついて來たのは産地と直接電報の遣り取りで値を決める。此外産地からの委託販賣もある、又問屋が産地の買子(博勞)に口錢を出して買はせるものもある。何れにしても問屋の手へ渡つてから屠場へ送られて茲に衰れ果敢なくも往生最後を遂げるのだとは氣の氣、南無阿彌陀佛。

原價と小賣値

皮と臟物とが別に處分され之れ又相當の値段になるが、残つた肉が骨ぐる

み小賣屋に卸される。一頭の牛の目方は凡そ四五百斤であつて、骨や皮や臟物を除くと肉が半分位になるといふことである。

卸値段はカタ(前脚の着いてる方)とトモ(後脚の着いてる方)とで百匁について十錢位違ふ、カタは百匁四十五錢トモは五十五錢、平均の五十錢と云ふ處に目やすが置かれる。骨や筋や油や賣物にならない部分を除いて五分に上げれば原價一圓につく、之を組合の協定値ではヒレ一圓八十錢、ロース一圓六十錢、並ロース一圓三十錢、最上一圓十錢、次品一圓、コマ切れ四十錢に賣ることになつて居るが、實際の賣値はモツト安い。夫に高く賣れるヒレ、ロースの量目が少いから他處で見るとは儲からぬ、即ち一頭の牛でヒレが一貫二百匁、ロースが六貫目位しか取れない、又競争が激しい結果協定値以下に勉強するから勘定通りには行かない。

ロースは背骨の處にある肉である、場所柄肉が動かないから軟かで甘い、更にヒレは内ロースとも云つて背骨の裏(内臓に面した内側)にあるのであつて一層質がよい、ヒレはトモに限つてあるものでカタにはないから前脚のみブラ下がつる肉屋には本當のヒレの有無が疑問となつて來る、骨と骨の間の肉で大きく切れないものを小間切れと稱するのであるから、小間切



れ強ち下級品ではないが、之へ切り屑や悪い處を混ざるから味も劣るし齒を傷めるやうなことに  
 にもなる、肉のよし悪しは素人には一寸判別が付き兼ねるが、油の細かあるものがよいとさ  
 れてゐる、ロースは霜降りのやうに油が混り、ヒレはイナズマの如く細く油が混つて居る。  
 山條さんの、滿蒙牛はいざ知らず青島牛に至つては内地牛に比して食味が劣る、稀に一度位  
 食つたでは判らないかも知れないが、食べ比べて見ると直青島肉の不味さが判る、値段の點に  
 至つてもロース百匁九十錢であるから日本牛に比して何割も安い、青島牛を日本牛と云つては  
 賣らせないことになつてゐるが、安いものは青島と思へば大した間違ひはなからうと云ふこと  
 だ。味の一番いゝのは山口縣の牛であつた、處が近年雜種が流行するようになつて純日本牛が  
 減びると同時に食味も低下した、牛の混血兒は早く成育して目方が多くなるから飼育業者には  
 得であらうが味の悪くなつたのは困る。

機械切りの肉

丸々と肥つた豚君は之れを美しく見れば、洋装チンクリンのモガ嬢であ  
 る、あ。ん。この粕や、お芋の尻尾で肥つたことを思ひ出せば、正にそれ等モガ嬢の妹分に相異  
 ない。水ぶとりは水豚と云つて味が悪く、人間なればモチ肌、豚であるから、もち油と云ふ油  
 の締つたべたべたするやうなのが豚肉では上等ものである。

昔は支那から遙々渡つて來たが、圖體ばかり大きくて一向に身がないのが、不評の基となつ  
 て今日では内地産が主である。此の豚の飼育は有望な仕事であるが、何様臭い上にウキー／＼  
 とソブラノだか悲鳴だが知らぬが、下手な聲樂と同様近所迷惑で家庭的には向かない。然し肉  
 は料理讀本片手に何処何分の調理を受けて、一家團らんの舌づつみを打たせるには、牛肉より  
 安値で打算とそしてカロリーの下に年年需要高は殖へてゆく。普通一頭十五貫目位あつて卸値  
 四十五圓見當。毛はブラシとなり皮は靴や靴に進化し、骨はボタンや裝飾品となるが、之れ等  
 を除くと肉は大體半分、小賣の儲けは二割五分や二割にはなる。

一體肉屋の商賣は、素人には向かない。第一あの肉を切るのが六かしい、夫れ以上に肉の仕  
 別けが更に六かしい。此の仕別けが出来て切方が甘ければ、堂々たる一人前の肉切職人で住込  
 みの上最低四五十圓から普通六七十圓の給料を取る。腕の冴えた切方を雇はうとすれば、百五  
 十圓位は出さなければやならない、軍人なら尉官、會社なら係長、役人なら警部か判任官の古手  
 や高等官の新米級に當るから馬鹿にならぬ。

近頃肉切機械を据付けて切賣するのが流行るが、あの機械は獨逸製で六百圓、オランダ製で  
 八百圓。電動機をかけて全速力で切ると一時間の切上能率約二十貫、厚薄自在に切れるから之



なら素人にも樂に扱へる、場所は廣くは要らぬが、サラリーマンの出入口に當るような所がい。此の機械で薄く切つてキレイに白血に盛上げてある所は中々おいしそだが、總て肉は薄く切れば軟かではあるが、味は何うしても落ちる。但豚肉は油つこいので此の機械では一寸切り肉い。

### 煙草店の巻

岩屋天狗の鼻張り 『ピンヘット、ピンヘット、サンライズ、カメオに追はれて、トツピンシヤン』煙草私營の昔。岩谷松平君が赤天狗を看板にて、勿鰐納税三百萬圓にお上りさんを魂消さし、村井吉兵衛君が當時流行の自轉車を懸賞して、ピンヘットの大擴張戦と出れば千葉松兵衛君がカメオ？をスターとし俗語入りで血の出るような大販賣戦をやつたものだ。夫れが政府專賣となつて『敷島の心和を人とは朝日にほふ山櫻花』の口付煙草四種を手始めに口付、兩切、刻みの種々が賣出された。兩切は職人、労働者、農夫等の社會に愛用され、敷島の和心の口付は専ら洋服階級のポケットに収まつた。大正となり昭和となつては、

次第に口付煙草は賣行きを減じて兩切煙草の需要に轉じ、昨今の不景氣では兩切の低價品に狹が生へゴールデンバットの如きは飛ぶように賣れる。

昭和三年度中に紫の煙と消へた煙草の數量、その内東京地方專賣局管内直轄分(東京府千葉縣の全部茨城、埼玉、静岡の一部)だけに就て見るも。(單位千圓)

	消費額	前年對比
口付	二九、六七一	四分減
兩切	二〇、三九四	一割八分増
キザ	七、六〇五	一割減
内地葉卷	四八	一割一分減
輸入葉卷	一一〇	六分減
輸入紙卷	一、〇三九	一割一分増
輸入キザ	四八	三分増
合計	五八、九二五	二分増

となつて居り、兩切煙草の増加が壓倒的な記録をあげ、昔紫の煙の上にはあらはれた職業別



色彩は残りなく消えてゐる。

此の中にも異常の飛躍振りを示すものはバットである。昭和二年度に於けるバットの賣上高は東京地方專賣局管内直轄分十八億九千七百七十四萬本であつたが、三年度には一躍して二十億二百四十九萬本と實に三億餘萬本の激増である、之へ同種類の御大典記念煙草グロリーを入れると二十三億萬本に達したであらうとのことだ。斯く安物には羽根がはへて飛んで行くが同じ兩切でも値段の張るナイル、アルマなどは餘り増加して居らない、エアシップでも五十本入は賣行が鈍いが十本入は良く賣れると云つた譯で、時に出す金の少い方へお客の心理は向つて行く。

安もの、時代なる哉

「煙草のんでも煙管より咽喉が通らぬ薄煙り」村田、住吉の細張り  
でボンと吐月峰を叩く、灰玉が快く落ちてチューツと下で音がする、氣持ちのいゝものである、刻みの味は或は煙草そのものよりも寧ろ煙管の通りにあるかも知れない。その刻煙草、福壽草、白梅の如き上等ものは震災前の話し、昨今では、はぎ、撫子の如き、枯れ葉とさへ輕蔑された下級品が賣行くに付けても、財界の秋風落莫たる様も推し計られるであらう、況やまして景氣の幹線道路日本橋や銀座邊で此の枯れつ葉が四十匁より五匁の小袋の方が買はれてゆく

とは……咽喉が通らぬ薄煙り。不景氣もこれではドン底ですと煙管屋さんは云ふ。

煙草の小賣だけは餘程場所を撰ぶ。淺草邊には一ヶ年二三萬圓賣れるもの數軒あるが、驚くべきものは丸ビルの出口で僅か數坪の店を張る白洋社煙草店である。あの小つぼけの店で一ヶ年の賣上十九萬兩とは豪勢ではあるまいか、即ち一ヶ年の純益二萬圓也は正に下るまい。

東北房總信越方面の旅客を吞吐する上野驛構内煙草店の賣上げが年額八萬圓、東京驛構内の店も負けず劣らずの成績を擧げる。次いで銀座の青木商店は高級品が出るので利益は割がよく、更に三越松屋内の賣店も年額數萬圓の賣上げがある。東京地方專賣局の直轄小賣人は二萬七千九十五人あるが一人平均一ヶ年の賣上高は二千七百七十五圓であるから以上の各店なぞ正に一軒で何十軒前の繁昌振りである。

小賣人の利益率は物によつて違ふ一割一分、一割四分、一割九分の三通りに別つてゐるが、バット朝日其他一般的によく賣れるものは、一割一分で百本百圓以上の葉巻や紙巻は一割九分の利益に有りつける、此の小賣店と專賣局の中間にあつて卸をやる元賣捌は東京市内に六人ある、此の元賣捌の口錢は七厘で一才少いようだが實は數でコナすから大したものになる。そこで時々此の元賣捌の權利爭奪戦やら、夫れに絡んだ利權運動が起きる位だ。



新規開業の手續

元賣捌の大山さんは「經濟的關係ばかりでなく、大衆の嗜好の變遷からも煙草の種類に盛衰を生ずる、バットの天下となつたことは勿論不景氣を意味するが、日本人の生活様式が變つて、濃厚なる食物を攝るようになった爲め、淡泊な敷島から濃厚な刺戟を持つバットへ需要が移つたのである」と説明した。

「金額の上から云つて毎年六七分増すが普通だが、昨年の消費が一昨年に比し二分しか増さなかつたのは、安價な兩切こそ賣れたが高價な品が賣れなかつたからで、煙草の消費力は年々延びつつある現勢だ」とも云つてゐた。

何様此の煙草屋は仕事の手ギレイで、資本が少く商賣は現金で利益は定められてあつて、安全簡易の商賣丈けに素人向きである。従つて東京地方專賣局だけで、一ヶ年の新規出願數が山をなす。

それに對して一々附近の圖面を引いたり、店舗の具合などを實地調査して、許否を決するのであるから、オイソレとは行かないのであると云ふことだ、出願は專賣局長宛で東京ならば淺草藏前の東京地方專賣局経田で出すのであるが、様式は六ヶ敷くない、現在營業の種類と營

業所の豫定位置を書込めばよい。

一丁四方の間に小賣人があれば絶対に許可にならない、昭和二年度東京地方專賣局管内の出願數は二萬五百人で、此内許可になつたのは三百五十人(一分六厘)に過ぎなかつた、昭和三年度は計數調査中であるが、出願數は二萬五千位に上る見込みである。

許可になつたら硝子棚又は硝子蓋付の函及硝子壘を備へ付けて、煙草を入れて陳列しなくてはいけない、等いろんな指示事項注意事項があるからそれを、嚴守する必要がある。

それから煙草賣捌規則第十七條によつて、一等地(東京)では、國華以下八種、兩切はナイル以下十一種、刻みは水府以下九種を最少限度以上の數量を置かなくてはならない、尤も旅館料理店、劇場、停車場等の特殊小賣人は、口付五種以上兩切三種以上、刻み五種以上選擇して仕入れることは差支へない、一般小賣人が最少限度の數量を仕入れる場合は仕入値段は百二十圓ばかりであるが、此數量は常備すべき數量であるからそれ以上の仕入をしなくてはならない。

但、魚商、肉類商、襪襪商、精米業、酒酢醬油釀造業、味噌製造業、油揚及豆腐商は兼業を営むことが出来ないから、出願しても駄目である(油揚豆腐商は三等地ならば相當區劃を設けて當局の許可を受ければ兼業が出来る)



白米店の巻

勘定合つて錢足らず 「頼まれれば越後から米搗」と云ふ言葉があるが、米搗きは越後の産と大抵きまつて居た。眞冬に尻切袴纏一枚で丸太の手摺りにつかまり片足に體重をのせて長い杵を踏み上げてベタンと落す、クワへ煙管か何かで一時間三四十回と云ふ速度であつたから一日朝六時から晩の六時迄十二時間杵を踏んで、精白二三俵と云ふ能率であつた。悠々たる時の流れも何時の間にか此の古風の米搗を驅逐して仕舞つた。僅かに昔を偲ぶは落語の佛壇返しに此米搗の事が出て来るだけ。

現今の白米屋は清水式とかタイム式とか、電動機仕掛けの精米機で白米にして賣る、左なくば東京精米會社とか、大規模に精白して居る所から仕入れて來て賣る。白米屋の多くは前者であるが、それでも江東方面へ行くと後者も亦尠くない。楮米屋も小規模なのは妻君が精米機の運轉手を兼ねて留守を守る、旦那が註文を取つて配達する、夫れで一日平均二三俵こなせば夫婦位の生活は樂に出来る、小僧を使つて五六俵こなせば金が残る勘定になる筈だ。今假りに玄米一石二十八圓とする、平均搗減りが七分と見て一圓九十六錢であるから、白米になると約三

十圓と云ふことになる。之れを三等米十五キロ（十五キロは一斗六合七勺）三圓七十錢で賣れば一石こなして約三十五圓となりザツと五圓の利益が上がるが、問屋の手數料と白米店迄持込みの費用約四五錢お得意迄の運賃約三十錢を引くと正味四圓二十錢の利益、此外に空俵が二俵で十錢、糠が一石二斗で四十錢位などが利益の仲間入するが、之は電氣料と精米機の消損料と油代とトン／＼で一寸見れば世智辛い此世の中にはいゝ商賣の方である。

だが待てよ、商賣は兎角算盤通りには行かない、先づ米屋は大抵月末拂ひだ、そこで貸倒れも出来る、逃夜げに逢ふと云つた風に所謂蟲喰ひが出来る。此蟲喰ひが出来ないように立廻ることが白米屋の要訣で、之れさへなければそれこそ天下泰平である。と云つて現金ではお客がつかない、賣れなくては商賣にならないから、勢ひ月末勘定か何かで貸して了ふ、新しく開店した店など焦つてお得意を取らうとするから、餘計に貸倒れに逢着する、之はお客の方に罪がある、勘定をキチンと拂へば總體の米代も安くなる譯であるが、現在の状態はそうでない、換言すれば眞面目のお客は貸倒れの分迄も負擔して高く買つてるようなものである。大きく云へば正に物價高の一因だ……が兎も角も米屋の苦心は先づ此のお得意の選擇にある、然り而して初めて勘定合つて錢足る。



混合で儲ける

次に白米屋の苦心を要するのは仕入である、何の商賣でも仕入上手が成功の秘訣であるが、白米屋の如き賣値が大體定つてゐるものは殊に然りである。

正米値段は毎日市場から公表されて、掘り出し物といふ様なものは減多にない、そこで現金買が必要になつて来る、問屋の内にも懐中具合の悪いものがある、資本は相當擁してゐても、運送合同の結果引換證が嚴重になつた爲めに目の廻るほど金が急がしい、そこで現金を投げ出せばいくらか安いものが買へる、若後拂ひならば問屋の方では金利代りに高く賣る、現金なら普通より三十錢安く買へるものが、後金で成績が悪ければ二十錢高く買はせられる、現金と非現金とでは詰り五十錢の差が出来、一年中では容易ならぬ額にも上るのである、斯くて資本の充實を必要とするのであるが、餘り資本があり過ぎると失敗することがある、資本が有り餘つて現金で安いものを仕入れた迄はいゝが、金が忙がしくないので、ついウツカリして貸倒れの頻發を促すからである。

毎日夕刊に正米市場の値段が出て居て、何々米はいくら何々米はいくらとあるが、白米屋の手へ渡れば決して何々米など、銘柄別には賣らない、一等米二等米などで通つてゐる、一等米は何縣産米と何縣産米で、二等米は何々など、白米同業組合で規定してある。而してそれを嚴

守せしむべく検査員が巡つて検査することになつてゐるが、標準通りにはなかく混合されてゐない、白米屋で勝手に混合し勝手に等級をつける始末で、同じ一等米と稱しても茲が白米屋金儲けのからくりとなつて居る。故に甲の店と乙の店とは品質が違ふ、弊店の一等米は何圓何十錢で他店よりも何十錢安いなど、云つても品質が劣つて居れば何にもならないから、消費者は値段の一點ばかりで信用してはいけない、臺灣の蓬萊米など混合すれば安くつくが味が落ちるといふものである。

季節的に見れば夏場の米は比較的利益が薄い、夏季は避暑に旅行するとか、學生が暑中休暇で歸國するとか云つて、東京では人口が減つて了ふ上に、誰しも夏になると食欲が衰へ賣行が細る。それ丈けに米屋としては食味の良米を使はなくてはならないからである、夏分不味い米を賣るとアノ米屋の米は駄目だとなつてお得意を減らして了ふ、と云つた譯で夏は米屋さん儲からない。

白米商の手品

米は元來が一種類をそのまゝ使用するよりは、二種類乃至三四種類を適宜に配合した方が風味の良くなる性質を帯びてをる、例へば九州米とか地廻米などの硬質米のみを用ゐると、御飯が堅過ぎて味がなく、又東北や北國の軟質米ばかりでも軟か過ぎて甘くない



そこを適當に軟質米と硬質米とを混ぜ、其上更に味付米を加へれば、比較的上等の白米を得られるのである。その配合する處に白米屋の手の種があつて、表面は右に計算したやうに薄利に見えても内實は相當の儲けがある。それには中米五に上米二と下米の三を加へて、普通中米で通すとか或は混合率に加減を加へて上白米にしたり、その混合率次第でどんな手品でも出来る。

尤も外米や朝鮮米の裾物又は臺灣米などを混合すると風味を損するは勿論、腐敗も早く又白米として長持ちが出来ないから、二等白米以上にはそうしたものは混ぜないが、二等白米以下になれば必ず値安の殖民地米や外米が混入されてゐる。この外米や殖民地米などを混合させるのは必ずしも儲けを多くする爲めばかりではなく、六千七百軒の白米商が競争の中心とするものは上米でなく、中産階級以下に供給する下米であるので、勢ひ品質よりも安い米といふに重きを置かれる結果でもある、だから「俺は江戸子だ舶來の米なんか食へるか」とタンカを切つたところで、毎日知らない間に食はされてゐるのだから仕方がない。

本年に入つて京濱間へ入荷した朝鮮米は百萬袋を越え、深川市場だけでも七十萬袋を賣捌又臺灣米も二十萬袋位は消化されてゐるから、これだけは内地米と混ぜて食はされて了つたわ

けである、神田川市場は秋葉原驛を控へて取扱高の大部分は内地米であるが、深川市場は地理的關係から船積米を多く取扱、一日平均六七千俵の賣行中、半數以上は朝鮮米か臺灣米でこの數字から見ても如何に江戸子が舶來の米をたべてゐるかゞ知れる。

メートル法の注意

秋高く馬肥ゆれば人も肥え三杯の御飯は五杯に殖え、三等米が二等米で通用もするから、白米屋には秋が取入れ時でそこで馬力をかけて儲けるが、一方では相場の変動が多い時丈に苦心もなみ大抵でなく、甘く相場に乗れば待つてましたとばかりに賣値を引上げて稼ぐ。但反對に下落した場合は賣値を容易に引下げないのは、何うも蟲が好すぎる行方で改めて貰ひたい。

東京も市内と山の手では値段が違ふ、市内で三圓五十錢の白米なら、山の手では三圓六十錢も七十錢もする、等級や品質が個々別々であるから一寸判らないけれども、大體常に二十錢位の差はある。山の手は何故高いかと云ふと、市内よりも運賃が掛る、モウ一つ高い理田は、市内は現金拂や月二回拂などと云ふのも中にはあるが、山の手郊外は殆ど月末拂で白米屋としては金利を見なければならぬからである。であるから米は淺草や本所深川邊の現金場所の方がズツト安い。



メートル法が實施されてから、未だ間がないので一般家庭では一寸間誤つく。其間誤つく間際につけ込んでゴマ化さうとする奸商も時たま見受けるが、十五キロは量として約一斗六七合で十四キロは九升九合位になる。十五キロは先づ一斗程だからと舊習によつて一斗届けて下さいと注文すると、ヘイ／＼と十四キロで納める白米屋もある、十四キロと十五キロとでは時價にして二十三錢ばかり違ふ、そうとは知らず白米の單位は十五キロ即ち一斗餘と心得てる奥さんなどは之れは大いに安いと間違へるスキに、白米屋の外交が『弊店は勉強の親玉だ』と觸れ込んでお得意を取つて仕舞つたなぞと云ふ話もある。注文者としては注文する時は必ず十五キロとか三十キロとかで注文し、一斗とか二斗とか云はぬようにしなくてはいいけない。

東京と神奈川縣境の六郷川一つ越した向ふの神奈川では十四キロが單位で、こちらの東京は十五キロが單位で、川の兩側は十四キロと十五キロの混戦である、所が附近はお百姓やら漁師が多くメートルが呑み込めない家庭が多いから、一斗の註文を發する向が多い、そこで一キロの喰ひ違ひが出来て東京側白米商の旗色が悪く、同業者が、神奈川縣も十五キロ制にするように折衝して呉れなど組合へ陳情に及んだこともあると云ふ。

組合と組合の制裁

商人ある所、組合あり、市内十五區隣接五郡の小賣業者六千八百四

十四人一團となつて東京白米商同業組合を作つて居る。組合の事業は同業者の信用を高むべく白米の検査を行ふことである。市内各區には三名宛、郡部には三名乃至五名の検査員が居り、白米屋を途に擁して不意打ちに量や質の途上検査を行ふ。不正を發見すると組合へ報告する。組合では一應戒告を加へる、戒告を加へられること三度に及ぶと黒表へ乗せ、府の検度課へ申告して注意を促して貰ふ、それでもまだ改悛の狀なく依然不正品を賣り歩く圖太いのに対しては五圓以上五百圓以下の過怠金を申つける。申渡された過怠金を納めなければ強制執行をして競賣に附すと迄徹底して居る。

検査員は各區で推薦した嚴格な人物で徽章をつけて検査員たることを明かにしてある。昨年四月一日から本年一月末日迄の間に戒告を受けた件數は一千七百十件に達したと云ふから御法度破りもなかなか多い、ドンナ廉で戒告を受けたかと云ふに容量を表記しないものが最も多數である、十五キロの袋ならば結へた處へ十五キロと明示し、尙販賣責任者の住所姓名乃至屋號を記載した札を付けて置かなくてはならない、さもなければ袋へそれ等の事項を明記して置かなくてはならないのであるが之を怠る。次にあるのは量を誤魔化す不届者である、十五キロの註文があつても十四キロ何がしゝかない様なのでタチのよくないのである。お客さんは以上の



點に篤と注意が肝腎で何なら組合へソツと知らせること。

品質については一年に二回づゝ検査を行つて發表する、全部の小賣店から買集めて吟味するのであるが、検査米と知れない様に買集めるのであるから、蒐集に骨が折れる、婆さんや子供を使つて小賣店へ氣づかれないように買はせる、そして領收證を取つて置いて後日の證據にする、三升下さいと云つてオーライとばかり三升賣る店はメートル法を勵行してゐないといふので成績が悪い、一升下さいと來たら『今はメートル法に變つてゐます、一升は何キロ位に當りますから何キロ差し上げましょう』と答へなくてはいけない。買集めた米にはそれ〴〵何處の何店の米と記して置いて、検査員や役員がよつてたかつて嚴密な検査を行ふ、之には格別制裁を置かないのはチト不徹底であろう。標準米は年に一度づゝ總會の席上で評議決定するのである（同業組合事務所は深川區佐賀町二丁目）

米の話

胃袋の偉大さ

先づ順序として米穀需給關係の概略から申せば、我國の稻作耕地面積は耕地整理や開墾に依つて年々いくらづゝ増加して昭和二年度は水陸稻合計三百七十七萬三千四百五十七町三段歩であつた收穫はその年の氣候の加減や病虫害發生の有無、又肥料の高い安いも影響して頗る區々ではあるが、産米改良の進歩發達に伴つて收穫率は大體増加してゐる。殊に昭和二年は天候も順調であつたので六千二百十萬七千七百石といふ未曾有の大増收となつた、夫れに自然と流れ込んで來る朝鮮臺灣からの移入米もあつて供給過剩となり政府懸命の調節策も効なく米價は大正十二年一月以來の最安値を現はしたのである。

さて内地一年間に於ける需給關係は何うかと云ふと、昭和二年度（昭和元年十一月より二年十月末まで）の數字によつて見れば、元年度の内地實收高五千五百五十九萬一千三百三十三石、此の外移入が朝鮮米五百九十萬九千七百三十六石、臺灣米二百六十三萬七千八百九十九石、加州、ラングン、サイゴンその他外米の輸入四百二十二萬九千四十一石、それに大正十四年よりの持越米か五百九十六萬七千七百七十一石、此の合計即ち七千四百二十三萬五千七百八十石が總供給量である。

小賣店

そのうちから海外への輸出三萬五千三百三十八石、朝鮮への移出七十四萬五千七百七十六石、同じく臺灣へ一萬七千六百五十石、又樺太へ三十三萬八千九百九十四石、及び再輸出高十三



萬一千二百四石、この合計百二十三萬三千六百二十四石と昭和三年度へ繰越した五百七十六萬五千五百四十一石を差引いた六千七百二十三萬六千六百十五石が即ち昭和二年度内に於て消費された總量となるのである。

これを依にする、一億六千七百九萬一千五百七十七俵で縦に並べると三萬二千何百りになり、それが全部皆さんの胃袋で消化されるので、胃袋の消化力も實に偉大なものと云つてよい。此の總消費量の内酒造米が四百萬石以上と餅、味噌、醬油、菓子用が四五百萬石も含まれてゐる。

軟質米と硬質米

米の種類は大別して糯米と粳米であるが、それが早生、中生、晩生と別れ更に大中小粒に別れ、その名稱に至つては各地方に於て異種同名のものもあり、同種異名のものもあつて全國では二千四百餘種に及ぶと云はれてゐる。然しこれを土地的に見て性質上から硬質米及び軟質米の二種に大別する、硬質米とは字の如く好く乾燥された組織の密な米で軟質米とは組織の粗い乾燥不十分なものをして指して云ふ。従つて硬質米は量に比較して重く軟質米は軽い性質を帯びてゐる。

これらは多少栽培方法にもよるが、大體氣候、風土、地味によつて土地的に區別されるもの

で低温乃至夏季の短い所は軟質米となり、高温にして植付けから刈り入れまでの時日の長いものほど硬質米となるのであるから、北海道は發育から登熟期間が短いので外皮の厚い割合に組織の粗い搗減りの最も多い米を産出し、又内地にしても三陸兩羽の東北地方や越中越後から山陰道方面はこれも風土の關係上日照時日が短く、植付けから刈入れまでの時期は九州に比して一ヶ月半も早いので、どうしても乾燥が十分にいかない、然し同じ東北でも太平洋方面は暖流の關係から比較的硬質性のものを産出し、殊に山形縣下の庄内地方は特殊な風土に恵まれてゐると全國に冠たる倉庫の完備から四季を通じて歡迎される、日本一の良米を産出してゐる。

これに反して關東から中國四國地方は十月になつて開花しても、十分實を結び得るほどの氣候であるので、發育と登熟期間が頗る長く従てキメの細い乾燥の十分な硬質米を産し、更に九州に至つては三毛作（一年に三回作ること）の可能の田さへある位だから日照の時間が最も長く自然重量の重い組織の密な最硬質米を産する、朝鮮米は北部と南部に區別され南部地方では九州米と同性質のものを産し、北部は大體東北米に似てゐる。

又臺灣米は在來種と蓬萊種（日本種）に別れ在來種の移入は稀で、主として臺灣米と云へば蓬萊種だが、全部二期作で極めて促成栽培であるから最も軟質米で、一年間の保存力もないほ



どである、外米は支那ラングン、サイゴン等が主なるもので全部硬質米、加州米はどちらかと云へば軟質性を加味してをるのである。

**味付米、厄介米** さて季節的に見た米の味は大體から云へば硬質米は保存に堪え得るが、軟質米は夏期になつて濕氣や高温に遇ふとどうしても變質し自然風味を損じ易い。尤も軟質米でも全部が全部必ず變質するとは限つてゐない、保存方法の完全不完全が最も大なる關係を有し、又軟質の程度にもよるが概して下等米ほど保存力に乏しいことは云ふまでもない。

そこで北海道米は秋から二月頃までが好い所で、三陸米はそれより一ヶ月位延長されて四月末頃まで風味を保つてゐる、又庄内米を除く兩羽米は先づ六月までが關の山で、それ以後は保存の悪いものや下米なぞそろ／＼變質する、庄内米は前にも一寸云つた通り、軟質米地方でありながら庄内平野が全くの盆地で、四方は山に圍まれ真中を最上川が貫流して、排水灌漑の便が兼備し、地形的に恵まれてゐる上に酒田の城主酒井氏は傳統的の藩是として、産米改良には異常の努力を拂つた。その結果が今日の倉庫完備と俟つて、四季に適する日本一の良米となつて現はれたのである。それから地廻り米と稱する關東米は、味としては晩春の候までであるけれど、硬質米特殊の性能を備へてをるので、夏期の御飯の腐敗を防ぐ爲めに混合用としてそ

の後も相當需要される、東海道から東山道、近畿地方は關東米と大同小異で、四國九州の最硬質米は風味としてはこれも春が限度であるが、益増えすること搗減りの少いこと、腐敗を防ぐことなどから夏米として歓迎されてゐる。

朝鮮米は五六月が頂上でそれ以後は餘程良質のものでないと不味くなる、臺灣米は第一期の收穫が六月であるから八九月迄が限度であり、外米は白米としてさへ一三年間も保存出来るのであるから先づ時期はない、又米の性能から見ると玄人間では味付米、一人歩き米、厄介米などいふのがある。味付米は目下庄内米の獨占で鯉節か味の素の役目を勤むるもの、一人歩き米とはそれ自體のみでも使用され得るもので、各地の二三等米か九州米の全部で、厄介米に至つては味付米の厄介にならねば頂けないもので、下等軟質米が夏期に入るとそうしたものになる。

**台所へ届く迄** さてこうした種々雑多な米が農家の手から皆さんのお臺所へ届くまでには驚くべき手数を要するのである。

先づ地方の商人が農家から買入れ、それを消費地の正米問屋に委託するか、或は問屋からの買付けを待つか、又はプロカーの手を経るか、その何れかによつて運送屋の手でいよ／＼積



出さる、それが例へば東京の秋葉原驛なり汐留驛なりへ着くと特殊賣買といつて、そのまゝ白米商の手に賣渡されるものもあるが、大抵は一先づ特約のある倉庫へ收容して後、始めて正米市場で賣捌かれ、白米商は更に自宅へ運んで精白した上、皆さんのお臺所へ届けるが順序である然し中にはこれ以上仲次から問屋へ、問屋から更に仲次へなど幾重にも手数を要するものもあるので自然、田舎での相場とお臺所の白米値とは著しい相違を來すのである。  
元來正米問屋なるものは、生産者と消費者との中間にあつて絶対的必要の配給機關であつたのだが、現在では次第に其必要を認められなくなると同時に衰微の徴が著しくなつて來た、その主なる原因として數へらるゝものは

一、世の中の變遷に連れて「生産者から直接消費者へ」主義(?)の流行するやうになつてからは地方に農業倉庫やその他低資融通の途が講ぜられ、又消費地には縣の直接出張販賣所などが續々設けられ、更に一方では白米商が聯合して産地を買付けるやうになつて、勢ひ從來の中間配給機關の必要が薄くなつて來た折柄、大震災で一段とその傾向を助長した。  
二、更に正米問屋業にとつて最も苦痛なのは、政府の米價調節である、米穀法の公布以前即ち大正十一年までは一年間の米價の動きは最大二十七圓、最少十一圓であつたのが、十一年に

米穀法布かれて、量の調節から更に十三年價格の調節まで加へらるゝやうになつて以來、次第に値動きが少くなり、現在では七圓幅を普通とされてゐる。米一石、一年間思惑すると金利倉敷や升減りを見て大略五圓を要するのに、一年間の動き七圓では甘い汁の吸へないのも當然である。

三、又昔は地方の人達が消費地の事情に暗かつたので、無暗に踏倒して買付けたものだが、現在のやうに交通機關や通信機關が發達して、ラデオで毎日の出來値を放送されるやうになつてはつけ込む隙もなく、自然ボロイ儲けはなくなる。

かうした事情が重なつて正米業者も昔日の面影がなくなつたのである。

市場の亂立

東京で正米業者の集つて居るのは深川、神田川兩市場の外、震災後深川、神田川の外に東京郊外の品川、大崎、惠比壽、新宿、目白、池袋、板橋、王子、などにも正米市場の形式を備へたものが續々出來、深川、神田川が帝都に於ける米供給機關の獨占の夢は破られて仕舞つた、之等は震災前にも多少形はあつたのだが、震災に依つて深川が大打撃を受けその虚に乗じて神田川が擡頭したと同様、交通機關の發達や震災後急激に發展した近郊の需要に應ずる爲め自然的に勃興したものである。



震災前には深川市場の賣行高一日平均二萬俵内外に及んでゐたのが、近頃では漸く五六千俵に激減したのも之等市場の發展に基くものであるが、然し之等は單に問屋の集團といふに止まり何等の統制もなく勿論正式の正米市場ではない、この八ヶ所の小市場も大體神田川と同じく取扱ふ米は東北か地廻りか乃至北國米などと一方に偏してをる上に數量も少い。

さて次は同じ配給機關の一つである白米の小賣商に移るが、最近の調査に依ると東京市内外に於ける白米小賣商は總數六千七百軒に達すと云はれて居る、翻つて東京市及び近接郡部の一年間に於ける米の消費量を見ると、先づ各驛廻着數が八百四五十萬俵と船積みの二百萬俵内外、この合計二千四五萬俵のうち少くも一千萬俵即ち四百萬石は消費されてゐる。

この四百萬石を六千七百軒の白米小賣業者が取扱ふのであるから、一軒一年の扱米は五百九十五石一ヶ月四十九石七斗、一日一石六斗六升である、(白米店の話は別項参照)

**大黒屋の飯** 米の風味は前にも申した通り、氣候と地味とに依つて各特殊の性能を備へてをるから、硬質米と軟質米とで良否を區別することは出来ない、が早生稻は中生稻、晚生稻に比して甘く、大體過熟したものよりも早刈が良好である、然し獨り米のみに限つたことでないが、殊に米は保存と精白方法及び焚き方の良否が非常に深い關係を持つてゐる、保存方法が不

完全であれば氣候の變化に伴つて虫害と變質とを來し上米も下米となり甚だしいのは食用に堪へなくさへなる。

米倉庫の最も完備してゐるのは、山形縣酒田の山居倉庫で、それは地上よりの濕氣を防ぐ爲めには床下に暗渠を設け床上には一尺以上も籾殻を布き、それに直徑一尺位の蘆の束を布き連らね、更に丸太を置いてその上に一定の高さに米を積み上げる、そして換氣方法も申分なき設備を施して季節に應じて濕濕の調節を計り、又倉庫の周圍には日光の直射を防ぐ樹木を植るなど實に至れり盡せりの取扱方をしてゐる、従つて大抵の米は夏期には多少變質するものだが、山居倉庫米に限つて却て夏期に風味を増すと云はれ、夏の東京には味付米として無くてならぬ米になつてゐる。それから精白方法だが、現在のやうに無暗と砂を混ぜて短時間内にガラ

搗き上げたものではどうしても風味を損じ易い。

以前靈岸島に大黒屋といふ鰻屋があつて、その御飯は江戸一と云はれたものだが、その米は武州の白芽とか老咲とか、或は伊勢の關取などといふ最優秀のものを木の立白で二人が足拍子を取りながら一定の力を一定の速度で無砂搗きにしたものださうである、現在そんな悠暢なことはしてをられないが、同じ精米機でもなるべく砂を少くして(全然入れなければ尙更結構)



徐々に搗き上げたに越したことはないな。

味は炊き方次第

岩戸神樂の昔から烏の鳴かぬ日はあつても、日本に一日として御飯を炊かない家はなく、それが皆主婦方の毎日の仕事でありながら、この位又難かしいものはない、「御飯を満足に炊ければ女一人前だ」とは昔からの云ひ傳へで「三度炊く御飯も硬し軟かし」位はまだ好いとして往々半煮えや黒焦げも出来勝ちである、然しこゝでその炊き方を一々申上げることは困難で、要するにその人の氣轉にあるが参考までに二三の點を申し述べることにする。

先づ第一はその米が硬質であるか軟質であるかを聞いて、硬質であつたら軟質よりも二割位は水を餘分に入れねばならない、それからよく前の晩に米を洗つて置くが、あれは冬なら兎も角春から夏などは味も損すれば早く腐敗もし易い、又夏はお櫃にスタレをかけるが、あれも却て腐敗を早めるもので、寧ろ乾いた布をかけて密閉し外氣に當らしめない方が好い。

その他味に關係あるは水である、それは獨り米のみでなく、例へば上總の青柳大豆とか神奈川の榛野大豆などは、大豆としての品質は申分なく、産地で製造すれば立派な豆腐が出来るけれど、東京でも食用には結構だが、どうしても豆腐には纏らないそりで、つまりその豆は東京

の水に合はないといふわけである、だから米もこの水には何縣の米が合ふとか合はないとか確然とした區別はないまでも多少はそうした傾向があるらしい。

次に白米の見方であるが、由來物の良否を表面から見分けるには形か光澤か輕重などによるもので、比較的加工しない物、即ち原形のものが見分け易く、加工の手の入りくんだものほど困難になり、また米は單に精白すると混ぜるだけであるが、生活必需品中この位難しいものは少い、玄米のうちなら兎も角も一旦白米となつた以上、朝鮮米だらうが臺灣米だらうが玄人でさへ見分は至難と云はれてゐる。

白米の選び方

人命に一番大切な營養分はビタミンと蛋白質である。白鼠ですらもビタミンが缺乏すれば、衰弱して山あらしの様な形になり、可惜青春？を敢へなく往生する。ビタミンの補給充分な鼠は生き／＼として天井をかけすり廻る。人間にしても、ビタミンが缺乏すれば脚氣その他の病にかゝり衰弱する、小兒の原因不明の病氣は多くビタミンの缺乏に存すると、理化學研究所や營養學者が證明して居る。

そのビタミンは其他の何ものよりも最も多く、米の「芽」即ち胚芽の内に含んで居ることが最近確實にされた。所が搗粉を入れて搗いた、混砂精白米は殆ど悉く此のビタミン分が落ち



て仕舞ふ、無砂白米であると白米の中七割位が此の芽が取れずにある。更に無砂七分搗はそれ以上に胚芽が残り三分搗は七分搗の約二倍、玄米となると七分搗の三倍のビタミンBを含んで居る。即ちビタミンB本位に見れば玄米が最も良い譯である。然し米の消化度即ちこなれ具合に至ると之れとは逆で玄米は最も不消化であり、精白米が最も消化がよいことになつて居る、味も亦同様である。

茲に於てか胚芽を相當に保ち、而して吸收度の比較的高く、味も悪くない米が人間の營養上最も理想的である譯で、玄米でも難があり精白米でも不足があると云ふ結果になる。某博士は白米を炊く際に胚芽を袋に入れたものを入れて炊き、ビタミンB分を白米に補ふ所謂めんざい袋の方法を一月二十六日にラデオで放送したことがある。又營養研究所では「ビタミン分を比較的多く含み、且吸收度のよい七分搗」を推奨して居る。

兎も角機械精白法の壓倒的普及及混砂搗の旺盛に連れて、大切な營養分が白米から大いに失はれて居ることは事實であつて、此の點は日本人の營養上大いに考ふべき重要な問題である。夫れは儲置き、今云つた玄米或は白米にしても、新米と古米ではビタミンB含有量に多大の相異があり新米は含有量最も多く、古米となると大いに減じ、古々米になると更に少い。此のビ

タミンB含有量の検査法は

試験薬

- 一、パラフェンニシヂアミン 一%液 五 坵
- 二、グアヤコール 一〇液 一〇 坵
- 三、過酸化水素 一%液 數 滴

を用意し、米數百粒を器に入れ右試験薬を順次に加へ三分間作用せしむれば、ビタミンB含有量に連れ紫色を呈す、最も色彩の濃いものが含有量も多いのである。

最後に一言付け加へて云へば「米は白きを以て尊しとせず、一に其の含有する營養度と吸收率にある」

蠶穀町の米相場

一口に清算相場といへば投機の代名詞のやうに聞こへるが、その高低が實際市價に影響するところは決して尠くない、例へば何かの動機で清算米相場が一圓高となれば正米もそれに應じて上り、連れて白米の高くなるのは當然の順序である。

たゞ清算相場は當限がその月末、中限が來月末、先限は三ヶ月先の受渡しで而も投機の本質として時日の長いものに人氣が集中する結果、正米と異つてその日々の事情に依るよりは寧



る遠い將來のことを材料とされる。例へば苗代の發育が好いといつては賣られ、又植付け後の経過が悪いと云つては買はれるのである。尤も清算がいつも先に動いて後に正米が動くとは限つてゐない、時には正米が動揺して清算が之に追隨することも住々あるが、大抵の場合には上げるも下げるも清算が道案内をすることになる。

それで東京清算相場の三十圓とか三十一圓とか云ふのは、埼玉縣の中等米一石が標準となつてゐるが、それには代用受渡と云つて他縣の米を以て受渡しに代用することを許されてゐる、代用受渡しとは栃木縣五等米は標準米より二圓十錢下げとか、庄内三等は三十錢上げとか或は朝鮮米は四圓下げとか別に格付けが定つてゐて、それで決済をつけるのである、この際にもグレンシャム(?)の法則が行はれて、賣方即ち渡方は代用米中最も格付けの有利な悪質米を提供するので、どうしても清算相場は埼玉中米が標準でありながら、いつも下米相場となつて現はれる。従つて埼玉中米の實際市價と清算値とは二圓も三圓も開きがあるのは止むを得ない代用制の缺陷である。

だから清算相場が三十圓なら、白米はいくらになると云はれた處で、それを割り出すことは

一寸困難である。

もち米と餅の話

今でも東京の盛り場には其俵が残つて居るか知れぬ、子供の時の記憶に引づり餅と云ふのがあつた。巨大なかまどから蒸籠臼杵一切合切の餅搗道具を引づつて得意先を練り廻り、數名の壯漢が掛聲勇敢に餅を搗いて搗賃をかせぐ。私の所は今年五俵だ、イヤ十俵だと多いのを一つの見得にして、そこ此處の本店では當日一日の本業をサボリ一家擧つて餅搗デーを楽しんだ。

何キログラムの糯米を秤衡器で計りスチームで蒸し、電動力を驅つて、山の如き賃餅をベタくと忽ち搗き上げ、厭延ローラーに掛けて平たくしたのが、昭和聖代に於ける最も進歩した餅である。東京もお江戸の中心日本橋、京橋邊の最も嗜好みの家庭が此の機械製モダン餅で今も昔も變らぬ雑煮を祝ふものが少くないが、餅に就て變らぬものは「賃餅仕り候」の貼紙と糯米そのもの位であらう。

歳晚の金融に尻餅をつきそうな時に「賃餅仕り候」の貼紙はいとど暮らしさを促す。東京で最も歓迎され、往々にして老人の入れ歯を抜きかねないほど腰のある糯米は關東産のものである。



中でも本場物と云はれるのが、埼玉の越ヶ谷を筆頭に茨城の谷原である。それに次ぐのが千葉栃木などの脇場物と稱するもので、これらは全國中で中以上に位するものである。その他は年によつて品質にも高下があると同時に需要關係にも變化を來すが。秋田、加賀、越後、越中などや九州方面では薩摩、肥前、肥後などが主なるものである、又最も品質は不良であるが品の豊富な値の安いものに臺灣産の丸糯と稱するものもある。

**糯米の良し悪し** 米は獨り糯米に限らず、上物と下物では其値に大差がある。例へば同じ内地米でも山居米と越後の沼垂邊のものとは一石で六七圓も違ふ。糯も矢張り最上等の越ヶ谷は三等玄米が四十三圓見當の高値を唱へてゐるのに、臺灣丸糯は百斤十一圓二十錢即ち一石二十八圓位で、その間十五圓の開きがあり、内地の越中、加賀邊のものでも玄米が平均卅四五圓であるから、越ヶ谷糯に比すると十圓近くの開きがある。

何故同じ糯米であり乍ら、そんなに値の高下があるか？ といふに越ヶ谷とか谷原とかの最上等品になると餅にして腰が強く、又色も白の上に何度でも搗き近しが利く。この搗返しの利くのが糯米の有力な値打ちである。有名な菓子屋で清壽軒といふのがあるが、その最上等の餅菓子は少くも一週間位は搗いた當時のまゝで變らない。これは三四回も搗き返しをするから

である。つまり一度餅に仕上げたものを更に蒸返して搗き、それを何度も繰返してから菓子皮にする。

こうするには是が非でも最上等の糯米でなくては駄目である。越後の山崎糯、秋田の島糯及び金浦糯、野州の石神糯なども普通品として上物であるが、こうした風に搗き返しが利かない。従つて上菓子向きには値段の如何に拘らず上糯を使用する。然るにこの上糯なるものが頗る數量の少い關係上、例年定つて馬鹿高の相場を保つてゐる。

普通の糯としては所謂「腰の強い」のがいとされてゐる、腰の弱いのはお供にしても形が變つたり、又お雑煮にしても嫌に延びて汗が汚らしく濁る、尤も餅は御飯と違つて味の好い悪いは餘り云はず形や肌觸りをやかましく云ふ。殊にお供は尙ほ更である。今市中で普通に消費されてゐる糯米は餘り上物ではない、元來糯米は粳米に比して搗き減が多いので、假に一石四十三圓の越ヶ谷糯を精白すると、少くも一割の搗き減があるから、それだけでも既に四十七圓三十錢となり、その上諸掛りから利益を加へるとどうしても五十圓以上になる。

**その見分け方** 如何に最上等の糯米にしても此の時節柄一石五十圓では賣憎い、そこで米屋は多くは適宜に配合して安く賣る。さうした譯で市中の所謂上糯と云つても千葉、栃木邊の



ものを元にして夫れに「伸び」を付ける爲めに越後、越中邊のものを混ぜる、又中糶となると兩羽、北陸邊のものに味付けとして地廻りの糯米を少し混ぜ、夫れへ安もの、臺灣丸糶を入れる。更に下糶となると大部分は臺灣の丸糶でホンのおまじない同様の程度で内地糶を混ぜる。それでは糯米の良否の見分け方は何うする？ 玄米の時なら俗にハせてゐると稱して粳米と異つた白さと艶のあるのが上等なので、寧ろ粳米より見分けは簡單であるが、精白すると粳米以上に識別が困難となつて仕舞ふ。粒形の點でも臺灣糶は關東の上糶に似てゐるし、その上良くハせてゐるから素人目には一寸上糶のように見える。大體關東とか九州とか或は臺灣など氣温が高くて硬質米を産出する地方（臺灣の粳米は促成栽培の結果硬質米とは云ひ難いが）のもののは概してハせて白色を呈してゐるが、越中、加賀から兩羽地方のものは色澤の點は餘り良くない。然し色澤が必ずしも質と一致するとは限つて居ないから、先づ「粳米の混じつてゐない艶の好いもの」位の程度にしか素人には判り兼ねる。

それから餅となつては單に肌觸りのいゝしわの寄つてゐない白のが上等で、下等餅ほど白さがハツキリしなくなる。尙市中でのし餅一升と稱するのは、白米を二三日水に漬けて置いて後蒸すのであるが、水に漬けるとどうしても二割以上は増える、その増えたのを計つて一升と

云ふのであるから、一升餅は其實白米とすれば精々八合位より少ない譯である。

以上の糯米は田糶と云つて田に出来たものに就てゝあるが、此の外畑で作つた畑糶と云ふのがある。これは値段から云へば内地の中等糶と臺灣丸糶の中間位のもので、混合用として歡迎されてゐる、主として關東方面から産出されてゐる。但臺灣糶同様腰も弱く味も悪い。

**不景氣だと餅が減る** 此の糯米は内地全體で昨年度が四百八十萬三千石で粳米の約八分近くの産額があつた。面白い事は年の豊凶に拘らず糯米收穫高の割合が殆ど變らず、いつも粳米の八分前後となつて居ることである。

此の内東京市内だけで何の位の糯米を需要するかと云ふと、それは普通の米でさへ財界の好況と不況とで消費高に大變な増減がある。殊に餅となると世の中の景氣不景氣例へば商工業者の利益や勤め人労働者の賞與の多寡などに連れて需要に非常な差がある。従つて精確なことは判らない。

然し不景氣な年でもザツト一年十五萬石、好況な年で一年約三十萬石位だそうで、今年などは不景氣であるから需要は少いだらう。勿論此の需要は獨り家用の餅計りでなく、菓子とかお汁粉とか其他の加工品用の分をも込めての話であるが、之れ等の菓子類お汁粉の賣れ具合



も景氣と不景氣とで著しい相違のあるもので、従つて一旦不景氣となると市内の糯米需要は激減して仕舞ふ。

東京で一番潰される糯米は臺灣糯である、京濱間に一年間移入さるゝ數量は多くて十二萬袋（一袋は六斗即ち總計七萬二千石）少くて八萬袋（四萬八千石）で此の大部分が汗粉餅や中以下の餅菓子となる。東京では餅菓子が一つの自慢なのであるが、實は其の大部分が此の通り臺灣産の糯米であることを記憶されたい。然し此の臺灣糯も同様景氣次第で消費に増減がある、只何分にも此の臺灣糯は値が安いので次第に其需要が増加してゆく。

東京大阪の如く景氣に敏感な土地は別とし、其他の地方殊に農村に於ける糯米の需要は景氣不景氣に依つて左したる變化はない。

此の糯米の相場は最近三四年を平均して、常に普通米に比して三四圓方高値を保つて居る、要するに糯米は硬米に比較して收穫率が少い上に、精製に頗る手数を要すると云つた關係に基くものである。

米ぬか

震災當時の玄米めしは東京市民には忘れ難い思ひ出であるが、一體米はあまり精白しない方が營養價值が多い、半搗米や七分搗の方が上精米よりは身體によい……とはよく

營養學者の唱へる所であるが、儲何うも味が落ちる、従つて此の食用は永續性がしない、夫れには二日置き位に炊いたら永續性がすると思ふ。

最近米國農務省の家計局が「糠には立派な營養價值があるから種種な方法で、吾々の食用に供し得る」と其研究を發表したが夫れによると

糠は通常は蛋白質、脂肪、礦物質、特に鐵分を主成分とする。且つ同時にビタミンBの素でもある。さればこそ糠を食ふことは之等貴重な滋養物を攝取する上に於て安價と美味とを兼ね具えた方法である。又糠がビタミンB中神經炎に特效ある成分を多量に含有して居る。近時蜀黍疹 (Pellagra) なる病氣に關する研究が進んだ結果、この病氣の原因はビタミンBに附隨する或る種ビタミンの攝取が不足する事にあるのが明らかになつた。米が特にこの病氣を豫防する種類のビタミンの素である事は今迄の研究では確定して居ないが、然し凡ゆる點から見てその事は事實らしく思はれる。これ即ち蜀黍疹に罹る虞れある地方で糠を食卓に上せて慈惠する今一つの理由なのである。

糠を麥粉に加へてパンを製造する事が出来る。その場合糠は麥粉の二五乃至三三パーセントの割合を以てする。斯くして出來たパンは普通の小麥粉より作つたものに比すると色も少々黒



すんで居り、又目方も小麦粉だけで作ったもの程軽い程が、然し細かに碎け易く、且つ柔かである。鶏卵を多く用ひる菓子パンには更に澤山の糖を用ひる事も出来る。又肉汁やソースやブツディングに混じて濃くしても悪くない。

糖は味が悪くなり易いものであるから、それを食用に供するにも一定の期間に限る。然しこの味の悪くなるのを防ぐ方法も臆て発見されるであらうが、兎に角米が精白されつゝある間は新鮮な糖を用ひ得る譯である。アメリカでは十月から翌年五月上旬にかけて精米が行はれるが、その期間は丁度食事が糖の含有する物質を攝る事を必要とする時節なのである。日本の稻垣博士も『糖を食べる』味噌汁に入れるのが一番いと奨励されてるが、こうして食用にするには無砂糖でなければいけない。

書籍店の巻

雑誌數五百九十四 吾が出版史上に劃期的の記録を残したものは昭和初頭に於ける圓本戦であつた。血みどろの商團の内に乙倒れ丙敗れ、千軍萬馬を駈散らして今日めでたく凱歌を擧げ得たもの何人ある、失業救済と紙價維持に經濟的貢獻を捧げ得たと云へば云はれる、……

が出版界そのものには何れ程の蓄積を残したらうか？ 素人眼に見れば古著作の藏拂ひ大掃除に外ならなかつた。

舊殻を安く脱ぎすてた出版界は正に之から新装の時代であらう。定價一圓也の出版がワザワザ避けられて來たのなぞ正に反動の兆とも見得られよう、内容に於て圓本集から超脱して新構想、新文章、新研究の雄偉を誇る時代は何時？

偕新陳代謝多忙な出版界の前線にあつて、出版界景氣の秘鍵を握るものは書籍類小賣店である、概計五百九十四種也の各種雑誌の喜憂の鍵を握るのも亦小賣店である。統計に據れば最近に於ける東京市内の文房具及書籍雑誌店數合計二千七十三軒、其前年度に比しての増加百八十九軒漸次に其數を増しつゝあるのも此の書籍雑誌の小賣業が比較的簡易で、且營業の安全率が高い爲めであるらしい。

以下書籍小賣店の巻を書く。

新規開業の手引 赤や青や黄のいらくした色彩が視神經を尖らす、何々文學全集やら何やら圓本の本店飾りの内、飛躍活躍、飛ぶが如く、日本一大雑誌、爲めになつて安い、等々の繪ビラ布ポスターが街頭の砂風に翩翩たる下には大供小供、プロ、學生、モガ、モボ。一心不



亂に雑誌を繰り新刊書を繰る中には毎日何時間か店頭で拾ひ読みして、一週間の中に二三冊の雑誌を読み上げて仕舞ふ要領のいゝのもある。兎角書籍店雑誌店は店頭で青年のいきれがする位でなければ本物でない。

神田、本郷、銀座、四谷、三田の大通りや神樂坂邊は本屋としては正に一等地である。雨の日、風の日拾ひ読み連の居ぬことはないが之れ等の場所は既に早くも新規開業の餘地がない。と云ふのは書籍だけなら兎も角も雑誌の販賣は三丁以内に同業がある時は組合に加入を許されないからである。然し権利を買つて開業すればそれは別物であるが、こう云ふ目抜き場所は権利だけでも三千圓の五千圓のと云ふ大した評價が付けられて居る。

先づ本屋は各地に書籍雑誌業組合なるものがあつて、新規開業には是非とも此の組合に加入することになつて居る。夫れでないと同業の規約で問屋から書籍雑誌を送らない。その組合へ加入の手續きや規約は各地それ／＼の組合事務所問合することであるが、東京では雑誌取扱は二百圓、書籍は三十圓、双方兼ねれば二百三十圓、各地は夫々異なるが平均百圓也位の加入金を取ることになつて居る。

組合加入の手續きが済めば、いよいよ問屋との取引開始となるのであるが之れには

- 一、組合加入の年月日、店舗所在地、商號、店主の姓名
  - 一、着驛、中繼驛名、並に汽船便の有無、荷上げ場
  - 一、一ヶ月間仕入豫想金額、取引方法
  - 一、店構へ、及附近の學校官衙その他將來顧客とすべき目標
  - 一、現在の營業品、取引銀行
  - 一、既に書店經營の向きは從來の取引先
- 等を問屋に通知して取引開始を申込む。

問屋との取引契約

東京の問屋としては、北隆館(京橋元數寄屋町三の七) 東京堂(神

田區表神保町三) 東海堂(京橋區銀座三の一) 大東館(日本橋區新右衛門町一〇) を四大問屋

と云ふが、之れ等問屋の扱方は大概同じで先づ取引開始の申込み書に據つて、一應新規店の状況を調査し、信認金(保證金)の金額(最低二百圓以上)を査定して通知する。此の信認金は勿論預つて置くので後で返すものであるが、書籍雑誌類はこの信認金の範囲内で送る。

尤も信認金を預すとも前金取引なら喜んで之れに應ずる。即ち一ヶ月とか二ヶ月とかの仕入豫想金額を豫め送金して送本を受け、前金切れとならぬ内に次々に入金すると云ふ方法で開



業早々の間は寧ろ此の前金取引の方が便利である。借問屋との契約が出来れば雑誌書籍類を見計つて注文するか、又は問屋に任せ賣れそうなるものを然るべく送つて貰ふ。ポスターや宣傳用品などは發行所から送つて呉れるように問屋が計らつて呉れる。

借てこうして店の方は書棚などの造作を拵へれば、其日から開業が出来るが、元々書籍や雑誌は定價を以て販賣するもので、普通商品の如く價格の變動がないのであるから、夫れに又現金商賣であるから、夫れは所謂一攫萬金を夢みすることは出来ないが、堅實な安全な營業と云つてよからう。そして女房の留守番仕事や隠居仕事にしても小綺麗で面倒がなく、品がよい仕事と云へる。

所で雑誌や書籍は多くは委託販賣であるから、賣れたゞけ代金を問屋に拂ひ賣れ残りは問屋で定めてある返品期間内に問屋の方へ返品すればよい。尤も雑誌の中返品の利かないものもある、こう云ふ雑誌は豫め月極め讀者を得て置いてから、問屋に定期部數を定めて注文すればよい。新刊書籍は前に云つた普通取引契約の外二百圓以上の信認金又は前金を預けて置けば、問屋からは見計らひの下に送つて来るから、書棚は何時も新陳代謝して新本が景氣よく並んで居ようと云ふもの。之れ等書籍の賣残り品返品期限は四ヶ月例へば五月に送付を受けたものは

八月中に返送する。

此の書籍の中で法律書、醫學書、教科書、辭典と云つたような専門的なものは現金で仕入れなければならぬことになつて居る。

カツパライ御用心！ 賣れる賣れないは場所次第、勿論すべての店賣がその通りである

が殊に本屋は格別。先づ讀書階級交通の要衝、例へば銀座の銀ぶら通りとか神田神保町の神ぶら通りの如く、そして足止まりのよい地の利に加へて、店構へは開放的であかるく賑やかなこと、更に生き／＼した新本が景氣よくなるんで、美人の賣子が愛嬌よく立ち廻れば鬼に金棒の如しとは……鹿爪の禪書や倫理書が定めし苦々しい顔して居るだらう。

書籍の利益歩合が一割から三割、雑誌は大抵一割五七分所、雑誌と書籍を混じて先づ平均二割、中に俗稱赤本の子供の繪本や講談本などは五割位儲かるのもあつて、之は小賣店弗箱の一だ念の爲に申すが此の種の本は別に問屋がある。それから教科書は國定教科書販賣所の指定が必要であり、中等學校以上の教科書も亦學校の指定が必要である。おしなべて普通本屋の賣れ具合を云へば雑誌が七分で書籍が三分、即ち七分三分の兼合と云ふ所

所が茲に大いにソロバン玉を狂はせる突發事故がある。即ちカツパライが夫れで、之れが又



却々以て油斷がならぬとは困つた話。そこで店の一角に閻魔の廳の心鏡宜しく大鏡をかけて妙なチヨツカイを試みるものを夫れとなく見張り、イザとなれば忽ち取つて押へる工風も肝腎とは……恐らく之れは生馬の目を抜く市内丈けのことで、じゆん朴な遠隔地方には左様な鏡はまだ御座るまい。

地方もごく遠方へゆくと、定價の外に運賃なるものをねだる本屋がある、例へば定價一圓の本を運賃とも一圓三錢位で賣つて居ることがある、一體運賃は小賣屋の負擔であるから、東京近縣ならば、定價一圓正味八十五錢の本が運賃こめて一冊當り八十七錢位の仕入れ値段であるから、本屋も運賃位は勉強する、それが一度び東に西に百里と離れれば、運賃も忽ち一冊當り四錢も五錢もかゝつて定價で賣つて居たのでは本屋のソロバン玉が少少許り狂ひ出す、そこで遠隔の地方では同業申合せて讀者から送料を申受ける。然し同じ遠隔地でも氣前を見せて運賃を勉強せねばならぬような都市の本屋さんは助からない、即ち東京程カツパラはれぬのは結構だが、運賃に喰はれるから差引トク。

兎も角もかくて月千圓も賣上げれば、本屋さんは純益ザツト二百圓也で、此の不景氣の折柄親子三人水入らずで、晩酌の二本位倒しても貯金が残る商賣であるが、人口がまばらであつたり、無精ものゝ内職やものぐさ過ぎてホコリで表紙をざらつかせるような不熱心なゆき方ぢや却々以てそうは行かない。然し時間的に見れば本屋の賣れるのは正午近くから夜であるから、教科書を賣らぬ限り敢て早起きの必要がなく、ネボスケでも敢て出来る商賣であるとは以て意を強ふすべし。

### 洋服屋の巻

註文服の値段 内閣が斷末魔の喘ぎをして居らうと金解禁が何うならうと、直接財布には無影響だが、痛切なる影響を與へて洋服細民の財布の社會を制するものは洋服代である。金は何時でもナイム大臣が米櫃の心配をすると、同程度に外務大臣たる夫君は洋服の心配をする、元來日本は洋服が高過ぎるなどと慨嘆して見ても安くして呉れる譯でもなし、詮方なく仕立屋へ註文するとか、既製品を買ふとかして間に合はせざるを得ない。

茲では先づ仕立屋から書く。外交員が大きな鞆の中へはち切れる程の見本を入れて持つて來て背廣一着の註文を取つたとする、大きな洋服店には相當生地も揃つて居らうが、群小の洋服屋には殆ど揃つて居らない、ラシヤ屋から、指定された柄を三ヤール弱買つて來て愈々仕立に



かゝるのである、ヤール八圓の純毛品として此生地代二十四圓弱也、之に裏やシンや釦やその他の附屬品凡そ十三圓を加へ、更に工料の十五圓を加へた五十二圓が註文された洋服の原價である、此位の品物なら六十五圓か、七十圓で註文を取つたものと見てよい。結局十三圓か十八圓の利益が上る譯であつて、勉強して六十圓に引受けても八圓は儲かる。

然し外交員が註文を取る時にはそんな算盤は弾かない、生地一ヤールの單價へ八を掛けたり九を掛けたりして「此柄ですと何十圓」と答へる、假へばヤール八圓のものなら八八六十四と出て六十四圓となり、之を七十圓と稱する、それでは高いとお客が二の足を踏むと「では平常御最賃に願つてゐますから六十五圓でやつときましよう」と大勉強振を見せて油をかける、ツイ「それなら頼もう」と云ふことになる。

しかし此掛算も店により場所によつて違ふ、神田のように洋服屋が腐る程あれば、競争が起つてアクトクは掛けられないが、貴顯紳士富豪を相手の銀座などでは百圓以上の洋服の註文を取れば、尤も仕立ては丁寧ではあるが四五十圓は儲かつて、借間の四疊半へミシン一臺据てチク／＼やつてる下級洋服屋をして垂涎三丈に及ばしめる。

既製品は何故安い

背廣一着の工賃十五圓と聞けば素人にも之はチト高過ぎると云ふ感

じを興へる、が洋服屋に言はせると斯う云ふことになるのだそうである。

上着に要する日時一日半チョツキ、ヅボンに要する日時一日半計三日で一日五圓の職工三日間を要するからである。

勞銀指數を見る迄もなく、勞銀の低下しつゝある今日一日五圓の工賃はチト旨すぎる様だが洋服屋に云はせると「遊んでる日數も一年の内には相當見込んで置かねばならぬから此位頂戴しなくては妻子が養へないのだ。と、日當五圓正當論を主張する、又註文取り、假縫ひ仕上げ納めと都合三度も足を運ぶ、斯うした餘計な手間二十時間の代償が更に又此の上洋服代へ加算されるのだから高くなる、就中最も詰らないのは他人の貸倒れを轉嫁されることである。又洋服の月賦拂ひが高いと云ふのも、月賦期間の利子に加ふるに貸倒れの危険を伴ふからであることは言ふ迄もない。

外交員の制度は店によつてそれぞれ相違する。註文總額の割を支給して代金不拂其他の責任を負はせる店もあるし、固定給三十五圓位の外に歩合一着に付二三分與へるものもある。外交員中には自分で縫ひも仕立も出来ないが外交専門で暮らしを立てゝ行く者が可成りある。諸官衙や大會社へ出入する外交員の實入りは可成りなものであるが、何れにも所謂お出入りなるも



のがあつて、新しい會社へセリ込んで、繩張り荒しをすることは非常に困難であると云ふことだ。

仕立屋に云はせると「既製品は身體にシツクリ合はないから見た處が悪い、生地も劣つて居るし仕立もザツであるから早く綻びたり傷んだりする」と非難するが、既製品屋では年柄年中職工に手を開かせないから、注文屋の職工十五圓に比し四圓は安いことになるし、時間の無駄も省けるし、現金賣りであるが故に貸倒れの心配が殆どないから安くても引合ふのである、既製品を自店工場で製造して賣つてるのは大店で、多くの小賣屋は既製品の市へ行つて糶つて仕入れる。此外に問屋が小賣屋を廻つて卸して歩くのもある、地方へは月一回位の割合に問屋から店員を派して注文を取る、既製品は近縣、東海道、兩毛方面の需要も相當多いが、北海道の消化力のあることは驚くばかりで既製品の上得意になつてゐるそうなる。

柳原の古着屋

素通りの客と何ぞ探して歩く客とでは目の配り方が違ふ、ズボンへ目をつけに行くのはズボンを探すと、背廣を睨めて行く人は背廣を探すと、其目配りを早くも見て取つ

て「入らつしやいまし、背廣ですか中にも澤山あります、見るだけ見て入らつしやい」てな掛聲を連發してお客を呼込む、之は安い、アレは似合ふなど、盛んに買氣を誘發する、「之はいくらだ」とお客に口を開かせるようになればモウ半ばは成功、之ですか之は仕立がよいから何十何圓です、一寸着て御覽なさい」とケンかける、「長過ぎれば直ぐ縮めて來ます、何處へ行つても此品が此値では手に入りません」など、雄辯にまくし立てる、お客が高いと云ふ、「いくらなら買ひますか」と來る、「旦那それでは無理ぢやありませんか元が切れます」と泣言も並べらいま五圓買つて呉れとか三圓奮發して呉れとかしつこく絡んで、一圓なり二圓なりセリ上げさせてポイント賣る、結局言ひ出した値段の半分か七掛位、之が東京名物の一つ柳原界隈の既製品屋の商法である。

洋服が今日程流行らない時分には古衣を吊して此式で行つたものであるが、洋服万能時代となつて吊しんぼうも古着屋から洋服屋へと進化し、而も古洋服でなく新の既製品が大部分を占めてゐる。

「あなた高い權利金を拂つて家賃の百圓か百五十圓も出して居れば、少しは儲からなくてはやつて行けませんよ」と言ふ、「又物によつては四五割掛けてあるものもあるが、一割五分位しか



掛つて居ないのもあるから當節はそうく儲かりません」と言ふ、尙又「倍以上掛けたなど、云ふのはズツト昔のことでは今ソナナことありません」とも云ふ、しかし金三十三圓の正札つきの背廣が苦もなく「二十圓に負けときましよう」と來るあたりから考へても可成りの掛値がしてあるらしい。

尤も此街へ來るお客は言値の半値で買へと云ふ頭で來るのであるから、賣る方でも掛値をしなくては商賣にならないと云ふもの、だが掛値の率は店の方針によつて甲乙丙區々であつて、一樣には言へない、中には正札からヤツト五分位しか引かない店もある、概して昔程多くかけなくなり吹つ掛け率が低下して行くことは事實であるらしい、百貨店が繁昌しチエンストアが出來る世の中になつては斯ふした舊式の商法は社會狀態と離反することになり、新式の當世向商法に變遷するのが當然であらう。

高い、安い、負ける、負けぬの小競合ひ宜敷くあつて賣れた品物の總平均の利益は二三割位の處へ落付くと云ふ話である、全部の商品へ正札をつけてある店は比較的掛け方が少ないが、表通りだけの品物に正札をつけて奥の商品に正札のないのがある、之はお客を奥へ引込んで來てさて無正札の品物で人の顔を見い／＼掛引しようとするものであるから、表通りの正札つきは

餘り賣り度ならず、無正札のばかりを賣り度がると云ふことだ。

長かつたり短か／＼つたり柄合ひがお客のお氣に召さないとすれば、「一寸待つて下さい奥から似合ひの」を持つて來ますから」とか何とか云つて隣の店から借りて來て商談を纏めると云ふ便法が行はれることもあるような、商品の人替えをする時例へば合服から夏服へ移らうとする時など資金の薄弱な者は合服をホントに安く、場合によつては元値迄切つて叩いて了ふこともない譯ではないから、時には實際の割安物が拾へることもある。

で前にも言つた様に商品は多く新品であるが、柳原向の商品を特に製造して卸す問題が此界限にあつて其處から仕入れる、又市などもある、何故安いかと云ふと一度に五十枚位裁斷機で裁ち、縫ひも殆ど機械でやつて了ふと云つた工合に大量生産で手が抜けてゐるから工賃が安い、材料も附屬品もそれに相當したものである、一着分はキツチリ一着分で餘裕を見ないから同じ長さの生地なら餘分に製品が出来るなどと云ふ幾つもの理由があるんだぞうな。

小賣店  
神田橋古着市場 神田橋の間のバラックに（和泉橋際へ堂々たる本建築工事中）東京衣類市場があつて日本一を誇つてゐる、此市場は一旦世間から追はれた古着をして再生の歡びを味はしむる回生の靈場である、茲へ集る古着は市場組合員（古着問屋の格）が質屋を漁つて買集



めたものであるから所謂質流れ、中流以下の着枯らしが多い、がしかし花流界から流れ出したものなどの内には金目のものが相當ある。

組合員の店舗は一軒一坪で之へ古着を山積する、お客は市内外の古着小賣人を始めとして近県は勿論のこと、北海道、樺太下りからも態々上京して此處で仕入れて行くのも尠からずあると云ふから、佐賀町の大豆粕市場などよりは豪勢で實用向だ。

豪勢と云へば越後女である、彼女等はあらめや毒消しばかりを賣つて歩くのが能ではない、此市場へ出入して古着を仕入れて國元へ送る、國元には大勢の賣子がゐてそれを賣捌いてタンマリ儲けて分配する、と云つた工合に仕入から販賣迄組織的に出来てゐるから驚く、越後の女は餘程商業的天才の持主である、市場での取引はお客と組合員との相對取引で糶賣りではない又現金取引を原則としてゐる、組合員は四百五十名で一ケ年間の賣上高は一千万圓に達すと云ふから古着だなどゝ馬鹿にしてはいけない、尤も組合員の内百名ばかりは新品を取扱ふ、之はランヤの既製品問屋や織元から手頃の物を直接仕入れてお客たる小賣屋に又賣るのであつて、インパネスやコートやマントや絹物の仕立物造もある、總じて間屋格たる組合員の儲けは平均五六分で一割は御の字、場合によつては元を切らして賣ることもある。

一日に出入する人員は何の位あるか調査した事はないそうだが、餘程多數なもので盛る時には肩々相摩する有様である、お客は古着の小賣屋に限つたことはない、誰でも買へるのであるが素人と見れば高く吹掛けられる虞れがあつて、古着に心得がなければ良いものはなか／＼手に入らないと云ふことである。

「不景氣が深刻になると古着がよく流れ出して安く仕入れられるから、古着屋さんこそ不景氣時代に持つて來いの商賣であらう」と素人方はお考へになられる様であるが、それは大間違ひで不景氣になれば古着が出なくなる、又お客の買方も少いから矢張り世間並に不景氣の洗禮は受けるものだと云ふ、案ずるに着られるだけは着る、新品を買ふにはより以上のお頂目が要るから一六銀行へ入れたのも成るべく流さない、と云ふ寸法なのであらう。

**古着の洋行** 明治時代には木號物が盛んに市場へ現はれたものであるが、今は木綿物の現はれ方が非常に少くなり銘仙、毛斯倫などの中等衣類が多くなつた、之は呉服屋で銘仙毛斯の賣切がよくなつたことの反映である、古着でありながら實質本位のものよりも流行物の方が賣り良いが、流行が餘り激しく變るので營業がしにくくなつた嫌ひありと嘆じてゐる。

東京の人は見得坊なるが爲めに金廻りが聊か悪くとも、ア、古着かと鼻の先であしらつて了



ふ傾向が段々濃厚になつて来た、之では市内の古着屋さんも次第に尠くならうと云ふもの、現在ですら衣類市場の賣行から見ると東京が四割の地方が六割とあつて、地方筋が優勢である。小賣屋の儲けは三割四割五割に及ぶものもある代りに、一割位にしかならないものもあつて結局二割五分見當に落付くであらうと組合では見てゐる、儲けの率のいゝのは花柳界や相場街相手の商人で、つてを求めて潜航艇式に賣歩くのである、新橋や柳橋など一流の花柳界から流れ出した古着は田舎の花柳界又は玉の井、龜井戸と云つた所へ更に流込んで大に巾を利かすのだそうだから重寶なものである。ハッピーコートが米國へ渡つて珍重がられることは皆様先刻御存じだが近年は日本着物の古着があらへ渡つて行つて、日本固有の國粹振りを發揮してゐるそうだが、男物では黒の五ツ紋の紋付、女物では裾模様で他は縮緬や羽二重と云つた種類、何れは新奇を好むモダンがかつた人達が時たま着るのであらうが、輸出額は年々増える傾向である、洋装流行の日本から日本着物而も古着を買つて行つて着ようと云ふのだから世間は皮肉に出來上つてゐる。

呉服店の巻

其の儲け工合 デパートは扱て置き普通の小賣屋は織元からは仕入れない、日本橋に群を爲して居る問屋の御用聞きが見本を持廻つて小賣屋から注文を取る、問屋を大別するとモスリン絹布綿綿布、中形、近在品(レーヨン瓦斯物)に別れ、又營業方針には現金問屋と貸賣屋とがある、貸賣屋は月末勘定が多く、現金屋はいくらか安い、震災直後は現金一天張りであつたが漸を追ふて信用取引が恢復したから此點だけは小賣屋も聊か樂になつた、とは云ふものゝ賣行が不良で且口銭が薄くなつたから、小賣屋の懐には寒風吹き荒ぶ景色のものが多し。

處で小賣呉服店の儲けは何うかと云ふに、場所によつても店によつても違ひ、全く千差萬別だが、大體左の如きものであらう。

木綿物一割乃至一割五分、絹布約三割、毛斯無地物一割、同柄物一割乃至二割、襟地上等品約五割、レーヨン品二割、瓦斯物二割乃至三割、さらし五分以上平均して二割見當。

此内モスなどは以前は四割位儲けたものであるが、今は一二割見當に低下した、併し賣行がよくなつて品物の廻轉率が上つて来たから薄利でも我慢出來ると云ふもの、レーヨンは天然絹絲に酷似してゐて誤間化しが利いたから以前は五割位せしめたものであるが、今は普及してお客様の自も肥えたためさうはアクドク取れない寸法、襟地の五割が儲けの親玉である。



問屋ばかりが思惑をするのではない、震災前迄は小賣屋も思惑的の仕入を敢行したものである、然るに震災後流動資本が貧弱になつて思惑をし度くも出来ないことになつたと同時に、物の低落による危険を伴ひ易い時代であるから、蠻勇を奮つて見込的の仕入をするものがなくなつた、必要に應じて少しづつ仕入れる、思惑的興味は尠くなくなつた代りに平靜に營業が續けられて行く。

デパートは勿論のこと一寸した呉服店では「市價調」を行ふ、市價調とは他店の品物が高いか安いかを調べて歩くことで、荷受の際検査を行ふものが之に當る、又女事務員を派して實物を買はせて來ることもある、他店との賣値の均衡を保たふとする努力の現はれであつて、調査員の女事務員君は差向き騎兵斥候の役目を承るのである。

特價品賣出の内幕

呉服屋が一番頭を悩まされるのは流行である、流行遅れとなれば商品價値を著しく減ずるから賣ることに焦燥を感じる、仕入れただけの數量を其時期中に處分することが困難と見るや忽ち「見切品大賣出し」の看板を店頭高く掲げて鉦太鼓で客を集めるしかしそれでも賣れなかつたら「殘品大特價提供福引大賣出し」とか何とか云つてお客を吸収して賣りつける。勿論一割なり二割なり安いのであるから、大抵は賣盡すことが出来るそうだから良くしたものである。

此見切品は殆ど儲けなしの元價賣りであるが、中には元價を切込むものもある、然し十種の内三種位安い札をつけて安く見せ、七種には以前通りの高い札をつけて賣る狡猾な手段も行はれないではないからウツカリすると引掛る、又見切品の中へ一不や二不や三不を混じて置く事がある、一不二不三不と云ふのは染むらがあつたり疵があつたりするもので、満足な品ではない、之を特價品に混ぜて見切るのであるが、一不三不となると疵が大きいから信用ある小賣店では賣らない、信用ある店で買ふのが安心と云ふもの。特價販賣は夏物ならばまだ夏物の需要が残つてゐる内に行ふが、愈々賣れ残つたものは來年時季が來れば早々特賣する、流行が遅れることと、資金を寝かすことを嫌ふが爲めに極力その年の内に處分するのが普通である。「時には要らないけれども氣に入つたから買つて置かう」など申す餘裕のあるお客さんは今や全く影を没して愈々必要に迫られなくては買はず、今日註文して明日迄に仕立て、呉れるなどと急ぎ込むお客が多くなつた邊から考へても世の中の不景氣さが知られる、ことほど左様に不景氣であるが故に特價品ばかりが賣れる、特價品以外の物は振向いても見ない、肝腎の儲かる品が賣れず儲からない品ばかりが賣れて行くのであるから、踵をついでお客が來る盛況を呈



してもトント儲からない、元來が殘品の處分であるから外の品は賣れなくてもよいようなものではあるが、其處が矢つ張り慾の世の中、特價品以外のものも精々買つて貰ひ度いのだが、そのうはお客が卸さない、大賣出しの賑々しさにも一沫の悲哀を感ずることがあるそうだ。

人絹織物 (1)

人絹と天絹 その昔唐の國に堯といふ帝王があつた。帝王は寵姫の一人が蠶を育てその絲を紡ぎ織つたのを見て「絹」と名づけたと傳へられるが、之が東洋に於ける蠶絲業の淵源であつたらしく思はれる。その養蠶が吾が國に傳來し家庭工業から漸次機械工業へと發達して、遂に現在は輸出品中の首位となり世界の生絲國として自他共に許すに至つたが、茲に人造絹絲といふ大敵が現はれ出で、年々その販路は奪はれて行くと云はれ旁々之は今斯界注目の的となつて居る事は申す迄も無い。

併し、値が安くて見た眼の綺麗な人絹が生絲の領域を侵しつゝある、とは人絹そのもの、製造に携はつて居る者の云ふ事であつて、需要者に對し直接販賣する呉服屋若くは百貨店の方では必ずしもさうは云はない。生絲で織つたもの、即ち本當の絹織物と人絹織物とを較べると白

金に對する洋金のやうで、殊にその天然絹絲に劣る點は一種異様な光澤を有するばかりで、彈力性に乏しいから皺がより易く且遙に重みがあるなど實用價値も丸で異ふ。故に從來の絹織物の領域は多少侵される事があつても決して奪はれるやうな事はない。只茲に綿織物より稍値段は張るが見た眼の體裁の良いものを着られるから、寧ろその方の顧客を引きつけて居る、従つて信用ある百貨店内部の商品分類は、人絹織物を絹織物の中に加へず木綿物の一部に入れてある。結局之等兩者を侵した程度を強いて云へば木綿三割絹一割と觀るが最も妥當であらうと云はれて居る。

昔は少し位流行が遅れて居てもその品物の質を着たが、現代は一般の風潮が流行を追ふに忙しく質よりも寧ろ柄を着る。勿論富裕なる階級は質と柄と並立したものを買ふ事も出来るが、その出來ない人達は止む無く質の絹に似て居る丈けで満足し、柄の流行を求むるに止めるより外致し方が無い。即ち此人絹織物はそれにピッタリと當はまり遂に今迄の木綿の領域を三割も侵して尙ほ年々驚くべき勢を以て消費が増加して居るのである。

人絹製造の歴史 一體此の人絹は何時何處で作られ、そしてどんな變遷を経て來たものであらうか。文献に依ると一七三四年佛蘭西の昆蟲學者レオームル氏は蠶が體内の粘液を吐出し、



その粘液が空気に觸れるや直に固定絹絲となる状態に暗示を得て、同じ性質の粘液を動物に依らず機械力で吐出せしめて絹を作らうとしたが之は不成功に終り、それから百二十年後の一八五五年に之も佛蘭西ローザンヌの人アンドウマー氏が桑樹の若枝の鞣皮纖維を取つて之に化學的處理を加へ粘稠液を作り細い管を通して垂らしたのを直に乾燥して捲き取る方法を案出し、英國の特許を得たのが人絹のそも／＼の始めださうである。

その後一八八四年に之亦佛蘭西の伯爵シャルドンネ氏が、前記アンドウマー氏のそれ以上に複雑した方法で硝化纖維素の溶液より連續せる絲を紡出する事を考へ、その作られた製品は一八八九年巴里の博覽會に出品し、併せて會場内でその製造過程をも示したので、時のパリジャンの大喝采を博した。之に勢いを得て二年後の一八九一年ブザンソン氏がその工場を作つたのが即ち世界に於ける最初の人絹工場である。

それから暫らくの間佛蘭西を中心として歐洲各國では大分此の種の人絹が作られたが、一九一〇年頃は原料及び勞銀の昂騰に各工場が經營困難に陥つて、獨り白耳義のチューゼツツ會社のみがどうやら満足の成績を得て居つたが、之は當時他の國よりも白國內で酒精やエーテルが四割方安かつたからでもあらう。兎に角シャルドンネ式人絹製造法は可成り永く續いたが、そ

の後酸化銅アンモニア法から木材パルプを原料として作るヴキスコース法が発見された。此のヴキスコース法は前二法に比して原料費が極めて安いので、世界的に普及され現在日本の人絹工業の如きも殆ど此の方法に據つて居る。その他醋酸纖維素法、硝子で作る礦物性人絹、蠶を一旦殺してから化學的處理を加へて作る絹等色々あり、就中醋酸纖維素法に依る絲は最も天然絹絲に似て手觸りに温みがあつて耐水力も強いが、生産費が非常に高い爲め只單に此の様な人絹製造法もあるといふに止まり、まだ商品的の價値はない。

**人絹製造の色々** 次には人絹の流行的價値を述べて見やう。元來すべての織物は意匠的に價値のあるものと組織的に價値のあるものとに岐たれて居る。意匠的に價値のあるものとは染の技術を指し、その色彩、模様、柄行等色々な表現の様式を以て、見た眼の要求を満さんとするのであるが、同時に織物それ自身の組織も亦精巧を極め手觸り、肌觸り、肉付、風味等悉く心地良いもので無ければならない。即ち立派な染と織とが交錯する事に依つて始めてそこに流行的價値が見出されるのである。

處が現在生活を作るべく簡易化しやうとする傾向の一端が現はれたのか、染織品の好みはゴツタ返したものより薩張りしたものが喜ばれるが、觸れた感じは必ずしもさうではない。經



緯に大小不規則な糸を交錯して、非常に複雑な織目を見せたものを求めて居る。之も亦聽ては變つて行くであらうが、兎に角常に變轉極まり無い流行界の主流に投じ然も多數民衆生活の基調に合して行くには何よりも先づ値の安いそして織維の綺麗なものをも求めねばならない。人絹の流行價値が認められて來たのは取りも直さず茲である。さうした流行的價値を發揮し、一般の要求や嗜好を満たしつゝある目下の衣服及附屬品としては

各種のシヨール、天鵞絨類(コート地肩掛地) 甲斐絹(裏地) 羽二重及斜子、モスリン、縞子(帶地及裏地) 綾絹、綴子地(裏地帶地其他) 文明絹(裝飾品及裏地) 琥珀類(博多九寸同八寸袖口衿等) 人絹經縮緬(桐生足利方面のレーヨン綿紗類) 紋着 尺八端織、紋織襟地、ワイシャツ紋織帶地

此の外夜具及び裝飾品としては

座布團地、夜具(縞又は友禪) 卓子掛(紋羽二重地及綾) 窓掛(同紋織及捺染) 蚊張、クツシヨン椅子張生地(紋又は平羽二重等の地) 演藝場引幕等あらゆるものに人絹が應用されて居るが、只茲に從來天絹織物で最も民衆的と云はれる銘仙

のみは洗ひ張りや仕立替へを再々やらねばならない爲め絶対に人絹を使つては居らない。

人絹高級製品

人絹織物が從來の織物の領域を奪つた程度は、綿織物で三割、天然絹絲の織物で一割であると述べたが、兎に角本物の絹織物には矢張り獨特の味があつて、殊に値段を顧みず質本位に買はうとする人達を得意として居る爲めに却却その領域を奪はれる事はない。然らばその綿織物の三割に對する一割はどうして侵されたか、又どんなものに使はれて居るか

と云へば、之は複雑な織目を見せる技工的方面から要求された結果に外ならないのである。

例へば高級品のコート地など、天然絹絲ばかり使へば、色彩も兎角單調に流れ易いのであるが

之に多少なりと人絹を交ぜると一方は動物性纖維、一方は植物性纖維であるが爲めに、同じ染料の中に浸しても一方はよく染り一方は染らぬものがあるので、同時に二様の色を出し、然も染めに手數と費用とを省いて特殊な光澤を出し反つて天絹の品位を高める。又織目の複雑さを出す爲めに、從來天絹を何本も集めて太いものにしたのを交ぜる事があつたが、之が人絹だとその儘若くは五本の處は二本にして織り込み、天絹や人絹のみのものには求められない一種微妙な味を出す事も出来るし、更に又天鵞絨のシヨールなどを作る時、人絹を交ぜて織つたものを薬品で人絹だけ溶かせば一層複雑な模様を出せる。或は又婦人服の如きも、高級品になると



却て天絹ばかりのものは無く前と同じやうに複雑な織目を出す爲めに交ぜられて居る。

要するに之等は出来上つた織物の値段の關係では無く、人絹の本性を利用して織物の品位を高める爲めに使ふのであるから、その量も大したものではない。若限度を超えて使つたらばそれは既に高級品としての價値を失つて中以下の商品になつて仕舞ふ。故に今後人絹はその販路を主に上層に求めるより中以下の方面に開拓して來る事が想像されるのである。

人絹の見分方

人絹の爲めにその販路を三割も奪はれた綿織物界にあつては、瓦斯絲よりもずつと體裁よく見せられるといふ點でその代りに使はれて居ると、瓦斯絲と天絹との交ぜ織品に天絹の代用として使はれるのとあるが、大體人絹は弾力性が無くて水に濡れば弱い爲めに全部天絹や瓦斯絲の代用とする事は不利益であり、従つて普通人絹のみの織物と云はれるものでも必ず幾分か生絲や綿を交へて耐水力や弾力を補充してある。

一二人絹應用の綿織物を見ると、例へば綿縮緬の如きは從來經に天絹緯に瓦斯絲を用ひて居つたのを經に人絹を使つてあるが、その強い光澤のために見た眼は天絹交織の綿縮緬よりも遙に綺麗でおまけに値段も安く出来る。又新御召なども從來のものは縞絲に天絹を使つて居つたが、之を人絹でした爲めに體裁も良く又安い物を賣れるやうになつたので、販路は大分殖

え従つてそれだけ綿織物の領域を侵して居る。之等は一寸考へると實質的に天絹の領域を奪つて居るやうにも見えるが、矢張り綿織物の販路を擴げると共に綿織物の領域を侵して居るのである。

或は又綿縮緬の中でも、縮縮緬若しくは壁縮などになると、之も亦從來は縦が絹で緯が瓦斯絲で織つて居つたが、元來之は夏の織物であるから、天絹だと肌にベタついて然も體裁が頗る悪い。又絹だと出来上りの値段を顧慮して量を尠く使ふが、人絹は纖維が太いのと値が安いから十二分に使ふ事が出来るので、出来上つた品物は極めて見た眼が綺麗である。従つて、昨今は天絹入りの縮縮緬よりも人絹入りのものが喜ばれるやうになつて來た。

兎に角人絹は僅かの年月の間に綿織物の領分を三割も奪つた事から今にも人絹ばかりの世界になりさうにも想はれるが、斯界の權威者西田博士などは決してさうは云はぬさうである。現に南洋方面に輸出される綿布はその品物の品を出す爲めに人絹を入れてあるが、之れは高級品への人絹使用の場合と同じ意味で高級品は矢張り天絹が主、綿織物はどこ迄も綿が主で人絹は常に従の立場にあり、人絹の使用が増加すれば同じ割合で天絹織物や綿織物の使用も増加し各自それ自身の特徴を以て進むから決して人絹のため天絹や綿が無くなる事はないと説いて居る



さうである。

人絹織物の値段

生絲は御承知の通り農家が、一通りで無い苦心と犠牲とを拂つて繭を作り、それを製絲家が買蒐めて絲にする迄の生産費が非常に高い上に、織物に織るには更に復特殊な注意と熟練とを要するため工費も仲々高くつく、處が人絹は現在の製法即ちヴキスコース法に據れば木材パルプを原料とするので、第一に原料費が安く然も生絲が農家から製絲家の手を経て來るのに對しその工程が一箇所で出來且大量生産であるから、生産費も生絲よりは低廉で、従つて出來上つた織物の値段も格段の差がある事は申す迄もない。

例へば小紋縮緬の如きは生絲で織つたものは反三十圓から三十五圓もするが、人絹だと僅かに六七圓から十圓で手に入れる事が出来る。最も多く人絹が使はれて居る帯地も、交織などは生絲の入つて居る程度又は品物全體の構造に依つても多種多様であるが、本絹物が二十圓とすれば人絹のみのものは七圓内外からある。博多の片側帯でも天絹は十二三圓出さねばならないが經緯共人絹になると、京都産で五圓、桐生産で四圓位、先づ以上の例に依るに人絹織物は天絹織物の約三分の一と見て差支無いであらう。

此のやうに値段の差がある爲めに、從來天絹織物を買へなかつた人が木綿の變りに人絹織物

を着て満足して居るのである。併し只茲に流行的見地と値段とを結びつけて考へると、大體今迄の流行は質本位であつたが、それは何時の間にか柄本位になつて、質はメリンスでも三四圓離れて見ると本物の友禪かと思ふものが出來て、同時にその變遷は目まぐるしい許りに變つて居る。そこで一般の需要者は三十圓の帯を買つて三年しめるのを、十圓の人絹帯を毎年一度づゝ買つて流行に遅れまいとして行く傾向を生じやしないかと思はれるが、百貨店邊りでは今迄天絹帯を買つて居た者は飽く迄天絹帯を買つて人絹は買はぬと語つてゐる。

百貨店と人絹

人絹は値の安い賣物であるといふ事が一般の先入主になつて居る爲めに今以て之に對する輕侮の念が去らない。併し當業者が不斷の努力と、更に近年は人絹織物を贅澤品と見立てゝの十割輸入税などに刺戟されて實に長足の進歩を遂げ、最初のやうに例へば羽織の紐にしたのが掛けて居る中何時の間にか艶が無くなるなどといふ非道いのも見當らなくなつた。洋傘なども初めはケバ立つたりたるみが出來たりしたが、今はそんなのは人絹の中でも餘程悪いので無いと見當らない。それ丈け又素人には見分けのつかぬ程精巧なものになつて居るのである。

そこで簡単な人絹識別法を挙げれば、先づ天絹に比して異様な光澤を發し、觸れた感じも天